

第 17 回

宮城県考古学会阿武隈水系研究会 発表予稿集



2025 年 5 月 11 日（日）

白石市中央公民館

主催：宮城県考古学会阿武隈水系研究会

目 次

	頁
宮城県白石市越河西屋敷小屋館跡	1
～最新の航空レーザ測量の成果を用いた縄張り調査～	
白石市教育委員会 松田進・宮城県考古学会 村上景亮	
相馬氏第十六代当主義胤の正室“越河御前”	9
越河歴史探訪会 八島喜一	
『吾妻鏡』で読む阿津賀志山の戦い	17
国見町あつかし歴史館 笠松金次	
福島県の城館 近世初頭相馬氏の本城	27
井沼千秋	
天正日記と野臥（のぶし）の山里	35
- 『伊達天正日記』に残る白石市小原地区の謎 -	齋藤博俊
宮城県南部の蛇像	43
石黒伸一朗	
大河原の石碑	53
大河原町 遠藤慎一	
白石地名考－石に託された物語－	57
大蔵山石文化研究所 山田政博	
白石 水物語	65
白石水路研究会 佐藤充・立田基生・服部和憲	
中学校社会科に見る单元「身近な地域の歴史」の教材開発	83
水稻に必要な水利に関する歴史的事例を生かした選択的カリキュラムの構想	
東北福祉大学教育学部 大脇賢次	
私達の郷土を走っていた幻のSL－仙南温泉軌道－	91
大河原町自作視聴覚教材制作グループ 佐藤富雄	
ペルー移民117年の軌跡	101
－ 『Miyagi, Centenario de la Inmigración de Miyagi al Perú (1908-2008)	
35 Aniversario de Perú Miyagi Kenjinkai (1973-2008)』を中心に－	
ペルー国立シカン博物館 相原淳一	

みやぎけんしろいししこすごう にしやしきこやたてあと
宮城県白石市越河 西屋敷小屋館跡

～最新の航空レーザ測量の成果を用いた縄張り調査～

松 田 進（白石市教育委員会）

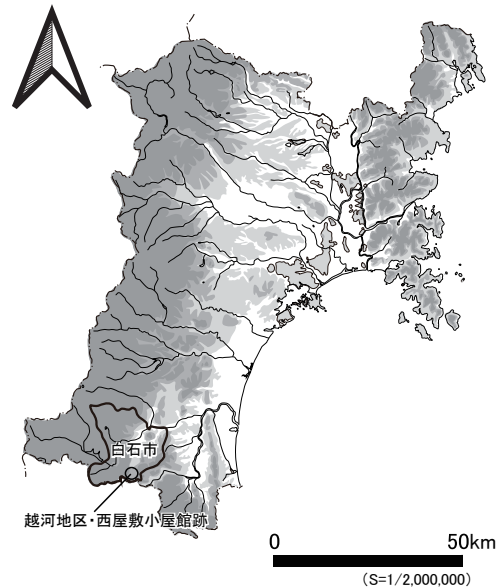
村上 景亮（宮城県考古学会会員）

遺 跡 名 西屋敷小屋館跡（宮城県遺跡番号 02454）

所 在 地 しろいししこすごうたいらあざこやたて 西屋敷、こすごうあざさくらおかやま 越河字桜岡山

調査年月日 令和5年3月20日

令和6年7月26日、〃9月8日 〃12月30日



第1図 宮城県白石市位置図

1. はじめに

西屋敷小屋館跡は、越河駅の南東約1.7km、阿武隈山地から北西方向に伸びる標高約240mの尾根筋に位置している。多数の平場と堅堀に接続する2条の堀切で構成されている（第4図）。

本館跡が位置している越河地区は、白石市の南端、宮城県と福島県の県境に位置している。この地区は奥州街道が通り、江戸時代には仙台藩の御眼目番所が置かれるなど、軍事・交通上の要衝であ

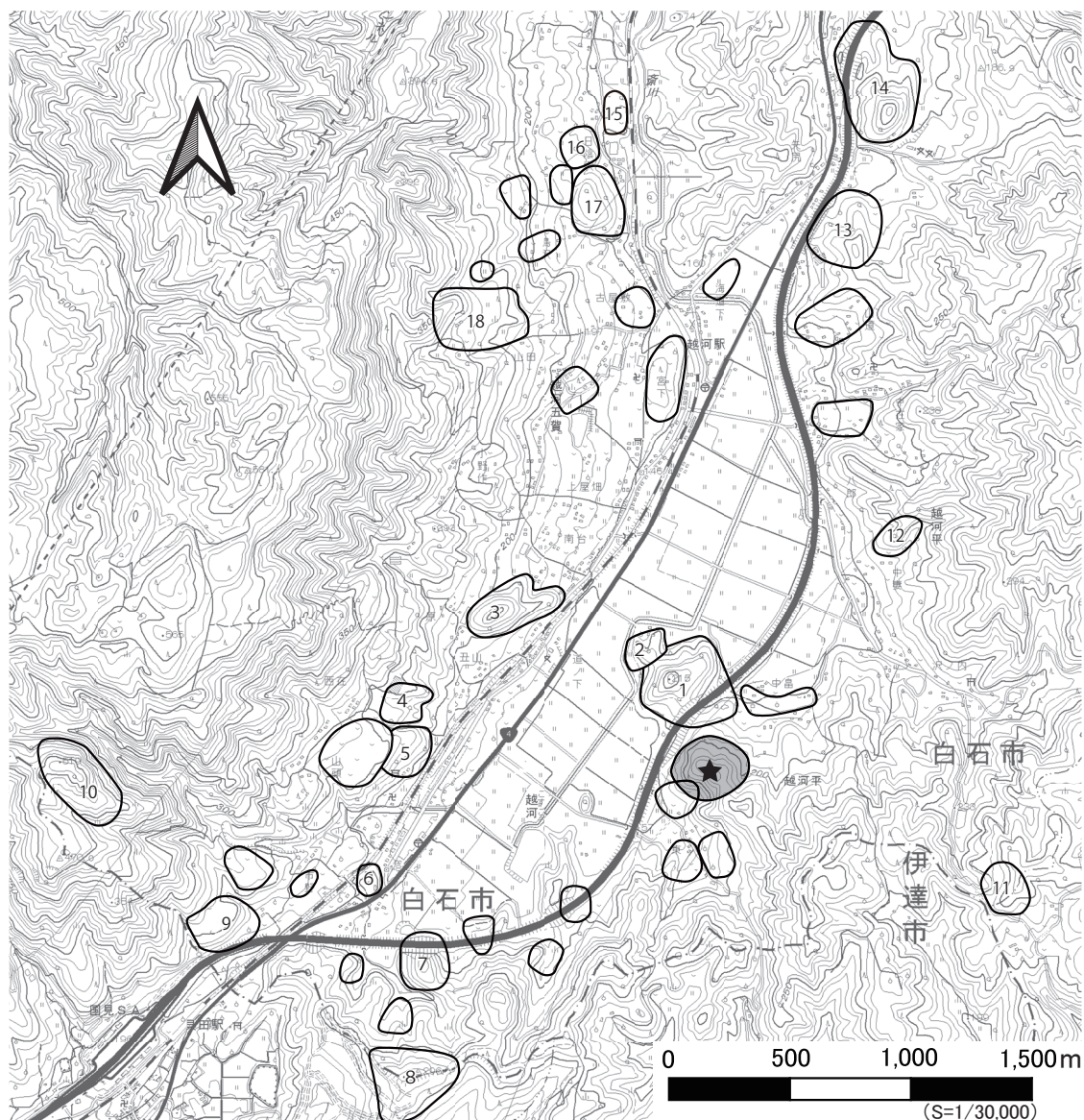
った。現在も東北自動車道、国道4号、東北本線など主要な幹線が密集して通る。現状市内で城館跡が最も多く確認されている地域であり、本館跡を含め、現在19城確認されている。これらは奥州街道を望む丘陵上に位置している。

本館跡は過去に複数の研究者によって存在が指摘されていたが、遺跡登録が行われていなかった。令和5年、白石市教育委員会が改めて確認し、遺跡登録を行った。遺跡登録にあたり、最新の航空レーザ測量の成果を用いて縄張り調査を行ったので、本論ではその成果を報告していく。

2. 西屋敷小屋館跡の歴史

西屋敷小屋館跡の名称・館主等を記載した中世の史料は確認されていない。近世の史料では、明和9年(1772)に^{たなべまれふみ}田辺希文が編さんした『^{ほうないふどき}封内風土記』「平村」の項に「小屋館」、安永年間(1772～1781)に^{たなべまれもと}田辺希元が編纂した『^{ふどきごようかきだし}風土記御用書出』「平村」の項に「西屋敷上小屋館東西三間程南北五拾間高サ三丁」と若干の記載がみられる。

先行研究として、まず紫桃正隆氏が踏査を元に規模や構造の報告を行っている（紫桃1973）。菊池利雄氏は、周辺の馬牛館跡・笹森小屋館跡と関連し踏査を行い、本館跡を「小屋館」として縄張り図の作成を行っている（菊池2000）。また、菊池氏は『^{だてせいとうせいじこう}伊達正統世次考』「天文十五年十月一日条」の項に記載がみられる「小屋」を本館跡とする考えを示している。



3. 調査の方法

本館跡の縄張り調査にあたり、宮城県土木部防災砂防課が実施した、航空レーザ測量の成果を用いて縄張り図作成を行った。使用した成果品は、1 mメッシュの標高データで作成された赤色立体地図(第3図・第6図)と1 mメッシュの標高データが記載されたCSVデータである。赤色立体地図は、地形の凹凸を面で表現することに特化し、図内に形成された傾斜変換線を読み取ることで、地形の起伏を容易に把握することができる。藪で覆われ、遺構を確認できない場合であっても、この図があれば、どのような地形が瞬時に判断することができる。この地図を使用した城館跡などの顕在遺構の把握の有用性は、複数の研究者によって指摘されており(相原他 2019、大下 2021)、本市では初の試みであった。

赤色立体地図でも見えない微細な地形を図に書き込むため、CSVデータを加工し作成した等高線図を併用した。等高線図は、無償で提供されているGISソフト(地理情報システムソフト)「QGIS」を使用してCSVデータを加工し、1 mを主曲線とする25 cm間隔

の等高線図を作成した。線の太さは主曲線を 0.2 mm、間曲線を 0.1 mm にし、縮尺を 1,000 分の一、A 4 サイズで出力した。

調査の手法として、現地へ行く前に赤色立体地図で地形を確認する。その後、赤色立体地図と等高線図をもって現地へ行き、確認した遺構を等高線図に直接書き込んでいくという手法を用いた。

4. 遺構の観察所見

平場 1 は、城域の頂部に位置する南北約 19.0m × 東西約 17.0m の楕円形の平場と、周辺に並ぶ複数の小平場で構成されている¹。頂部の平場と周辺の小平場は、ともに整地が行われている。南東方向の尾根筋は、2 条の堀切 A・B で断ち切られている。堀切 A は上幅約 10.0m、底面幅約 2.0m、深さが北側上端で約 2.75m である。堀切 B は上幅約 6.5m、底面幅約 2.0m、深さが北側上端で約 1.0m である。

平場 2 は、平場 1 の北西方向、複数の小平場を挟んだ位置にある。ほぼ整地は行われておらず自然地形に近いが、尾根筋の先端となる北西部に複数の小平場が並ぶ。

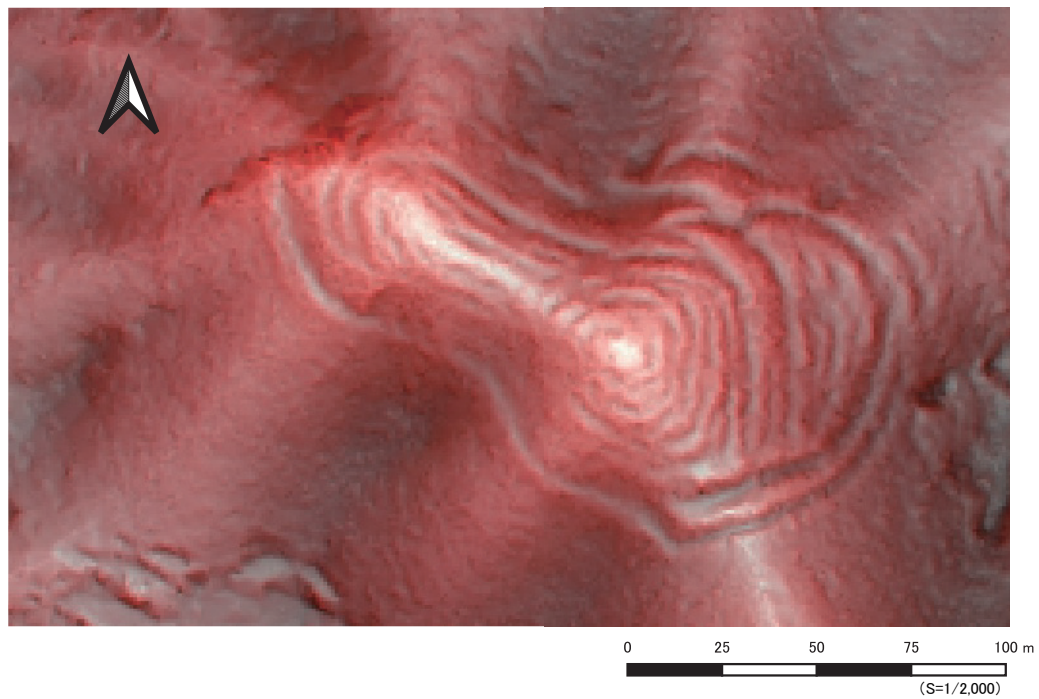
平場 3 は、平場 1 の南西側を取り囲むように、平場 1 から一段下がった位置にある。平場は整地が行われており、南端にて堀切 B から伸びる堅堀と接続している。崩落して分断されたと思われる北側には、西方向に伸びる犬走り状の通路がみられる。

平場 4 は、平場 1 の北東側を取り囲むよう、平場 1 から一段下がった位置にある。全体的に整地が行われている。南端は堀切 A から伸びる堅堀の手前から平場が始まっており、北端は小平場を一つ挟み、平場 2 の下まで伸びる。中央部でスロープ状に下り、一段下の平場 6 に接続する。

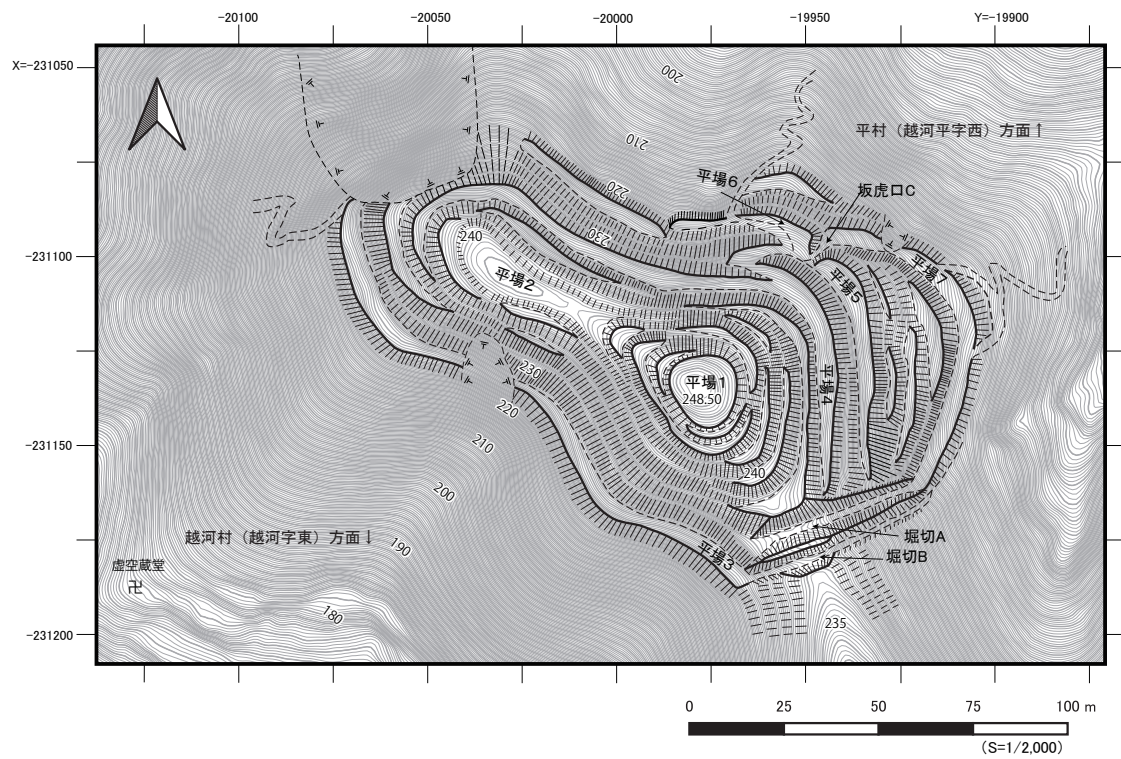
平場 5・6 は、平場 4 から一段下がった位置にある。どちらも全体的に整地が行われており、平場 5 の東側一段下がった位置に小平場が 4 つある。平場 6 の北端には、北方向に伸びる通路がみられ、平場 4 から伸びるスロープ状の通路に接続する。この通路の東側には、平場 7 に接続する坂虎口 C が設けられている。

平場 7 は、坂虎口 C に接続する位置にある。全体的に整地が行われている。南端で堀切 A から伸びる堅堀が接続しており、平場端に施されている切岸下端に堀切 B から伸びる堅堀が接続する。北側には北東方向に伸びる通路がみられる。

¹ この度の報告では、小さい平場も数えてしまうと数が多くなってしまうため、メインとなる大きな平場の周辺に位置する小さい平場も含めて 1 つの平場としている。



第3図 西屋敷小屋館跡 赤色立体地図



5. 考察

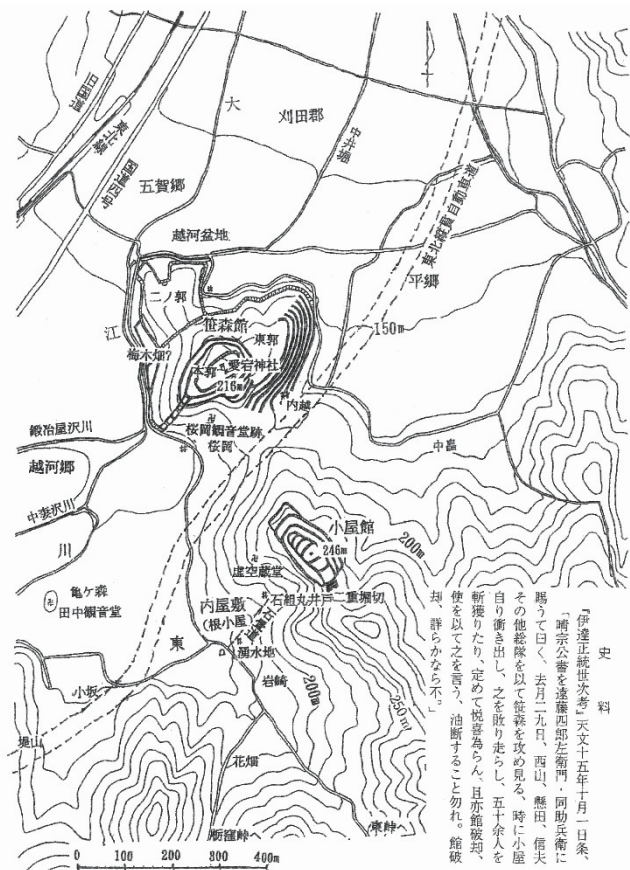
本館跡は、平場 1 と尾根筋で繋がる平場 2、小廊と考えられる周辺の小平場で構成される主郭と、主郭を取り巻くよう複数の帯曲輪状の平場で構成された城館と考えられる。規模は、南北約 105m、東西約 160m である。

平場 1・平場 2 で構成される主郭は、最も標高が高い平場 1 を中心に、小郭を複数配置することで平場を造り出している。平場 2 は大部分が自然地形のままであるが、西方向で平場 3 に接続する犬走り状の通路の正面に平場 4 と二段の小郭が配置されている。西方向に伸びる犬走り状の通路は、現在東北自動車道によって寸断されているが、北西方向に位置する笹森小屋館跡・愛宕館跡への連絡路であった可能性がある。

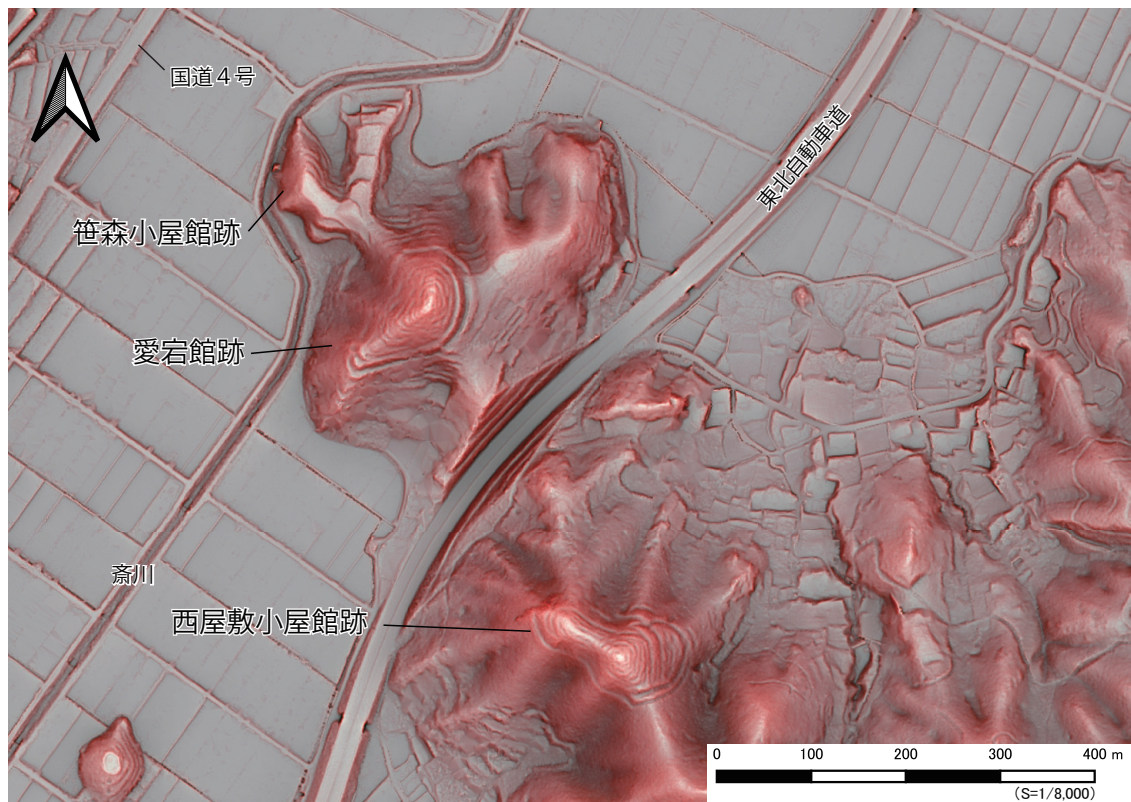
本館跡の登城路は、菊池氏より南西側、かつて越河村が位置した越河字東から主郭に至るルートが想定されている（菊池 2000）。菊池氏は、本館跡と隣接する南西側の斜面上に「内屋敷」と呼ばれる場所があり、作業道が本館跡の方向に伸びているとしている。また、越河字東に位置する集落内には丸森方面へ至る間道が通る。菊池氏はこの点から「内屋敷」と呼ばれている場所が本館跡の根小屋であり、南西側から主郭に至る道が大手となると指摘している。しかし、菊池氏が指摘する作業道は、「内屋敷」地点を登った先の虚空蔵堂の周辺で行き止まりとなり、明確な道が確認できず、急斜面を登らなければならない。また、急斜面を登った先には帯郭状の平場 3 しかなく虎口は確認されなかった。

かつて平村が位置した越河平字西から主郭に至る場合、平場 7 の東側に接続する道から主郭を目指す。北東から主郭を目指す際は、平場 7 に接続する通路から平場 7 を通り、坂虎口 C・平場 6 を経由して平場 4 に到達する経路が想定される。本館跡に複数つくられている帯曲輪状の平場の内、平場 4～7 は、北東方向につくられている。本館跡では、唯一と思われる虎口がこのルート上にあり、主郭に至るには多くの平場を経由する必要がある。また、『封内風土記』や『風土記御用書出』では、本館跡は「越河村」の項ではなく「平村」の項に「小屋館」と記載がみられる。これらの資料は近世に編さんされており、本館が機能していた時期と村落の境界が異なる可能性もあるが、本館跡が笹森小屋館跡・愛宕館跡が帰属する越河村ではなく、平村に帰属していたとも考えられる。

以上の点から、本館跡の大手は北東方向で、平場 7 に接続する通路から平場 7 を通り、坂虎口 C・平場 6 を経由して平場 4 に到達する経路が登城路であったと考えられる。



第 5 図 笹森小屋館跡関連周辺図（菊池 2000）



第6図 西屋敷小屋館跡とその周辺の赤色立体地図

6. おわりに

今回の調査によって、本館跡は従来指摘された範囲の北側にも平場が複数位置し、坂虎口と思われる遺構があることが判明した。また、坂虎口の位置から、北側の越河平地区からの道が大手道あったと想定される。

この度使用した1mメッシュで作成された図面は、従来国土地理院で公開されていた5mメッシュの標高データの25倍の標高点密度を持ち、より細かな土地の起伏を表現することができる。従来の方法では、遺構の範囲を判断するのに時間がかかってしまう。あらかじめ全体像が見えるのは非常に効率的であり、その有用性を強く感じる事ができた。今後も、これらを活用し、新規の顕在遺構の確認、および城館跡の縄張り調査を行っていきたい。



1. 西屋敷小屋館跡遠景（西から）



2. 平場1（西から）



3. 平場2から平場1に至る小平場（西から）



4. 平場2（北西から）



5. 堀切 A（西から）



6. 堀切 A に接続する縦堀（西から）



7. 堀切 B（西から）



8. 坂虎口 C（南西から）

写真図版 西屋敷小屋館跡と地上顕在遺構

謝辞

報告にあたって、航空レーザ測量の成果を提供していただいた宮城県土木部防災砂防課、データの活用等ご教示いただいたアジア航測株式会社、宮城県教育庁文化財課黒田智章氏、木村太一氏に記して感謝申し上げます。

※第1図は松田・村上作成

第2図は電子地形図25000〔国土地理院〕を使用

第3図・第4図・第6図の元データの出典元は以下の通り

宮城県土木部発注

「令和4年度社防砂調309-B01号 土砂災害基礎調査航空レーザ測量業務委託」

「令和4年度社防総砂309-B01号 土砂・洪水氾濫対策航空レーザ測量業務委託（その2）」

引用・参考文献

相原淳一・谷口宏允・千葉達朗 2019「赤色立体地図・空撮写真から見た城柵官衙遺跡-宮城県石巻市桃生城跡・涌谷町日向館跡とその周辺-」『東北歴史博物館研究紀要』20

大下永 2021「城館調査における赤色立体地図の活用について～飛騨市の調査事例から～」『飛騨市歴史文化調査室報』第3集

菊池利雄 2000「馬牛館と笹森小屋館」『郷土の研究』第30号

喜多耕一 2022「業務で使うQGISver. 3 完全使いこなしガイド」全国林業改良普及協会

紫桃正隆 1973『史料 仙台領内古城・館』第四巻 宝文堂

須貝慎吾・山川千博 2021「中世城郭の縄張り調査方法」『常総中世史研究』第9号 茨城大学中世史研究会

中橋彰吾 1987「中世城館の規模と構造について」『白石市史』3の(3)

相馬氏第十六代当主義胤の正室“越河御前”

出典 平成 12 年 3 月 国見町郷土史研究会機関誌 郷土の歴史第 30 号 pp.9-16.

著者 元福島県文化財保護指導員 菊池利雄 『馬牛沼館と笹森小屋館』

越河歴史探訪会 第一幹事 八島喜一

目的 発表者は越河御前について執筆者より平成十二年時に初めて知らされた。越河御前の悲哀なる生涯を知るにつけ、越河御前が生を受けていた地元越河に史実としてあった越河御前のこのことをより広く知らしめたいとの思いから、今回の発表に至ったものである。

目次

本文

1 伊達氏第十四代当主“植宗”

2 植宗の娘“越河御前”

3 越河の“東”地区

4 桜岡千手観世音菩薩立像

資料1 伊達氏と相馬氏との縁組図

資料2 植宗の娘“越河御前”

資料3 義胤婚礼（奥相茶話記巻第五）

資料4 東の観音堂由来

資料5 果たして“ろううん”とは誰か？

1 伊達氏第十四代当主“植宗”

『伊達正統世治考』によれば、伊達植宗と晴宗親子の間（資料1及び資料3）で争われた天文の乱において天文15(1546)年9月29日、晴宗方が守備する笹森小屋館に、植宗方は伊達、信夫の軍勢を動員して笹森館に攻撃をかけたが、小屋館より側面を衝かれて、五十余人が討死するという大敗を喫して敗走したとあり、この時館は破却されたとも記されている。

天文7(1538)年植宗は中野讃岐、中野上野領であった越河郷にある居屋敷と手作の田九百文地を、中野将監に下賜されており、同22(1553)年の『伊達晴宗采地下賜録』によれば、晴宗は重臣中野常陸介宗時に、天文の乱の論功として越河郷の段銭、棟役銭、諸公事役が免許され、庄司うばとの相給として、おさか小坂と彦四郎内在家が下賜されている。因みに天文7年の『段銭帳』によれば、越河郷の段銭高は17貫350文とある。これらを踏まえて考えれば、舟生式部少輔領の存在から一円知行では無いが、天文期の越河郷は中野氏領であり、笹森小屋館はその居館とみられる。

2 相馬氏第十六代当主義胤の正室“越河御前”

『奥相茶話記（資料2）』によれば『伊達正統世次考』の記述とは相違するが、天文9年晴宗は植宗を桑折西山城に幽閉したが、娘婿の相馬顕胤と懸田俊宗は救出して懸田城に迎えた。晴宗は軍勢を催して懸田城に攻撃をかけたが、顕胤、俊宗と晴宗との間で和議が調い、植宗を越河へ移したとある。

2 植宗の娘“越河御前”

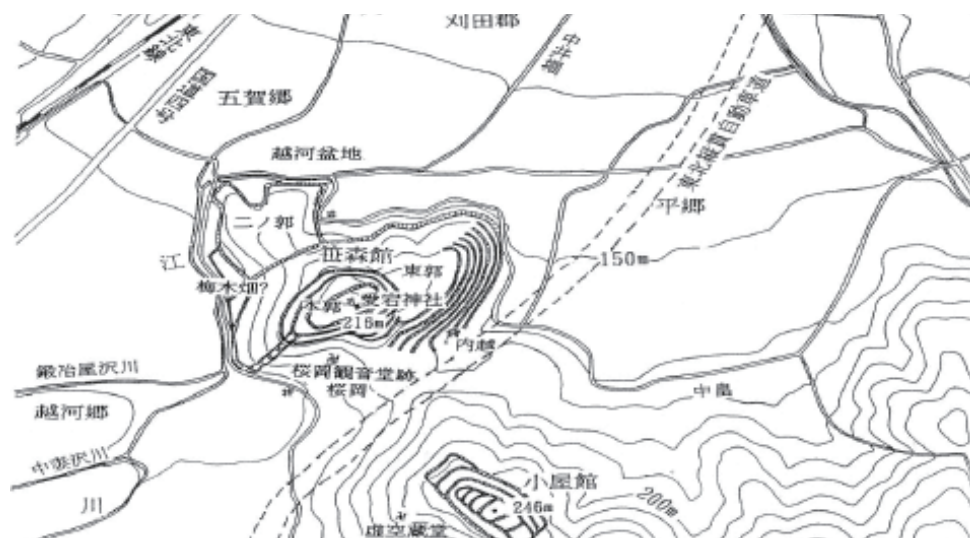
天文17年植宗と晴宗は和睦して、天文の乱は終わりを告げ、植宗は相馬領近くの伊具郡丸山城に隠居する。翌18年これまで植宗を援けてきた婿の顕胤は亡くなるが、子息の相馬盛胤も外祖父植宗とは緊密であった。植宗晩年の側室に越河の女があり、その間に伊達七郎と娘の2人が生まれている。兄の七郎は早世したが、娘は成長して永禄2(1559)年15歳の時に、顕胤の孫相馬義胤13歳と結婚し越河御前と呼ばれた。御前と義胤の祖母顕胤未亡人は、ともに伊達植宗の娘で、歳の離れた異母姉妹。舅の盛胤は御前の甥、夫の義胤にとっては大叔母にあたる。夫婦の仲は睦まじかったが、義胤の乳母武石氏が妬んで、策を弄して仲を引き裂き離縁に迫いやられて、同7年越河の母親のもとに帰ったとみられる。植宗死去の前年の出来事であった。御前は離縁そして父親の死と、重なる傷心の痛手がついて、病床に伏し永禄9(1566)年に死去した。享年22と言われる。

3 越河の“東”地区

このようにみれば、小屋館の根小屋である内屋敷は植宗の側室越河の女の屋敷とも考えられ、付近には桜岡、梅木畑、花畑など、鄙には稀なみやび雅な地名も、この女人屋敷との関連が考えられよう。

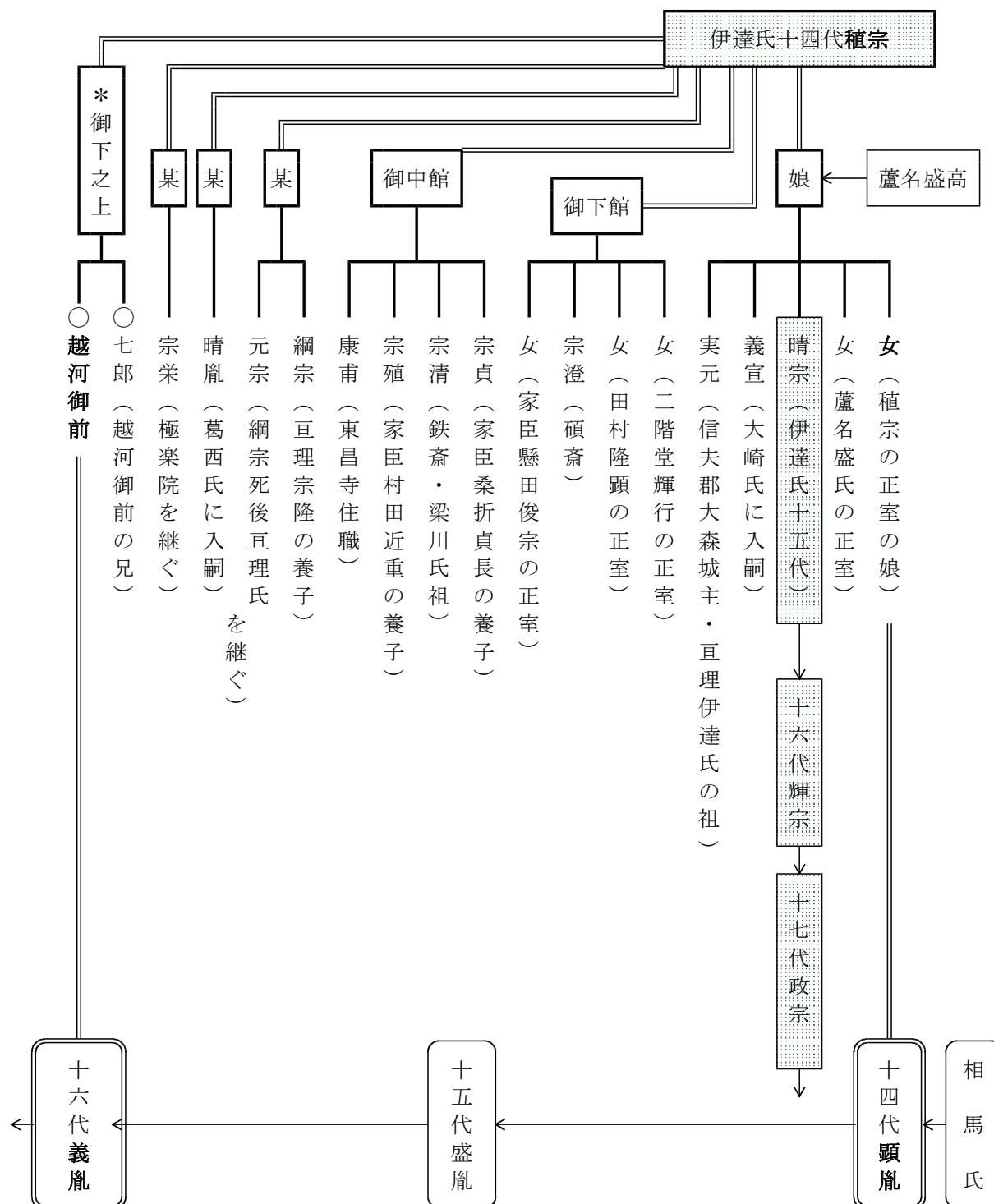
4 桜岡千手観世音菩薩立像

現在越河の旧宿町にある瑞泉山定光寺の本堂には客仏として、木造千手観世音菩薩立像（資料4、資料5）が安置されており、室町時代作とみられる高さが3尺3寸の立派な彫像で、越河御前に似せて造られたのか穏やかで愛くるしい顔立ちである。



越河御前の母の生家と推測される内屋敷と笹森館（作図 菊池利雄）

伊達氏と相馬氏との縁組図（＝は正室及び側室）



* 御下之上（おしたのうえ） 越河郷に東地区に住んでいた伊達氏十四代植宗の側室

出典	福島大学名誉教授 福島県文化財保護指導員	小林清治 菊池利雄	昭和57年 平成11年	伊達晴宗夫人とその娘たち 戦国を生きた伊達氏の女たち
----	-------------------------	--------------	----------------	-------------------------------

資料 2

義胤婚禮（奥相茶話記巻第五）

出典 昭和28年 福島県史料集成刊行会 福島県史料集成第五輯

口語訳 国見町歴史文化資料調査員 笠松 金次

義胤の婚礼と青田左衛門が相馬藩に復帰したこと

伊達氏第十四代の植宗は、隠居所の伊具郡丸森城から奥州相馬氏の居城である行方郡小高城へ向かった。植宗を慰めるために、相馬氏第十五代の盛胤は能を催したり、珍味を並べたお膳を用意したりして心を込めてもてなした。そこで、植宗の「私には愛娘がいるが、この娘をぜひ貴殿の嫡男（第十六代）義胤殿の妻にぜひ貰って頂きたい」との言葉に、盛胤は「承知した」と答えた。

義胤は数え13歳、植宗の娘は数え15歳の年であり、それは永祿2(1559)年のことであった。

容姿端麗であった二人はまさに輝いていて、仲睦まじかった。この娘の母は越河の美人であり、植宗の側室となり、植宗7男七郎の母でもあった。

義胤の乳母に亙理武石氏出自の後家がいた。その人の性格は嫉妬深くねじ曲がっていて、しかも口うるさかった。時々夫婦の間に立ち入っては笑顔を失わせるなどして、その仲を引き裂き、口の悪いことは一国をも危うくするほどであった。

この武石後氏存在は初めはさほど気にならなかったが、時が経つにつれ、夫婦の仲にかげりを持たせるようになっていった。“口は禍の元”とは先人の教えるところであり、“口害”に大男も負けてしまうほど恐ろしいものであった。この事態に父盛胤はもとより家臣達も心配し、たびたび助言したが好転しなかった。

その後、義胤の近習の一人が勘当になり放浪の旅に出て、中通りにやってきたとき、縁あって新館山城の居宅に滞在した折り、「相馬のあたりで何か珍しいことでもあったのか」と問われ、「義胤夫婦の仲が悪くなった。良いことではない」と答えた。山城はじいっと聞いていたが、山城は次のように考えた。

盛胤公の性格に因るところではないか。正直であるのはいいが、心根が狭いことから大将としては充分には機能していないような気がする。尤も相馬一族や家臣の方々に対しても、このような事態に対処できる人はいないようだ。男女の仲というのは、高貴卑賤を問わず、心を通い合わせることが肝要で、夫婦はひとときも離れてはいけいない。早く義胤公の心に合うような奥方を探し、子孫繁栄を図った方が良くはないか。盛胤公にそのような原因があるのではないか。

これを聞いた近習は相馬へ立ち返り、山城に出会ったことを義胤に伝え、また山城の言葉を正直に申し上げた。義胤が、その牢人はどんな心を抱いていたかと問うたので、近習は山城が語ったことを申し上げた。義胤は近習の言葉に聞き入った。義胤は牢人となっている山城を調べたところ、山城は、元は相馬家家臣青田左衛門であり、今は牢人となり中通りの新館山城と名乗っていることなどが分かった。そこで義胤は改めて青田を召し抱えたいと、老臣や父盛胤に訴えた。義胤は青田に帰参を勧め、まず会って話をしたいが、それにしても、会うか否かはすべてそなたに任す、という言葉に、青

田は喜んで草野（飯舘村）まで出向いた。

義胤は、青田に対して「お前の親に会わせることはしない。だが、家臣としては召し抱えたい。どうであろうか。お前がそのように望むならば、牢人にした時の命令を赦免する」と述べた。

その後、越河御前は家臣に送られて実家に戻った。それは植宗が亡くなる一、二年前であったと伝えられている。御前もその後一、二年して死去した。青田は田村（福島県田村郡）で死去した。青田は当家の怨霊となって崇拝された、と、或る人が云っている。

越河御前という方は、以上のとおりの方である。

源の博雅に逢って、青田の怨霊について聞いてみたいものである。

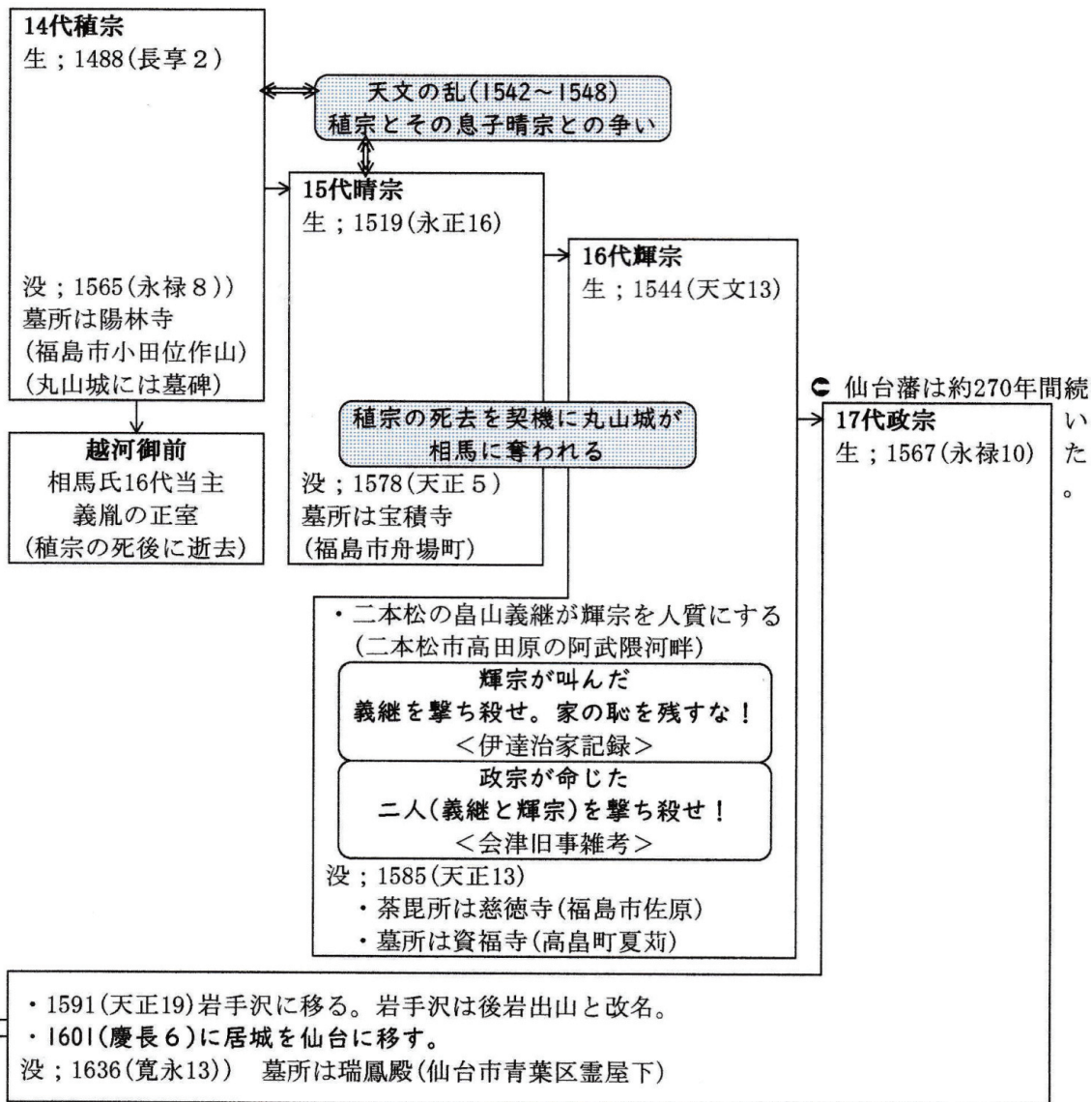
資料 3

14代植宗・その娘越河御前・15代晴宗 ・16代輝宗・17代政宗の生涯略年表

著 八島 喜一

奥州合戦(1189(文治5))

● 約400年間主に信達盆地が本領の地(“守るに易く攻めるに難い地”)であった。



江戸時代終わる(1868(明治元))

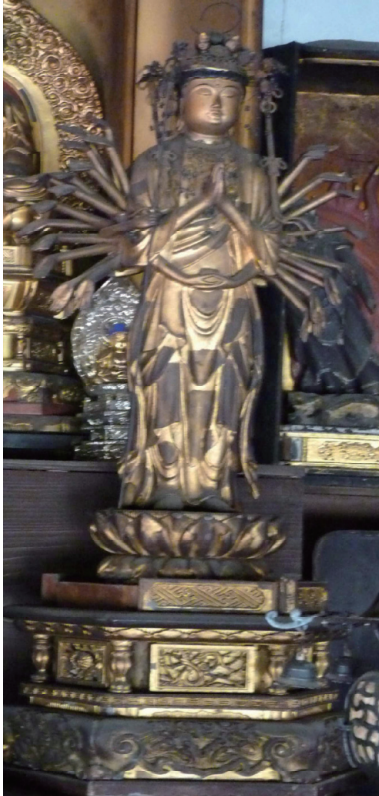
- 参考文献**
- ① 菊池利雄 本文『越河御前と東地区&笹森館・小屋館』
 - ② 菊池利雄 資料1 『戦国を生きた伊達家の女たち』
 - ③ 伊藤喜良 令和3年 吉川弘文館 『伊達一族の中世「独眼龍」以前』

資料 4

東の観音堂由来

出典 小野幸一氏所蔵古文書

覚



亀山千手観世音菩薩立像*

今は定光寺本堂に安置されている

一 亀山千手観世音菩薩は、昔、桜岡に立たせ給うなり。然るに延宝六(1678=四代将軍徳川家綱の時代)年の春、定光寺の先住(=住職)“ろううん”と申す僧、是れを亀山に移し奉る。然れども其時よりいくばく年月なる事を誰も知る大なし。是を亀山の新堂と申すなり。さりながら此の堂は小堂に相見え候、其の後、正徳元(1711=六代将軍家宣の時代)年辛卯、段々大破に及び、後住(=住職)の“ちたい”と申す僧、六間四面に再び建立あるなり。

此の時より警護など御上より相付けられ候と相見え候。さりながら又々五十年を過ぎて段々大破に及び、新たに建立せん事、数年願いのところ寛政十一(1799=十一代将軍家斉の時代)年、中興蒲菴和尚(が)古の柱ばかり残し、ほか残らず修復し給うなり。

寛政十二(1800=十一代将軍家斉の時代)年正月廿五日より始め、閏四月廿八日入仏。

一 仏壇は樋口源右衛門寄進、組物(や)虹梁は小原大工但四郎これを作るなり。

一 裏板は、大工棟梁卯八、専左衛門、運十郎右三人にて寄進奉る。

一 戸前は若者共十人にて、三年の間念仏寄進奉るなり。残るところの分は村が奉り、伽藍一字(を)成就するなり。右御普請中に本山十日日用寄進、其の外普請中世話致し上げ候に付き、蒲菴和尚より法名本空是山善信士と申し受くるなり。此の時、傑山寺御住太眉和尚の代なり。入仏の節はおいで、之れ有り候なり。

右蒲菴和尚は美濃の国生まれにて、下はざま(下狭間)と申す所の人なり。十六才より住持致され、此の人の代に天意なる。是により定光寺中興と申すなり。心覚えに是を記し残すなり。

善左衛門

享和元(1801=十一代将軍家斉の時代)年辛酉十二月

一 桜岡の古堂、是れは壱間四面是れも大破に及び、寛政三(1791)年辛亥秋九月岩崎長十郎世話仕り、大工久米吉是れを作るなり。是れも蒲菴和尚の代なり。

同 月 同 日

* 千手観世音菩薩立像 撮影者；八島喜一 撮影日；平成26年 撮影場所；瑞泉山定光寺本堂

資料 5

課題：果たして“ろううん”とは誰か？

結論；“ろううん”とは定光寺3世住職の似隠祖水こと**倭隠祖水**である。

著 八島 喜一

1 小野幸一所蔵の古文書『覚(資料4)』に散見する僧侶名とその所在の確認

- ① “ろううん”⇒ひらがなで古文書に表されてあることから、不明のまま現在に至る。
- ② “ちたい”⇒定光寺第四世陽州智泰のこと
- ③ “蒲菴和尚”⇒定光寺第八世蒲菴玄伊のこと
- ④ “太眉和尚”⇒傑山寺十二世太眉海壽のこと

2 課題

- ・ “ろううん”という住職は、当該古文書によると、定光寺の先住とあり、定光寺開山和尚の松嚴東徹和尚と第四世陽州智泰の間の住職でなければならない。

3 定光寺の歴代住職名一覧＊

開山	松巖	東徹
2世	爾巖	祖格
3世	似隠	祖水
4世	陽州	智泰
5世	悦堂	禪虎
6世	實光	元貞
7世	梁翁	禪棟
8世	蒲菴	玄伊
9世	信岳	惠端
10世	養堂	禪育

この間、無住職の期間があり、有事のときは斎川の大義寺の住職が助けた。

11世	東嶺	仲徑(岐阜出身、明治6年越河小学校開校時の教員)
12世	臨道	禪機(西間木和尚)
13世	沼館	禪道
14世	大野	禪英(現住職)

4 課題の焦点化

- a 古文書『覚』に記載されている“ろううん”は果たして“ろううん”か？
- b 定光寺でなく、傑山寺やもしくは寶藏寺か大義寺の住職だった可能性はないか？
- c 定光寺開山住職と四世住職の間に位置する住職名に合致する住職は存在するか？

5 現在時点での解決点

- a 原点の古文書を再度点検すると、間違いなく「ろううん」である。
- b 3か寺の歴代住職名を精査しても該当する僧名は見当たらない。
- c よって、定光寺2世の“爾巖祖格”か3世の“似隠祖水”かのいずれかでなければならない。

6 解決点の焦点化

- ① “似隠祖水”の“隠”は“おん”とも読める。
“おん”も“うん”も発音には大差は無い
- ② 残るは“ろう”が「似」という漢字であるか？
・ 江戸時代初期または中期における文書であることや、明治43年に定光寺第十二世臨道禪機住職が本山に提出した『寺籍調査表』に松嚴東徹のところを松嚴宗徹と誤記していること(傑山寺現住職麻生大俊)などを考慮すると、“ろう”と発音する漢字の中に該当する文字が潜んでいるか若しくは書き誤りかとも推測出来る。

7 結論

- PCのフォントのうち行書体”で俯瞰すると、“似”に最も類似した漢字が倭(倭)。
∴ “ろううん”とは、定光寺3世住職の似隠祖水こと、**倭隠祖水**である。

＊ 常英山傑山寺所蔵の常英山傑山寺直系傍系歴代住職掛図

『吾妻鏡』で読む阿津賀志山の戦い

笠松金次（国見町あつかし歴史館）



阿津賀志山全景（「国見町文化センター あつかし館」パンフレットから複写）



国史跡阿津賀志山防塁の略図と国指定地写真（「国見町文化センター あつかし館」パンフレットから複写）

文治5年(1189)奥州合戦略年表

菊池利雄氏作成・一部加筆・修正

旧暦	新暦	事項
2月9日	3月4日	源頼朝、島津忠久に7月10日鎌倉必着の動員令を下す。
潤4月30日	5月23日	源義経、衣川館にて藤原泰衡に襲われ自刃する。
6月27日	8月18日	頼朝、諸将を集めて奥州出兵の準備を命じる。
7月17日	9月7日	頼朝、鎌倉軍を大手軍・東海道・北陸道の三軍に編成。
19日	9日	頼朝、大手軍を率いて鎌倉を出陣。
25日	15日	頼朝(鎌倉軍)古多橋駅(宇都宮)に到着。
29日	19日	頼朝(鎌倉軍)白河の関に到着。
8月7日	26日	石那坂の戦い、藤田宿に着陣。畠山重忠の工兵部隊80人が、夜中に阿津賀志山防塁を破壊する。
8日	27日	国見山麓(現厚樫山・阿津賀志山)の戦い、鎌倉軍勝利。
9日	28日	休戦。明朝、阿津賀志山(国見山)を越えての合戦を指示した。
10日	29日	大木戸を挟んでの戦い、小山朝光の奇襲攻撃、国衡本陣陥落・敗走・討ち死に。葦上山・根無藤・四方峠で合戦、泰衡国分原鞭楯より逃亡。頼朝舟迫着陣。2日逗留。
12日	10月1日	頼朝(鎌倉軍)多賀の国府に到着。海道軍と合流、12日逗留。
13日	10月2日	北陸軍出羽国に討ち入る。田河行文・秋田致文の首を晒す。
20日	9日	頼朝は多加波々城に至る。敵に2万騎で対処するよう指示する。
21日	10日	頼朝、栗原・三迫で若次郎・同九郎を討ち、津久毛橋に到着。
22日	11日	頼朝(鎌倉軍)平泉に到着。泰衡すでに逃亡。12日逗留。
9月3日	22日	泰衡家臣河田次郎に斬殺される。
4日	23日	頼朝(鎌倉軍)志波郡陣が岡に到着、北陸軍が合流し、軍士は郎従を含め28万4千騎。8日逗留。
6日	25日	泰衡の首級が頼朝に届く、河田次郎を斬首。泰衡の首を5代祖、頼義の例に倣い、首を懸けさせた。
8日	27日	頼朝、師中納言・藤原経房に合戦の状況を手紙で知らせる。
12日	31日	岩井郡厨川(盛岡市)に着陣、7日逗留。
19日	11月7日	頼朝(鎌倉軍)平泉に帰る。
20日	8日	吉書始めの後、合戦において手柄を挙げた武士に恩賞を与える。
23日	11日	頼朝、豊前介の案内で無量光院を巡礼。
28日	16日	頼朝(鎌倉軍)鎌倉への帰途に就く。
10月1日	18日	頼朝(鎌倉軍)多賀の国府に到着。
2日	19日	佐藤基治・名取郡司・熊野別当らは赦免され、在所に帰った。
19日	12月6日	頼朝、宇都宮社に奉幣、樋爪俊衡一族を職掌とした。
24日	11日	頼朝(鎌倉軍)鎌倉へ凱旋。3ヶ月に及ぶ遠征であった。
11月8日	25日	頼朝、奥郡の窮民に山北・秋田郡より農料・種子を送られてきた

旧暦 大(30日)の月 2、3、4、6、8、10、12

小(29日)の月 1、閏4、5、7、9、11

文治5年(1189)奥州合戦略年表

菊池利雄先生が文治5年の暦を新暦に置き換えて作成した年表を1ページに掲載いたし、一分修正と加筆したことを報告する。今回講座開催につき、以下の資料は笠松が作成した。

◇旧暦2月9日・新暦3月4日・源頼朝は日本66ヶ国総動員令を発令する。南九州薩摩の島津庄の地頭宛てに下した動員令で、頼朝の下文・くだしぶみの内容です。

下す 嶋津庄地頭忠久

可く令して早く召し進め庄官等の事

右、件の庄官之中、足る武器の輩・ともがら、帯び兵仗、来る7月10日以前可く参着関東也、且つ為す入り見参、各・おの可く在り忠節之状如し件、

文治5年2月9日

*要約すれば・島津庄の役人の中で、武器に足る(持って戦える)者は、来る7月10日以前、関東(鎌倉)に参着すべし(後略)。*頼朝の決断・平泉藤原泰衡の支配する陸奥・出羽国以外の、64ヶ国の御家人に対して出された軍事動員令で、頼朝の泰衡討伐の決意は、この2月の段階で決定していたと考えられる。

【参考資料】『文治五年奥州合戦と阿津賀志山二重堀』入間田宜夫氏 昭和56年

◇旧暦閏4月30日・新暦5月23日・今日、陸奥国で泰衡が源義経を襲撃した。理由の一つに勅諭・ちよくじょう。天皇の命令に従い、もう一つに頼朝の仰せに従ったものと推測され、義経は藤原民部少輔基成の衣河館に居たところを、泰衡の軍勢数百騎が攻め寄せ合戦をした。義経の家人たちは防戦したが敗れてしまう。義経は衣河館の燃え盛る持仏堂において、22歳の正室(河越重頼娘)と4歳の娘を殺し、次いで(義経)自害をしたという。

*義経死す・実際に頼朝の許に義経の死んだ情報が届いたのは、旧暦の5月22日・新暦の6月13日のことであった。

*泰衡の心中・頼朝の圧力に屈したものか、義経の首で自分が助かると思ったかは不明ではあるが、頼朝の動員令発令後、頼朝と対決を覚悟し、決戦場を伊達郡の北部の郡境(現国見町)とし、国見山(現阿津賀志山・厚樫山)中腹から防御陣地(阿津賀志山防塁)を構築している最中、突如起きた心変わりは何故、謎としか言いようが無い。

◇旧暦7月17日・新暦9月7日・鎌倉から奥州に下向する軍勢を三手に分けて侵攻する審議が開かれ決定。東海道軍大將軍千葉常胤・八田知家・ともいえ、北陸軍大將軍比企能員・よしかず・宇佐美政実、頼朝は大手軍を率いて出陣する。頼朝は各隊に、道々に各地の一族・勇士を引き連れ、奥州に向かうよう指示を与える。*合理的な決断である。

*三軍編成・平泉軍にプレッシャーをかけ、去就の定まらない武士に決断を促す外に、『吾妻鏡』には書いてないが、東海道軍には塩の調達を命じたものではないかと推測する。

◇旧暦7月19日・新暦9月9日・頼朝午前9時頃およそ千騎を率いて鎌倉を出陣する。先陣の畠山重忠は5騎の騎馬武者と、50人の弓隊と30人の鋤・鍬を携行する工兵隊を同行させていた。

*千騎の出陣と『吾妻鏡』あるが・鎌倉の出陣より御供したのは以下の者として、平賀義信以下144騎とされ、重忠のように5騎の騎馬武者を共としたと仮定すると864騎となり、136騎の不足を頼朝の旗本騎馬隊として、計千騎と考えるのはどうか。

*1騎に何人の従者が・1騎あたり5・6人と計算すれば、6騎で20から30人となり、重忠隊の総計は100から110人編成であったと想像され、144騎に110人を掛けると15,840人という頼朝

軍が計算されるが、旗本の数を加えて2万騎の推測が出来ないだろうか。

***大手軍の総勢**・・・2万騎で奥州征討に向かったのではないかと私は想像した。

◇旧暦8月7日・新暦9月26日・藤田宿に着陣。夜に雷鳴が鳴り、皆恐怖を覚えたという。頼朝は「明朝泰衡の先陣を攻撃する」と宿老に伝えた。夜中に畠山重忠の工兵部隊80人が悪天候をついて、阿津賀志山防塁に向かい、土塁を崩して堀を埋めた。破壊工作に成功する。

***白河の関から**・・・国見町まで約120Km足らずであり、この距離を8日かけて行軍している。

***泰衡が築いた防塁と防衛構図**・・・「阿津賀志山に城壁を築き、要害としていた。国見宿と同山の間に・・・」とあり、県境と国見宿間に防御陣地を構築したことを記述している。「兄国衡を大將軍に・・・秀綱父子を含め二万騎を配置して、東山道を遮る形で阿津賀志楯という要塞を構えた。ほかに刈田郡、名取・広瀬川に迎撃施設を構築、泰衡は国分原鞭楯に本陣を構え、現在の宮城県北部に数千騎で陣を構え、出羽国に指揮官を派遣して防衛線を敷いた。」との記述がある。防塁守備に二万騎を配置。宮城県北部に数千騎と具体的な軍勢の数を記している。

***防塁の存在を**・・・藤原軍が防御陣地を構築し、鎌倉軍を待ち構えているという情報が鎌倉に届いており、重忠出陣の際に鋤・鍬を持参して進軍するに至ったと想像される。

***雷鳴に恐怖する**・・・歴戦の武士が雷に恐怖を感じたとは想像しにくいだが、もし台風クラスの暴風雨であったとしたら話は別で、悪天候の中であれば防塁の切り崩しと埋める作業も可能であって、平泉軍の監視を免れたかもしれない。運も頼朝軍に味方したか。

◇旧暦8月8日・新暦9月27日・・・防塁を挟んで「箭合せ」に始まり、合戦に及ぶが数時間後、鎌倉軍は勝利した。平泉軍の金剛別当秀綱は、大木戸に帰り国衡に敗戦を報告している。

***阿津賀志山の前に**・・・「秀綱は数千騎を率いて阿津賀志山の前に陣取った。」という、『吾妻鏡』の記述から、秀綱が防塁の前に陣を敷いたとする説が多くあるが、防御陣地があるのにわざわざ、その前に陣取るかという話で、ここでの阿津賀志山は県境一帯の山々が、当時はそう呼んでいたとして、防塁が造られた山は国見山として、区別して考えてみるべきではないか。

***秀綱は数千騎を**・・・ここに平泉軍の具体的な軍勢の数を述べており、最前線の部隊の数が見えてくるのではないかと。これに対し鎌倉軍の兵士の数は書かれていないが、同月20日の頼朝指示の中に、「・・・前略・・・2万騎の軍兵を整えた後に、攻めかかるように。」という指示を出しており、阿津賀志山の戦いにおける経験から、云わせていると考えられ、秀綱数千騎に対して勝利した鎌倉軍の人数が2万騎であった。その可能性があるのではないかと想像する。

***石那坂合戦**・・・福島市南方平石の石名坂付近の戦い。信夫庄司佐藤基治が叔父河辺(こうのべ)高経、伊賀良目高重と共に石那坂の上に陣取る。ここに常陸入道念西の4人の息子が攻め込んで、基治以下主な武将18人の首をあげた。阿津賀志山の経岡(きょうがおか)に晒した。

***疑問が**・・・①8月7日に頼朝と鎌倉軍は国見駅に到着しており、8日にはるか20数kmも後ろで戦いがあるのはおかしい。位置関係、日時にしても7日以前の戦いではないか。②『吾妻鏡』に「伊達郡沢原の辺りに進み出ると、・・・」とあり、信夫郡の石那坂と場所が違う。③何故、8日に石那坂合戦が書かれてしまったのか。経岡に首が晒されたのがこの日であったことか？

◇旧暦8月9日・新暦9月28日・・・休戦日であったと思われる、同日の作戦会議の席で、頼朝は明朝阿津賀志山(当時の国見山・現阿津賀志山・厚樫山)を越えて合戦することを決めた。

***別働隊1**・・・「三浦義村を始めに7騎は夜を徹して阿津賀志山(国見山)の峰々を越え、後略・・・」として、夜陰に紛れての隠密行動であったと推測される。また「峰々を越え」とあり、藤田宿近辺から埋めた防塁を通過し、国見峠の急坂を越えて進軍した様子を伝えている。徒歩か馬を引いての

行軍かは不明。・・翌朝夜明けと同時に攻撃開始。

***別働隊 2**・・宮六国平と大友能直は夜中に陣中を抜け出し阿津賀志山（国見山）を越え、大木戸付近へと進軍し夜明けを待った。こちらも徒歩によるものか、馬を引いての行軍かについては不明。・・翌朝夜明けと同時に攻撃開始。

***別働隊 3**・・夜中に地元安藤次を山案内人として、小山朝光・紀権守・芳賀次郎ほか 7 人は隠密に陣を抜け、馬を引いて鳥取越えを敢行して、国衡本陣を目指して迂回作戦を展開した。

***この日の防塁は**・・昨夜に破壊された阿津賀志山麓（国見山麓）の防塁は、8 日の平泉軍敗戦を受け、重忠が切り崩したことで鎌倉軍の支配下にあったとすれば、工兵部隊が引き続き破壊工作をして、通行できる範囲を広げていたと思われる。この様に鎌倉軍は前夜の内に、翌日の戦いが有利に展開するための行動を起こしており、これが源氏の戦法であろう。源平合戦の当時における戦い方は、正々堂々と戦うことが一般的であり、正規軍としての平氏には卑怯な戦い方は、潔くないとする風潮があったこともまた事実である。

◇旧暦 8 月 10 日・新暦 9 月 29 日・『吾妻鏡』によれば「この日の朝方は霧が濃く、薄暗いような状況にあり」と書かれており、容易に大木戸口まで近づくことが出来たと思われ、別働隊 1・2 は夜明け同時に攻撃を開始したことが読み取れる。

***頼朝登場**・・この後、卯の刻には頼朝率いる本隊が大軍を以て木戸口を攻め立てた。頼朝自ら陣頭指揮に、鎌倉軍の士気は大いに高揚したと考えられる。

***戦いはクライマックスを迎えた**・・鎌倉軍の波状攻撃に国衡は防戦・善戦していたが、突如、別働隊 3 が本陣搦手口から、奇襲攻撃の声と矢を放った。馬による逆落としはまるで、生田森合戦の鴨越の戦い方を彷彿させるものであった。ここに至り平泉軍に動揺が走った。

***一つ疑問が**・・確かに想定外の攻撃に平常心を失い、陣形が乱れた事であろうが、僅か 7 人の声で国衡本陣がもろくも崩れ去るかという疑問である。仮説を述べれば、この日同時刻に宮城県南部の蔵王町・村田町・大河原町付近で、白石市を本拠としていた三沢安藤四郎が、自ら先陣を切り、蔵王町で合戦を始めている。鎌倉軍を手引きし、道案内をしての結果と想像される。この情報が国衡の元へ伝令として届いていたとして、7 人の声を後方の陣を破り、攻め込んだ者共と勘違い・挟み撃ち状態になったと思ってしまったら、国衡本陣は混乱をきたしたと云えるのではないか。

***東海道軍は**・・浜通りを進軍中の東海道軍のプレッシャーは当然あったと想像され、三軍編成の進行速度は、平泉軍に与えた影響は相当なものであったであろう。

***頼朝の指令**・・大木戸本陣が崩壊し、国衡は北へ逃亡を図る。国衡追討の先陣を和田義盛に命じた頼朝は、夜に入り舟迫に到着した。国衡は夕刻、義盛の矢を受け落馬した処を、大串次郎の手で首を討たれた。国衡の首が畠山重忠により、翌 11 日に届き舟迫において頼朝に披露された。

***石那坂合戦**・・戦いの様子は『吾妻鏡』に記載されているが、石那坂と考えられる地域は阿津賀志山防塁から南へ 20 数 km 離れた、現在の福島大学のキャンパスの近くと推定され、中村入道念西の子息 4 人による佐藤基治一族を討ち取り、その首級を 8 月 10 日の同日に阿津賀志山まで届けるのは難しいのではないかと推測される。

***合戦の経緯**・・信夫庄司佐藤基治は、叔父の河辺太郎高経、伊賀良目七郎高重らと共に石那坂の上に陣取り、堀を掘り阿武隈川の水を引き入れ柵とし、石弓を張り鎌倉軍を待ち受けた。この状況に常陸入道念西の子息伊佐為宗（長男）、次男為重、三男資綱、4 男為家らが密かに甲冑を秣の中に隠して運び伊達郡沢原まで進み、矢を放ちながら佐藤一族を襲い、ついに基治以下一族 18 人の首が討ちとられ、阿津賀志山（国見山・現厚樫山・阿津賀志山）の上、経岡（きょうがおか）に晒された。

◇旧暦 8 月 12 日・新暦 10 月 1 日・・・頼朝は舟迫に 2 日間留まり一息ついた後、陸奥の国府・多賀城に入り、東海道軍と合流を果たす。10 日から 12 日の間に東海道軍から連絡は、幾度も来ていたと想像され、多賀城での合流を決めたと思像される。頼朝は多賀城に 12 日間逗留して、国府の官人から陸奥・出羽両国の状況説明を受け、東北経営のための把握に努めたと思われる。

◇旧暦 8 月 13 日・新暦 10 月 2 日・・・北陸軍は念種関（ねずがせき）を破り、出羽国に入って田河行文・秋田致文と交戦してこれを討ち取り、その首を晒したと『吾妻鏡』は伝えている。

◇旧暦 8 月 20 日・新暦 10 月 9 日・・・頼朝が玉造郡方面に進軍し、多加波々城・たかはばじょう（所在地不明ながら、現大崎市岩出山町葛岡付近か）に泰衡が潜んでいるとの情報に、進軍したがすでに泰衡は逃亡して不在であった。泰衡追討を急ぐあまり準備不足のまま出撃を懸念して次の指示を出す。***2 万騎で・・・**この日の頼朝の手紙に、泰衡が平泉で待ち構えているとすれば、敵に対し 2 万騎で当たるよう指示を出して、少数の兵による攻撃を戒めている。

◇旧暦 8 月 21 日・新暦 10 月 21 日・・・栗原・三迫で平泉軍が待ち構えていたが頼朝軍が撃破して、平泉軍の若次郎・同九郎は討ち死する。頼朝は松山道経由で津久毛橋（金成町）に到着した。
***津久毛橋到着・・・**頼朝は多賀の国府に 12 日より 12 日逗留とあるが、20 日に玉造郡に向ったとすると、2 日計算が合わないし、多賀の国府から 50 km 以上の距離があり、かなりの強行軍であった。前夜は場所不明ながら野営したと考えられる。

◇旧暦 8 月 22 日・新暦 10 月 11 日・・・頼朝平泉に到着、しかし泰衡は逃亡し、町は焼け人影は無く、一棟の蔵に数え切れない財宝が残っていた。***泰衡は柳御所だけを焼いて逃亡している。**

◇旧暦 9 月 3 日・新暦 10 月 22 日・・・北海道を目指して逃亡中の泰衡は、現在の秋田県大館市の贅の柵で、家臣河田次郎に首を獲られてしまう。次郎は首を献上しようと頼朝のもとに向かった。

◇旧暦 9 月 4 日・新暦 10 月 23 日・・・頼朝、紫波郡陣が岡の蜂杜（現紫波町大字宮手字陣が岡の東端に蜂神社）に陣を敷く。北陸軍が合流し、軍士は郎従を含め 28 万 4 千騎となった。

◇旧暦 9 月 6 日・新暦 10 月 25 日・・・河田次郎が泰衡の首級を持参したが、主人の首をはねた罪により斬首刑となる。この後、5 代先祖頼義が行った「前九年合戦において安倍貞任」の例に倣い、泰衡の首を 5 寸釘で打ち、高く掲げたと思われる。

◇旧暦 9 月 8 日・新暦 10 月 27 日・・・頼朝、師中納言・藤原経房に合戦の様子を手紙で知らせた。
現代語訳・・・「奥州の泰衡を攻めるために、去る 7 月 19 日に鎌倉を出発し、同 29 日白河関を越えて打ち入り、8 月 8 日厚加志山（県境の山々）の陣の前で合戦して敵を討ち平らげました。同 10 日厚加志山（現阿津賀志山・国見山）を越え、山の口（県境の山々）で秀衡法師の嫡男（長男の間違い）である西木戸太郎国衡が、大將軍として向かってきたので合戦し、たちまち国衡を討ち取りました。そうしたところ、泰衡が多賀の国府より北、玉造郡の内の高波々（たかはば多加波々城）と申す所に城郭を構えて待ち受けていました。20 日にそこに押し寄せたところ、さほど時を経ずに城は落ちました。ここから平泉までは 5、6 日の道です。すぐに追いかけてきました。泰衡の郎従らが途中で防戦しました。主な者どもは討ち取り、平泉に押し寄せたところ、泰衡は 21 日に平泉を落ちのびていました。頼朝は 22 日の申の刻（午後 3 時～5 時）に平泉に着いたので、泰衡は 1 日前に逃亡したことになります。さらに追いかけて、今月 3 日に討ち取りました。その首を進上すべきではありませんが、遠方である上、大した貴人でもなく、また代々（源氏）の家人です。したがって進上することはしません。また出羽国では 8 月 13 日に合戦があり、やはり敵を討ち取りました。この旨を（後白河院に）言上なさってください。頼朝が謹んで申し上げます。

9月8日 進上 師中納言殿	頼朝
<p>◇旧暦9月12日・新暦10月31日・『吾妻鏡』に見える「岩井郡」は、岩手郡の誤記とされ、当郡は頼朝より恩賞として工藤行光に与えられた。行光がこの日、頼朝に盃酒と圀飯を献じた。行光は鎌倉から出陣して50日以上になるが、酒宴を開いて頼朝を接待することが出来た。この用意周到はよほどの後方部隊を引き連れていたかどうか、良く分かる事例である。</p> <p>* 盃酒・・はいしゅ。盃に酒を酌んだ酒。転じて酒宴の意。</p>	
<p>* 圀飯・・おうばん。鎌倉・室町時代に家臣（宿将・老臣）が、將軍を自分の営中に招いて盛宴を催す事と言われ、戦陣中の饗応はとても大変であり、主従の心を通わす宴であったと推測される。</p>	
<p>◇旧暦9月19日・新暦11月7日・・厨川柵を発ち平泉に帰ったとあるが、東北道自動車道を参考にしても100km以上となる。ましてや当時の北上川沿いの交通路が主であったとしたら、かなり時間を要したのではないか。2日後の21日に胆沢郡の胆沢八幡宮と、胆沢城を訪ねている事からして、この2ヶ所を先に訪問するのが順番からして当然です。その後、平泉に到着したと考えるのが自然であり、多少の日にちの前後はよくよく考慮しなければならない。</p>	
<p>◇旧暦9月20日・新暦11月8日・・吉書始めがあった後、合戦に勲功の武士に褒賞が行われた。この日を境に鎌倉御家人による奥羽支配が始まる。・・関東武士団の東北移住。</p> <p>* 吉書始め・・きっしょはじめ。新年や將軍就任・新御所完成などの、家政にとって節目になる日に、儀式的にめでたい内容の文書を発給すること。</p>	
<p>◇旧暦9月23日・新暦11月11日・・頼朝、豊前介（清原実俊）の案内で無量光院を訪ねる。藤原清衡・基衡・秀衡の治績、主に仏塔・伽藍の建立について豊前介は語った。</p>	
<p>◇旧暦9月28日・新暦11月16日・・頼朝（鎌倉軍）鎌倉への帰途に就く。途中、田谷窟・たつこくのいわやに立寄っており、坂上田村麻呂・藤原利仁鎮守將軍の伝承地として訪れたものか。</p>	
<p>◇旧暦10月1日・新暦11月18日・・頼朝（鎌倉軍）多賀の国府に到着。国府において「国郡に負担をかけたり、住民を煩わしたりしてはならない。」と発言し、張文・はりぶみに「庄号の威勢によって不当な道理を押し付けてはならない。国中の事は秀衡、泰衡の先例通りにその処置をするように。」として、奥羽支配を執り行う地頭たちに命じた。</p>	
<p>* 頼朝の費用と規則正しい日常・・毎日の御膳や盃酒・御入浴については3度ずつ行われ、まったく欠かされることは無かったが、最後まで庶民に負担をかけなかった。上野・下野両国の年貢を運送して賄ったという・・。日に3度の食事はあるかと思うが、飲酒は疑問で飲む形だけを食事時行ったものか。入浴は朝の洗顔、昼食後の口をすすぐことか、夜は体をぬぐう程度であろうか。いずれにしても流人生活で身に着いた習慣であり、頼朝の幼少期における都での生活に始まったものと推測される。</p>	
<p>◇旧暦10月2日・新暦11月19日・・佐藤基治・名取郡司・熊野別当らはこの日に赦免され、在所に帰った。基治は石那坂の合戦に討ち死にしたとされるが、捕らえられていたと思われ、釈放されて本所に帰ったことが分かる記述であり、石那坂の合戦に戦死したと『吾妻鏡』にあるが、実は捕虜になっていたことが判明する資料である。</p>	
<p>◇旧暦10月24日・新暦12月11日・・頼朝（鎌倉軍）鎌倉に凱旋。7月19日以来、実に93日間かけての大遠征であった。頼朝は「前九年合戦」で、源頼義が黄海の柵における冬場の合戦の苦戦を教訓にして、本格的な冬の到来を前にして鎌倉に帰還している。</p>	

◇旧暦 11 月 8 日・新暦 12 月 25 日・・頼朝は葛西清重に対し、奥郡の窮民に山北・秋田郡より、農料・種子を送るよう命じる。頼朝の細かい指示は住民を思う政治的判断であったと想像する。

◇菊池利雄氏の見解

「兵站戦から見た奥州合戦」

奥州における水稻収穫のはざかり（食境期・端境期・古米に代わって新米が市場に出回ろうとする時期。太陽暦 9 月・10 月頃）、旧暦 7 月以降の戦闘を目指したと考えられる。異説有り。

・頼朝にとっては、奈良・平安時代の征夷作戦や、源頼義・義家による前九年合戦・後三年合戦のように、多賀城のような兵站基地が存在しなかったので、兵糧・馬糧は徴発（現地調達）を目指して、戦争の時期を選んだものであろう。徴発した稲粳・いなもみを脱穀精米するのは、稲穂を臼に入れ杵でつく簡単な方法がある。「稲突女」から『日本霊異記』。

・多賀城付近で長い逗留期間中、従軍の武将たちは畠山重忠が率いてきたと同様に、人夫を同道し、脱穀作業に当たらせたと考える。鎌倉軍が志波郡の陣ヶ岡において、奥州合戦の勝利を宣言した時の軍勢は、28 万 4 千騎とあるが、平安中期作られた「和名類聚抄」の郷数から推計した、陸奥国の人口は約 18 万 6 千人、出羽国は約 8 万 3 百人、計約 26 万 6 千 3 百人となる。この奥羽両国の人口に匹敵する人数とすると、一時的にせよ、鎌倉軍勢を賄う食糧が確保できたか疑問が生じる。

*もっと議論されるべき検討課題であると云えるだろう。

『吾妻鏡』文治 5 年（1189）11 月 8 日条

8 日、甲子・きのえね。 前略・・葛西三郎清重は奥州の支配の事を仰せつけられたので、（頼朝）の御帰還の時は御供せず、陸奥国に留まっていた。そこで今日、種々の事を命じ遣わされた。まず、（陸奥）国中が今年是不作との嘆きがある上、頼朝が多勢を率いて終日間逗留したため、住民はほとんど安堵できずにいる事をお聞きになったので、「平泉の辺は特に対策を施して窮民を救うように」という。岩井（岩手）・伊沢・江刺、以上 3 郡は山北の方から、農料を遣わすように。和賀・稗貫両郡の分については、秋田郡（秋田県北部）から種子などを下行するように。近日中に処置すべきであるが、今は雪が深いので支障もあろうから、明春 3 月中に実行するように。また（この措置を）あらかじめ住民に伝えよ。・・後略。

*農料・・農業生産に必要な種子や農具など。

*山北・・さんぼく・仙北・平鹿・ひらが・雄勝 3 郡の総称。

*下行・・げぎょう・上位者が下位者に米や銭などを下し与えること。

『吾妻鏡』について

◇どのような書物か

- ・鎌倉幕府將軍の年代記というスタイルをとる歴史書。
- ・頼朝から 6 代宗尊まで 87 年間の鎌倉幕府の歴史を、和風漢文による日記ふうに書かれている。
- ・『古事記』『日本書紀』など朝廷中心の歴史書の中で、東国武家政権の歴史を綴っているのが特徴。
- ・鎌倉幕府の動きや東国の情報を集め、朝幕関係や武士の在り方などを探る上の基本資料となる。
- ・武家政権は武士たちの日常の動きの中から形成されてきたが、頼朝が武士をまとめて、いかに朝廷に自立した政権を築いていったかを知ることができる。

・合戦や幕府での武士の行動やエピソードを伝えており、特に源平合戦や義経について詳しく記し、これらの記事は合戦記録を記した右筆（ゆうひつ）や、軍（いくさ）奉行の記録・報告、合戦に従軍した武士たちが軍忠を求めての訴えや、聞き取りなどに基づいており、信頼性は比較的高い。

・**編纂者**・・幕府政所役人である大江・二階堂・清原氏、問注所の三善氏の日記や、その家に残る文書・記録があげられる。また裁判に関係して提出された文書などがあつた。

・歌人藤原定家の『明月記』など、貴族の日記も利用された。しかし『玉葉』『吉記』『平家物語』『承久記』などは引用された形跡はない。

・頼朝が平泉に進駐したときの記事は、奥州藤原氏を考える上の基本となる史料である。

・現代社会につながる習慣や政治運営の在り方が、この時代に生まれたものであり、評定・寄合・談合など御家人たちが整えてきた政治運営は、今日の政治の在り方につながっている。

◇どこからどこまで

・**治承4年（1180）4月9日条**・・以仁王が東国武士（多くは源氏ゆかりの武士）に、挙兵をうながす令旨（りょうじ・皇子が命令を伝える文書）出したことから始まり、頼朝の旗揚げ、鎌倉幕府を鎌倉の大倉に創設、御家人の粛清、2代頼家・3代実朝の死、13人の合議制、「承久の乱」の危機、頼朝・政子の死、執権北条氏を中心とした政治体制に反発した宗尊將軍の側近が、陰謀を密議したことが原因で北条時宗・正村・金沢金時らは、宗尊將軍の追放を決議した。

・**文永3年（1266）7月20日条**・・鎌倉から追放された6代將軍宗尊親王が京都に戻ったところまでで終了している。 *宗尊親王・・後嵯峨天皇の第1皇子。

◇成立時期と編纂の意図

○成立時期の推測

・**源氏3代將軍記**・・頼朝・頼家・実朝についての記述は、文永の頃（1270年代前半）に成立。

・藤原將軍・宗尊將軍の記事・・源氏3代が死去して以降の將軍は、都の摂関家藤原氏道家の子、三寅が関東・鎌倉に下向して就任している。將軍記の編纂は正応3年（1290）から、嘉元2年（1304）の頃に成立したと推定される。

○吾妻鏡の特質

・鎌倉幕府の動きや東国の情勢を始めとする朝幕関係や武家という家の形成を初めて描いて、武家政権の形成と展開は、戦国時代に多くの関心が寄せられ、模倣した形跡も見られる。

・幕府、執権政治を担当した御家人の自らの家の歴史を探ることで立て直し、改めて朝廷に対して自立した政権を築くか、頼朝がいかにこの問題に腐心したかを知ることができ、合戦の記事や幕府内での武士たちの行動を伝えており、後世多くの武士たちに興味を持って読まれた。

・北条氏の利益を優先して編纂されたとされるが、確かに北条氏には特別な記載をとっているのも事実であるが、東国に生まれた武家政権の歴史や、鎌倉幕府の動きと朝廷との関係を知る上に重要な史料であり、合戦の記録・報告・従軍した武士の軍忠を求めての訴訟での聞き取りなどから、その信頼度は比較的高いとされ、頼朝の奥州への遠征や奥州藤原氏を考えるための基本史料としての評価は高いものがある。

・徳川家康・武田信玄などが愛読したことでも知られている。

10 『吾妻鏡』で読む阿津賀志山の戦い

*説明資料は、『令和4年度国見町文化財センターあつかし歴史館町民講座「菊地利雄先生の研究・資料を楽しく読む会」第2回『吾妻鏡』で読む 阿津賀志山の戦い～長年「阿津賀志山防塁」の研究をされてきた菊地利雄氏が、『吾妻鏡』から奥州合戦を読み解く～』から複写したものである。

*同題の講演は、2025年2月14日、講師：笠松金次、国見町郷土史研究会歴史講演会、国見町観月台文化センター大研修室において行っている。

福島県の城館 近世初頭相馬氏の本城

井沼 千秋

はじめに

福島県浜通り地方を領土とした相馬氏は、南北朝時代以来から、小高城を戦国時代まで本城としていたとされている。岩城氏や田村氏、そして伊達氏との抗争を経て、天正18年(1590)の奥羽仕置以後、何度も本城の更新を試みている。本稿では、相馬氏が、国人領主から近世大名となっていく過程で、いかに本城を造り替えていったのかを探るため、近世初頭に本城としていたとされる、小高城、村上城、牛越城、中村城の4つの城館を観察する

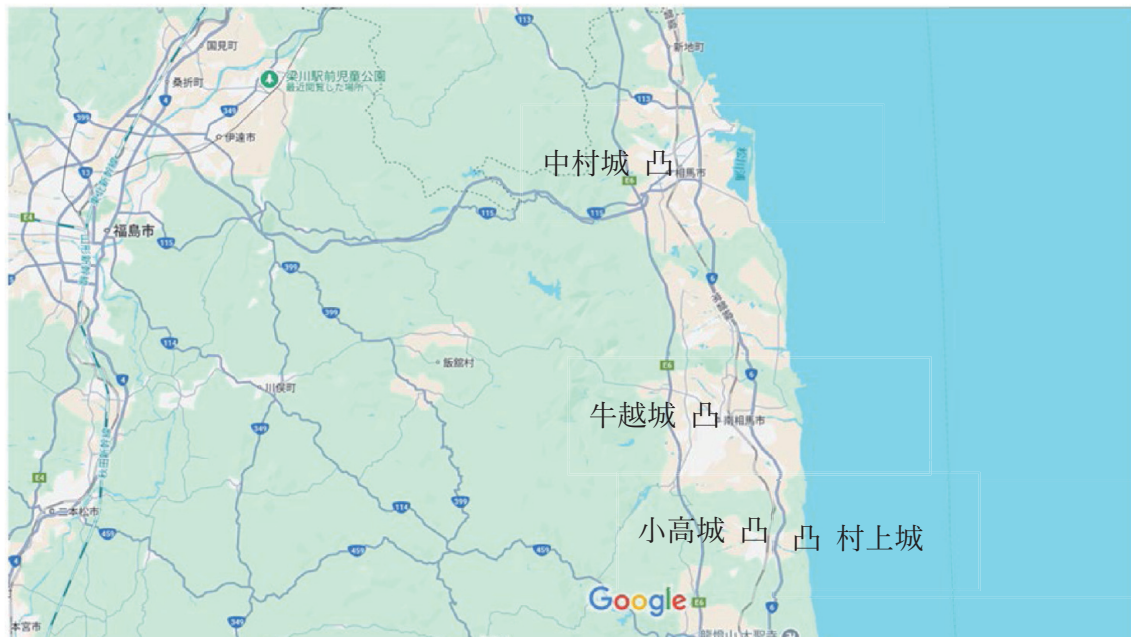


図1 城館位置図

1. 小高城

城の歴史

建武3年(1336)相馬光胤(7代親胤次男)が築き、小高堀ノ内より入ったとされる。以後、相馬義胤(16代)が、慶長2年(1597)に牛越城に移るまで在城。慶長7年(1602)関ヶ原不参加を理由に改易が言い渡され、相馬義胤・利胤(三胤・密胤)が所領安堵されると、牛越城を凶城として廃城、小高城に復帰。慶長16年(16)相馬利胤が中村城に移り、残っていた義胤が翌年に泉田城を隠居城として移す(「利胤朝臣御年譜」)。

小高川左岸の独立丘上を削平して造成

- ・ 現況では、主郭の本丸が 1 / 3 を占める
⇒ 溝等の区画で屋敷割がされていた可能性 (館の集合体)
- ・ 城の北方に武家地となりそうな区画や城館跡があるが、家臣団の集住はそれほど進められなかったか
- ・ 金箔瓦が表採されており、織豊系城郭の影響を受けていた
- ・ 町場は小高川対岸に展開 (牛越より復帰後か)

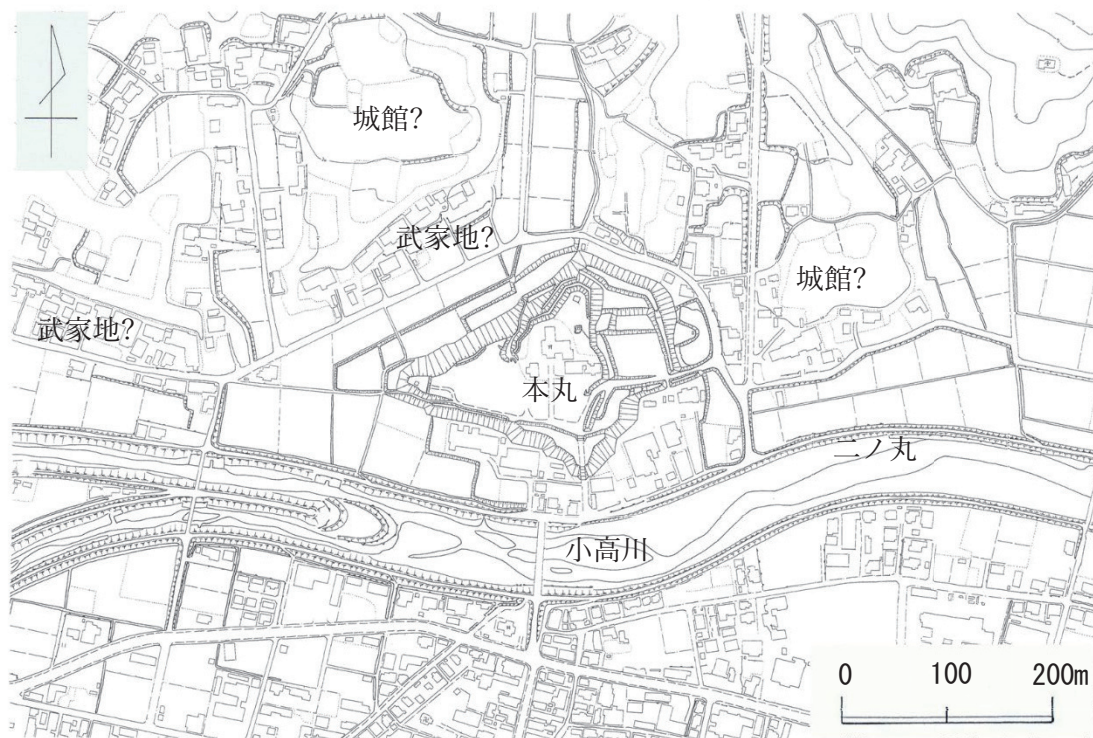


図 2 小高城縄張図

2. 村上城

城の歴史

慶長元年(1596)相馬義胤が、築城を企画したと伝わる。普請はあらかた完成したが、作事のために積んでいた木材が火災となり焼失。このことを凶事として築城は中止、牛越城を改修し、本城とする(「奥相志」)

城の構造

東に太平洋を臨む独立丘上を削平して造成、西から北にかけて小高川、南に前川浦がある。河口、汽水湖を港湾として、海上交通の拠点としようとした可能性が指摘できる。

- ・ 現況では、主郭(I)が 1 / 3 を占め、小高城同様、溝等の区画で屋敷割をしようとした可能性がある。

- ・城のすぐ麓や海岸につづく砂洲上に武家地を展開できそうだが、家臣団の集住はそれほど意識していない。
- ・枡形を用いた出入口を有し、櫓を造って監視しようとした意識は、みられる。

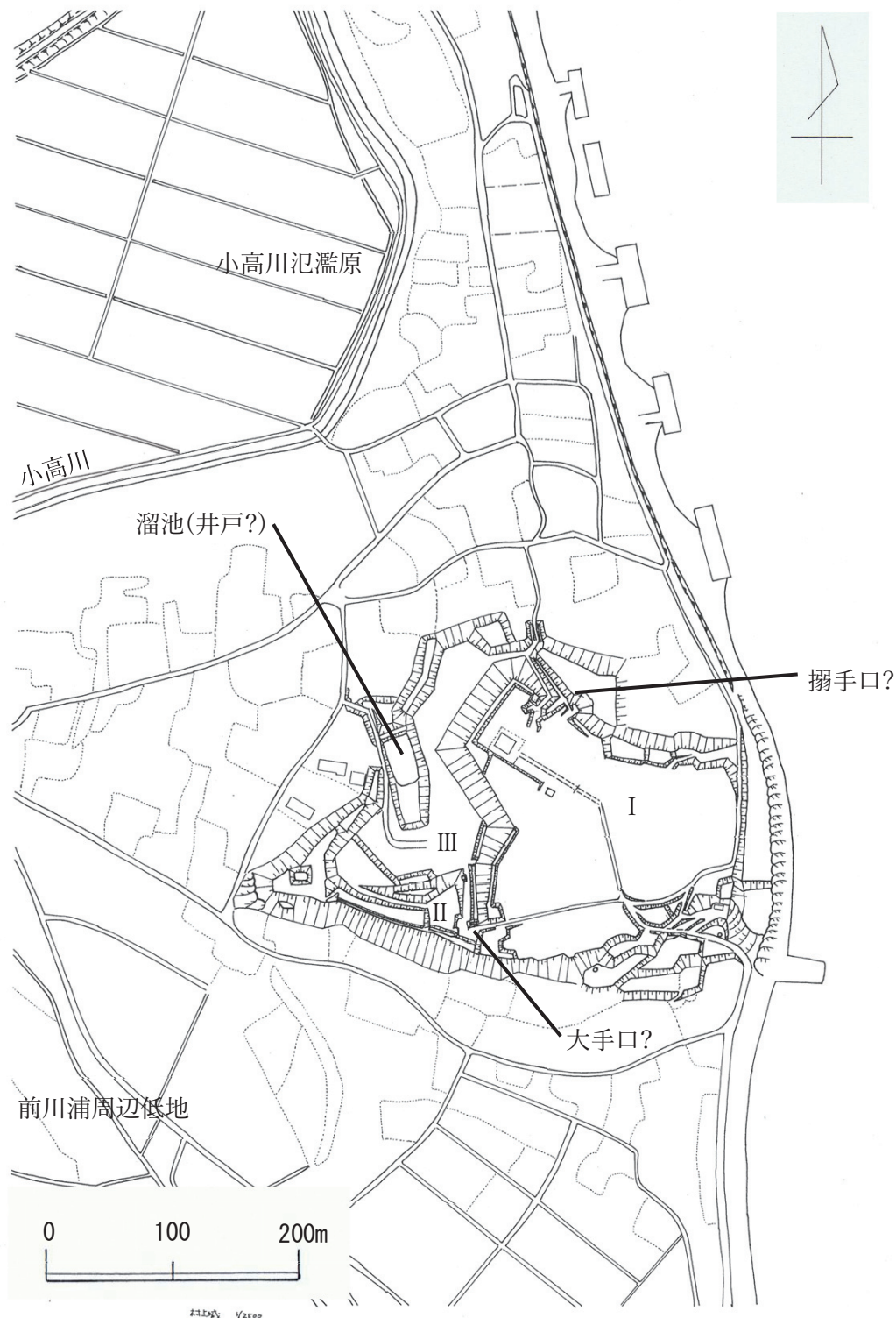


図3 村上城縄張図

3. 牛越城

城の歴史

文安初年(1444)牛越定綱が築いたと伝わるが、翌年には、定綱は、相馬高胤(12代)に滅ぼされる。

慶長2年(1597)相馬義胤が、小高城を転じて牛越城に移る。それ以前は、小屋掛の城で城番、番人が置かれていた。築城の際、泉館主泉胤政が不正ありとして改易。慶長7年(1602)関ヶ原不参加を理由に改易が言い渡され、5月に水谷勝俊に引き渡された。

10月に相馬義胤・利胤(三胤・蜜胤)が復領したが牛越城は凶城として、小高城に移転する。

城の構造

水無川北岸の丘陵先端部に立地。

- ・並立する本丸・二ノ丸と堀切を隔てた東館で中心部を形成。
- ・南側に帯郭、腰郭が階段状に形成され、階層的な城になっている。西側のピークには妙見社を配置し、城主に対抗できる位置を神聖な空間として保持。
- ・屈折した大規模な堀や登城道を櫓台等で監視できる縄張。
- ・馬蹄形の山塊内側に武家地を展開できそうだが、家臣団の集住はそれほど意識していない。
- ・水無川対岸に町場があったというが、現代の区画では短冊状地割は見られない。

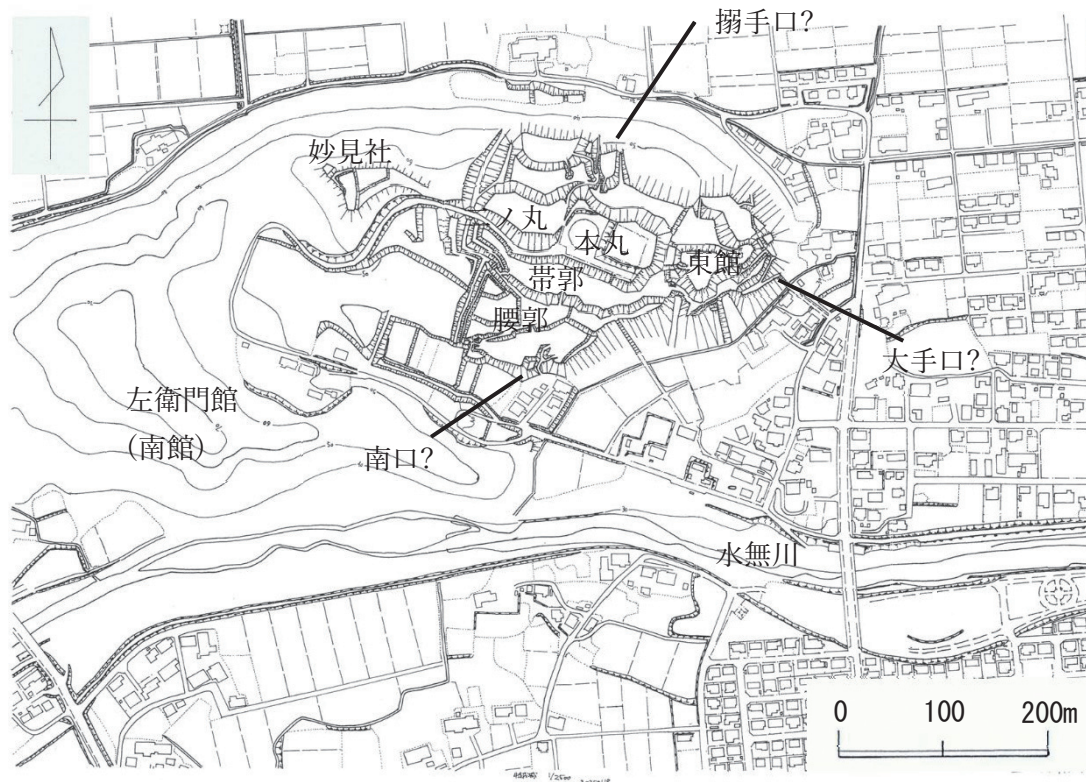


図4 牛越城縄張図

4. 中村城

城の歴史

永禄6年(1563)相馬隆胤(相馬盛胤(15代)次男)が城主となる。天正17年(1589)に隆胤が討死にすると、盛胤が隠居所とする(西館に在住)。慶長6年(1601)に盛胤が死去すると、空城となる。

慶長7年(1602)相馬氏改易時には、大田原晴清・増清兄弟が城番となっていたので、城郭としては認識されていた。

慶長16年(1611)相馬利胤(17代)が中村城を築く(7月～11月)12月2日入城。

城の構造

宇多川北岸の丘陵先端部に立地

- ・本丸に並立する旧西館に妙見社を配置し、城主に対抗できる位置を神聖な空間として保持。
- ・石垣の使用、天守等高層建築の導入しており、近世大名居城としての築城が明らか。
- ・城内に一族、大身の屋敷を配置するが、その後、徐々に城外へ排出する。
- ・登城ルートが常に城内からの監視下に置かれる縄張

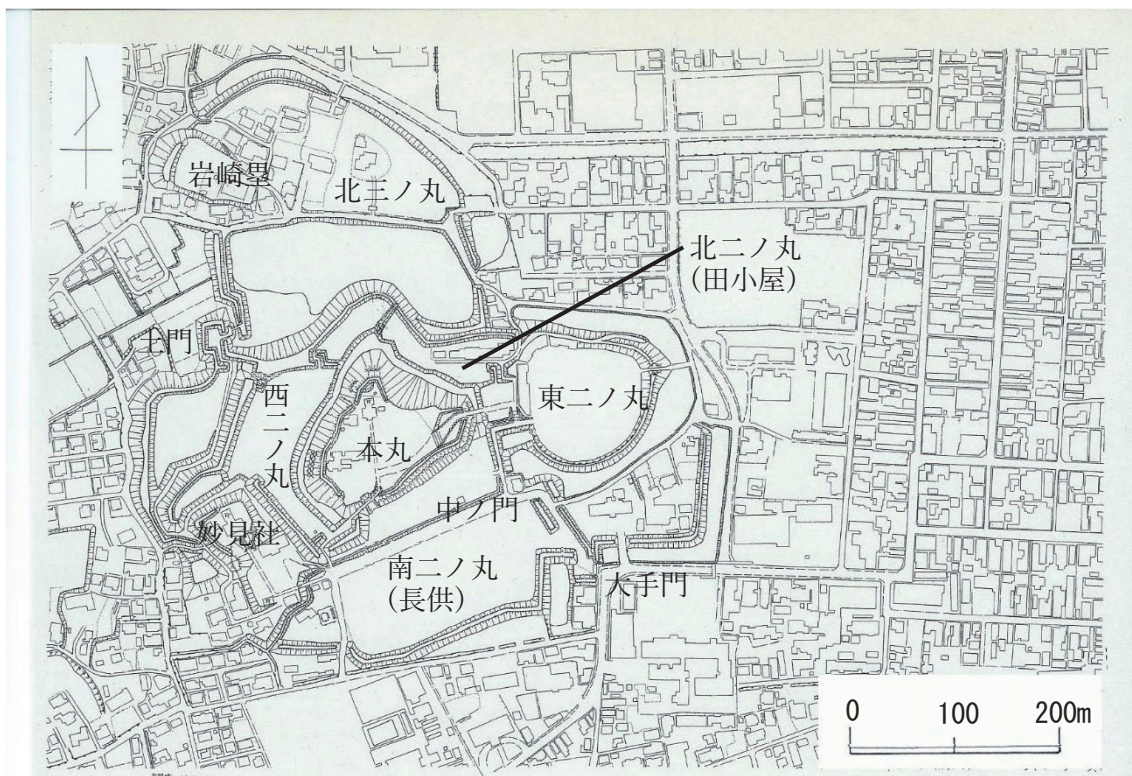


図5 中村城縄張図

建物の建造と配置

宮祠を造営し、仮殿に安置していた妙見のご神体を移す（旧西館）。

中城（本丸）の南西に天守（殿守）、北西に隅櫓（櫓楼）を建造。

- ・寛文10年(1670)落雷により天守焼失
- ・大書院(大広間)は小高城より移す

延宝3年(1675)長徳寺を移して岩崎塁として岡田宣胤居所とする、塁下に岡田氏陪臣屋敷を置く

慶安元年(1648)相馬義胤(18代)、川越城守衛の経験により、大手筋の門を改修。



写真1 大手一ノ門



写真2 中ノ門跡

それ以前の古い形態の遺構も残されている。



写真3、4 土門跡(搦手口)

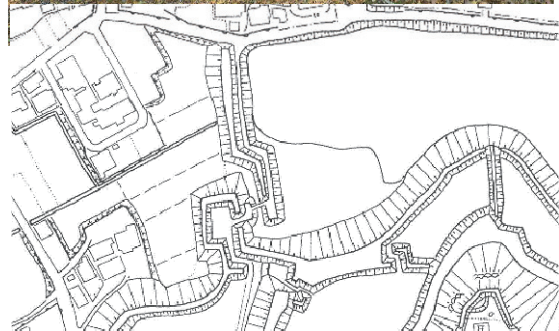


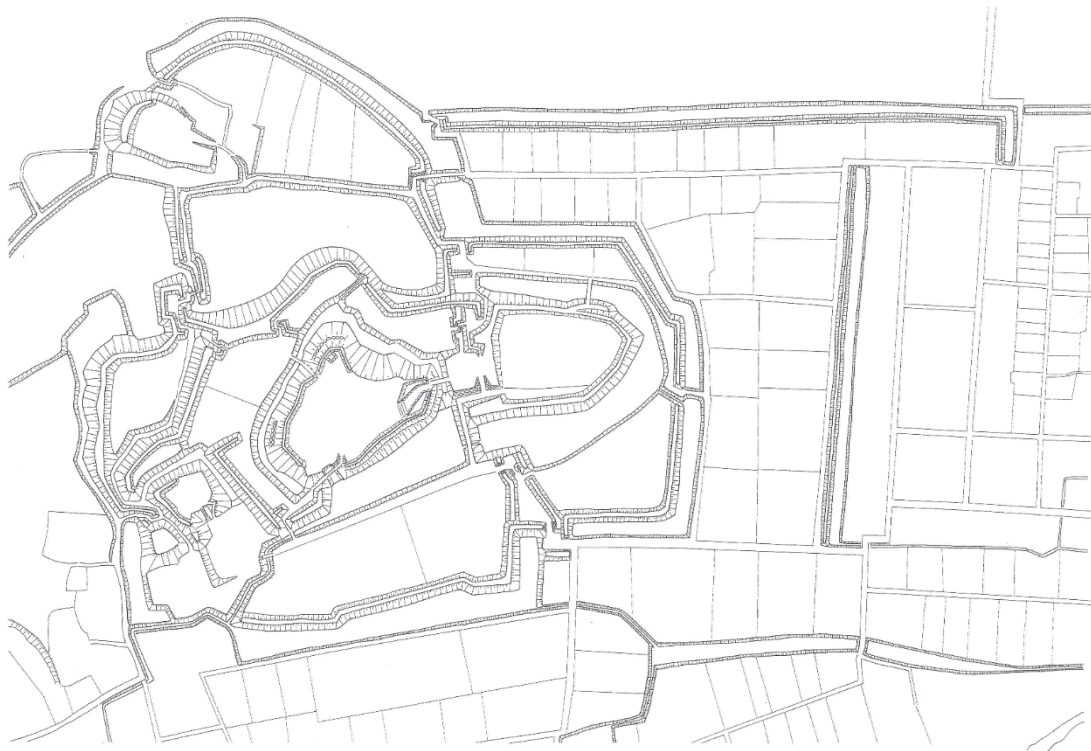
図6 土門跡周辺図

【二ノ丸・三ノ丸の変遷】

南二ノ丸（長友）は、築城当所は、木幡長清（中村城普請奉行）らの重臣邸。延宝3年（1675）南二ノ丸（長友）内の堀内邸が馬院となる。

寛永6年（1629）に相馬義胤（16代）、子の利胤死去に伴い虎之助（後の義胤）補佐のため、隠居先の泉田城より中村城に入る（北二ノ丸（田小屋））。寛永12年（1635）義胤死去後、側室斎藤氏の住居（正保元（1644）死去）、遺跡は斎藤隆清居宅、翌年斎藤宅を新馬場に移し、作院（作事詰所）、米蔵とし、公有化。

寛永18年（1641）東二ノ丸（中館）が堀内胤重第から相馬安胤住居となる、寛文9年（1669）忠胤嫡孫昌胤の居室建造。延宝2年（1674）貞胤（屋形建造、翌年完成）



「中村城下地図」による

図7 中村城跡復元図

おわりに

相馬氏の城には、中世大名から近世大名への変遷が現れている。

小高城・村上城

同一平面の広い平場を区画して屋敷を造る

○惣領家と庶家、上級一族や家臣が並立して屋敷を構える

・相馬惣領家が傑出した存在になれていない

- ・武家地、町場ともにはつきりしない

牛越城

本丸・二ノ丸が頂点に立ち、東館から帯郭、腰郭が階層的になる

○相馬惣領家が傑出した存在になりつつある

- ・本丸・二ノ丸が並立 — 相馬氏の領主二頭制の現れ
- ・まだ武家地、町場がはつきりしない — 在地の館や宿町に居住

中村城

近世城郭として成立

- ・はじめ、一族、大身が城内の二、三ノ丸を占めるが、徐々に城外に排出
⇒城内は、近世大名相馬惣領家の空間に

- ・本丸（中城）並立していた西館は、妙見社境内とすることで、他者が入ることを阻止（隠居も排除）

⇒結果的に 17 世紀いっぱいかった

∴中世から近世へ領土が変わらなかった相馬氏の限界

【参考文献】

岩崎敏夫・佐藤高俊校 1999 『相馬藩世紀第一』続群書類従完成会

岩崎敏夫・佐藤高俊校 2002 『相馬藩世紀第二』続群書類従完成会

岡田誠一 2018 「中近世移行期の「家督」相続と二屋形制～相馬盛胤・義胤と利胤～」『福島史学研究第 96 号』福島県史学会

相馬市教育委員会編 1996 『史跡中村城跡保存管理計画書』相馬市教育委員会

相馬市史編さん委員会編 2023 『相馬市史第 1 巻通史編 1 原始・古代・中世』相馬市

相馬市史編纂会編 1969 『相馬市史 4 資料編 1（奥相志）』福島県相馬市

高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編 1965 『新訂寛政重修諸家譜第 9』続群書類従完成会

高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編 1965 『新訂寛政重修諸家譜第 11』続群書類従完成会

福島県教育委員会編 1988 『福島県の中世城館跡』福島県教育委員会

原町市教育委員会 2003 『原町市史第 4 巻飼料編Ⅱ「古代・中世」』原町市

南相馬市教育委員会 2017 『原町市史第 1 巻通史編Ⅰ「原始・古代・中世・近世」』南相馬市

南相馬市教育委員会 2011 『原町市史第 3 巻資料編Ⅰ「考古」』南相馬市

天正日記と野臥（のぶし）の山里

- 『伊達天正日記』に残る白石市小原地区の謎 -

齋藤 博俊

1. はじめに

「天正日記」は東京大学史料編纂所の所蔵史料目録データベースで閲覧できる史料である。検索すると、原蔵者：伊達宗基（区分謄写本：請求記号2073-103）と原蔵者：本願寺（区分謄写本：請求記号2073-268）の二種類の「天正日記」が表示される。伊達政宗研究で有名な故小林清治氏は二つを区別するため、伊達宗基氏所蔵の謄写本「天正日記」12冊を『伊達天正日記』と名付けた。その史料は天正15年（1587）1月から始まり、天正18年（1590）4月20日で終了している。「天正日記 十二」の裏表紙に「右天正日記十二冊 伯爵伊達宗基氏所蔵 大正五年十月完了」とあり大正時代に書き写したことがわかる。白石市小原（おばら）地区に関する記述は『伊達天正日記 五』（所収「里野臥（さとのぶし）日記」）と『伊達天正日記 十一』（所収「御野臥日記」）に確認できる。台帳形式で小原地区の地名（名称）の脇に侍のような氏名と気になる表記が書かれていた。名称や苗字は現在とほぼ変わらないものであるが、430年以上前の米沢時代の伊達政宗と小原地区との関係を唯一残している貴重な史料である。今回は歴史が苦手な私が10年前に出会った史料を共有し、今後の郷土史研究に少しでも繋がることができれば幸いである。「野伏」または「野武士」という呼び名を「野臥（のぶし）」と表記して進めたいと思う。

2. 「伊達家日記」と『伊達天正日記』について

『伊達天正日記』所収「里臥日記」「御野臥日記」と同じ内容が収められた「伊達家日記」という史料の存在を知った。「伊達家日記」も同所のデータベース所蔵の原蔵者：森沢かず子〔持参〕（区分写真帳：請求記号6173-252）撮影：昭和51年（1976）という全7冊である。天正15年正月（1587）から天正18年10月（1590）の伊達家の古文書を撮影したものであるがデータの閲覧はできない。小原地区の記述は「伊達家日記 六」にあることを知り、同所より複写を入手して内容を確認すると『伊達天正日記 五』所収の「里野臥日記」（天正17年正月-4月）はP. 90～P. 102に、『伊達天正日記 十一』所収の「御野臥日記」（年月未詳）はP. 1～P. 14に同様に記載されていた。綴られている順序に違和感を持ったが、急いでいたような筆遣いで天正時代の小原地区に住む人名が記されており緊張が伝わる史料「伊達家日記」は『伊達天正日記』の原本

であると確信を持った。

淑徳大学遠藤ゆり子氏は平成29年（2017）「市史せんだい VOL. 27」特集論文【『伊達天正日記』所収「野臥日記」の一考察 - 政宗による民衆の軍事動員を考えるために -】の中で、「伊達家日記 六」を底本にその中の「御野臥日記」と「里野臥日記」を翻刻し内容を比較しながら専門的に問題点を論じている。『伊達天正日記』（謄写本）と同じ内容の「伊達家日記」（写真帳）について遠藤氏は「謄写本は写真帳の原本に依拠して作成されたと思われるが、原本の所在は不明である」と述べている。貴重な史料「伊達家日記」は写真撮影後に所在が不明になっているのである。

『伊達天正日記』と名付けた小林清治氏は昭和40年（1965）「福島大学学芸部論集 第17号」の論文【戦国大名下級家臣団の存在形態 - 伊達家名懸衆の研究 -】の中で、『伊達天正日記』所収の「野臥日記」等を専門的に分析しているが、「伊達家日記」との関係は史料が確認されたのが論文発表後のため言及はない。

写真帳のデータ使用は申請が必要となるため今回は割愛した。また、同所の史料目録データベース所蔵の同じ「伊達家日記」（別題「伊達日記」「伊達成実記」）の説明も割愛する。

『伊達天正日記』についての文献

◎校注 小林清治 「伊達史料集（下）」人物往来社（1965年）

P. 214～

[解題] にて『伊達天正日記』全12冊の基本情報を解説

（伊達天正日記 五 説明文に「里野臥（さとのぶし）日記」

（伊達天正日記 十一 説明文に「野臥日記」「御」記載なし）

◎編集福島県 「福島県史 第7巻（資料編2）」（1966年）

P. 752～

伊達史料集（下）で収録できなかった『伊達天正日記』を収録

（福島県関係のみ全文収録）

◎南奥羽戦国史研究会 「伊達天正日記 天正15年」岩田書院（2018年）

未翻訳の天正15年分を翻訳

P. 5～ [解題] にて伊達天正日記12冊と伊達家日記7冊の基本情報を解説

「伊達家日記 六」説明文に「野臥日記」「御」記載なし）

3. 「御野臥日記」と小原地区

データベースで閲覧できる『伊達天正日記 十一』の「御野臥日記」(謄写本)を基本にその内容を確認すると、「一 小原・一 白石・一 新田・一 やづみや… (省略) 一本内」で終わる計25箇所の地名(現:宮城県と現:福島県)から始まる。

小原地区の記載は「小原郷伊賀分」と書かれた後に小原41箇所の地名(名称)があり、人名が記録されている。人名の上には「上」・「中」・「下」とあり、最後には「上衆六十七人」「中衆十四人」「下衆九人」「以上九十人」とあることから、伊達政宗が戦に動員できる小原地区在住の人員は90人存在していたことになる。人名の上の「上・中・下」については研究者の間で見解が分かれている。

「御野臥日記」気になる記述について

「一 湯沢 鉄炮 齋藤平さへもん」

「湯沢」の場所は旧宿場町下戸沢周辺。鉄炮=火縄銃、齋藤平さへもんは鉄砲に関する人物であると思われる。この場所は国指定天然記念物「小原のヒダリマキガヤ」の所在地:白石市小原湯沢神前(小原小学校下戸沢分校跡)であり、福島県へと通じる小坂峠への出入口。小原二十騎の構成員に齋藤平左衛門の名がある。

「一 赤坂 いかきつ衆 上半沢弥さへもん 馬上」

「一 赤坂 いかきつしゅ 上半沢弥平 馬上」

「赤坂」の場所は鉢森峠の出入口に位置しているが、現在赤坂に「半沢」姓は住んでいない。「いかきつ衆・いかきつしゅ」は伊賀近習。名前の上に「上」そして「馬上」とあることから、身分の高い人物と推測できる。半沢弥平と半沢弥左衛門の名前は同じ赤坂に住む小室蔵人の名と共に『伊達天正日記 八』の中にも記されていた。それは天正17年の年始に米沢時代の伊達政宗に挨拶をした時の記録で、関係する論文は菅野正道氏が仙台市博物館調査研究報告 第17号【天正十七年の伊達氏の正月行事―「茶湯客座亭座人数書」と「矢日記」・「玉日記」の再検討―】(1997年)である。

小原の野臥と思われる3名が正月十四日に献上した品物は順に

小室蔵人	御弓二丁・御酒
半沢弥平	御酒代一こん
同 弥左衛門尉	同 一こん

弓や酒を献上できる身分の人物であったことがわかる。弥左衛門尉と記されているが、「尉」の称号も気になる部分である。小原二十騎の構成員に半沢弥兵衛の名が見られる。

また、地名(名称)の下に「御大領」と書かれた場所が4箇所ある。

「一 おいの蔵 御大領 上 高橋九郎さへもん

上 同備後守

上 助四郎

上 源七」

「一 舟合 御大領 上 一條源兵衛」

「一 なべやり 御大領 上 斎藤千代松丸 御なかけ」

「一 神原 御大領 上 大竹藤十郎」

「おいの蔵」「舟合」「なべやり」「神原」の4箇所は重要な場所と思われる。地元に住んでいるので直ぐに「おいの蔵＝追倉（おいのくら）常福院周辺」（追倉地区『百矢納め』大雷神社）「舟合＝舟合（ふなせ）東北電力刈田発電所放水口～蔵本発電所取水口周辺」（舟合屋敷『百矢納め』八幡神社）「なべやり＝鍋割（なべわり）赤坂～新町の鉢森峠出入口周辺」とわかったが「神原」という地名は小原には無く、白石川下流左岸で小原溪谷の深い溪谷が始まる福岡蔵本「上原」が「神原」と推測すると、東北電力蔵本発電所周辺になり、「舟合」で取水した白石川の水（発電後）の放水口に繋がるのである。「舟合」には小原二十騎の構成員、一條源兵衛の名が見られる。

「一 なべやり 斎藤千代松丸 御なかけ」

「御なかけ」は「御名懸」で通常は「名懸」＝動員令によって武装して従軍する在家主のことで、仙台市の名掛丁のルーツに繋がる。「名懸」そして野臥であるのに「御」が付く。

「一 ゑし 御ふたん 斎藤々七郎」

「ゑし」は現在の江志で国指定天然記念物「小原の材木岩」のある周辺の場所。「御ふたん」は「御不断」で通常は「不断」＝米沢城に不断に詰めて警備にあたる兵のこと。ここでも「不断」にも「御」が付いている。

「新屋敷」「歌屋敷」「屋敷」「ひかし屋敷」という名称の場所に住んでいる点や、「いか分＝伊賀分」「いか近習＝伊賀近習」という表記が多数見受けられる点も興味深い。「御野臥日記」に書かれてある地名(名称)人名を地図上に表してみると、ほぼ全域にわたっていた。小原地区は阿武隈川水系の支流「白石川」流域の右岸と左岸の山間に沿った山里で、下流には溪谷最大の難所「碧玉溪（へきぎょくけい）」がある。白石へ通じる溪谷沿いを通る現在の道（福岡蔵本～小原温泉間）は明治20年まで無く、白石と小原を結ぶ道は小原地区の赤坂と白石市大平地区森合間の「鉢森峠（白石市）」が中心で、その他「小坂峠（小原⇄福島県国見町）」「山崎峠（小原⇄国見町）」「石母田（いしもだ）峠（小原⇄国見町）」、白石川上流で山続きの七ヶ宿町の峠には「金山峠（七ヶ宿町⇄山形県上山市）」「二井宿峠（七ヶ宿町）」「稲子峠（七ヶ宿町）」「刈田峠（七ヶ宿町⇄蔵王町）」等がある。峠から分かれた「けものみち」のよ

うな隠れた近道もあったと思われる。材木岩と風穴、涅槃像の頭部から胸部に見える鎌倉山、鮎や鱒が遡上した白石川と天然自噴の温泉の湧く小原地区。複雑な地形には鉱山跡や館跡、土器も出土することから「御野臥日記」に記される前の古い時代から独立した村社会があった可能性が考えられる。

4. 「小原二十騎」について

「御野臥日記」が書かれた天正17年は伊達政宗23歳、豊臣秀吉が天下統一に向けて勢力を強めていく頃で、日本各地で様々な作戦が繰り広げられた時代と重なる。天正19年(1591)奥州(奥羽)仕置で古くからの伊達家の領土を秀吉に没収された政宗は岩出山へと移り、その9年後の慶長5年(1600)上杉景勝の領地であった白石城を取り戻す作戦(通称「白石城の戦い」「白石城攻落戦」)に出る。その際に政宗公に味方をした小原の野臥20人が「小原二十騎」である。実際は「小原十九騎」または「小原十八騎」と伝わっている。仙台藩の正史「伊達治家記録」や片倉家の「片倉代々記」に野臥20人の名前がフルネームで記録されていることから現在は「小原二十騎」に統一している。

「伊達治家記録 二」貞山公治家記録 卷之二十上(P.432～)に伊達政宗が白石城を攻撃した際、野伏(原文通り「野伏」)の行動が記載されている。省略して説明する。

慶長5年6月14日 政宗公 大阪を出発

7月12日 名取 北目城に到着

そのころ

(小原村の野伏20人が上杉領地の警固番と一戦を交える)

〈原文〉

「刈田郡小原邑ノ野伏齋藤喜右衛門・其弟齋藤吉左衛門・半澤彌兵衛・小室太郎右衛門・半澤雅樂助・小室彦七郎・半澤孫右衛門・原田主計・一條源兵衛・高橋正右衛門・高橋助五郎・作間又三郎・齋藤平左衛門・其子齋藤善七・高橋源兵衛・其弟山岸新右衛門・齋藤三右衛門・小室出雲・齋藤源右衛門・野伏頭小室總次郎都合二十人ノ者共打出」(「伊達治家記録」より)

(小原村の野伏(2名)は捕らえた敵を北目城に持参、屋代勘解由が間に入り小原村の野伏御味方に参上と言上)

政宗公は

「24日には白石へ出馬するのでそれまで小原をささえよと鉄砲八挺を授けた。」(訳：片倉信光著「白石城」より)

〈原文〉

「來ル廿四日ニハ、白石へ出馬シ玉フヘシ、其前何トソ小原ヲ抱持
スヘシト仰付ラレ、鐵砲八挺下し賜フ。」（「伊達治家記録」より

また

（同郡渡瀬村の野伏は小原村の野伏と共に小原舟石の所で上杉領地

警固番と一戦交え、同じく北目城に敵を持参し、屋代勘解由をも
って御味方を申し出る）

7月22日 政宗公岩沼城に宿陣

7月23日 政宗公岩沼城から柴田郡四保（船岡）に宿陣

7月24日 政宗公朝 白石へ

「小原・渡瀬村の野伏共も御味方に参じたが、城攻めを見物すべし
として蔵本に差し置かれた。」（訳：片倉信光著「白石城」より）

〈原文〉

「小原・渡瀬兩邑ノ野伏共、御本陣ノ近所蔵本邑ニ打出、群リ居ルヲ
公見給ヒテ、何者ソト尋ラル。頃日御味方ニ参リタル山中ノ者共ナ
リ、今日御發向ノ由ヲ承リ、罷出ルト申ス。奇特ニ罷出ルト褒美シ
玉ヒ、汝等今日ハ働キニ及サル間、城攻ヲ見物スヘシト仰付ラル」
（「伊達治家記録」より）

小原村の野臥と渡瀬村（七ヶ宿）の野臥が味方に付いたという記録は「片倉代々記」の中にも同様に記された。「片倉代々記」では一頁落丁しており、「以下一頁落丁……ここに次の文を補う。『貞山公治家記録』による。と書かれているが、慶長5年の白石城を攻撃した部分は「伊達（貞山公）治家記録」から写したものと考えられる。

小原の野臥20人と渡瀬村の野臥3人（小川三郎左衛門・古山新右衛門・齋藤文右衛門）が政宗の動きに合わせたように働き、政宗が到着した北目城へ赴き貴重な鉄砲を預かり、城攻めの日を教えられている。そして城攻め当日に政宗が野臥を褒美し、城攻めを見物するよう直接話した内容が「伊達治家記録」と「片倉代々記」に記録された。

「白石城の戦い」については、時の城主（甘糟備後）が不在で、白石城の構造や地形を熟知している伊達軍は一日で白石城を攻め落としたという内容のものが多く、野臥の活躍について書いた本は少ない。代わりに脚色された軍記や様々な後日談（面白おかしく書かれた「山中記」や動物にまつわる怪談話など）が見受けられる。

余談になるが、「伊達治家記録」に片倉小十郎の嫡男（二代目小十郎重長17歳）が白石城の石壁に登り、続いて登った二名が相手の弩（ど）に討たれて戦死したという内容も記載されているが、危機一髪の出来事と、弩という珍しい武器を上杉軍は白石城内で使っていたことがわかる特筆すべき部分である。白石城奪還に成功した政宗は石川昭光を城主に、二年後の慶長7年に片倉氏が引き継いだ。

その後、小原の野伏の一部は大坂夏の陣に随行し大手柄を上げたり、片倉氏に召し抱えられた6家系の記録が残る。渡瀬の野伏の住む刈田郡滑津・関（下関）・渡瀬の3つの村は1年後の慶長5年8月に石川氏(角田)の知行地になった。小原の野臥と渡瀬の野伏を分けた可能性を考えてみるのも面白い。

5. 忍びの里と小原地区

「御野臥日記」の小原地区の記載は「小原郷伊賀分」から始まり、地名の下にも「伊賀近習」が6箇所「伊賀分」が17箇所記載されている。「伊賀」といえば三重県の「伊賀」、その隣の滋賀県には「甲賀」があり共に「忍びの里」で有名である。その「伊賀・甲賀」と「小原」を結ぶ意外な共通点を見つけた。それは国内でも珍しい榎（カヤ）の木の変種のヒダリマキガヤとコツブガヤである。小原地区には国指定天然記念物「小原のヒダリマキガヤ」と「小原のコツブガヤ」という類似した名前を持つ2本の榎の古木がある。三重県名張市「伊賀」には県指定天然記念物「長瀬ノ左巻榎（推定350年～400年）」、そして滋賀県蒲生郡日野町（伊達政宗の飛地）「甲賀」には国指定天然記念物「熊野のヒダリマキガヤ（推定樹齢600年）」がある。「小原のヒダリマキガヤ」の天然記念物指定に尽力した小原の植物学者齋藤四郎治氏は、「熊野のヒダリマキガヤ」を基準として昭和6年に申請をし昭和17年に天然記念物の指定を受けた。「小原のコツブガヤ」の登録申請も齋藤氏が行った。コツブガヤを調べると、名張市に植物学上同種の基準となる「長瀬のコツブガヤ」の存在を知ったが昭和34年に倒木していた。名張市には小原と同じように榎の変種が2本揃っていたことになる。また、三重県鳥羽市河内に国指定天然記念物「丸山庫蔵寺のコツブガヤ（推定樹齢400年以上）」山梨県甲斐市篠原に山梨県指定天然記念物「法久寺のコツブガヤ（樹齢不明）」があり、戦国時代の水軍や歴史に名を残している場所と繋がる。「忍び」と称される異能集団発祥の地との関係性を考えると非常に興味深い。

「小原のヒダリマキガヤ」の所在地湯沢神前は「御野臥日記」に「一 湯沢 鉄炮 齋藤平さへもん」の名前があり「小原のコツブガヤ」の所在地下苗振は「一下ないぶり いか分 上 高橋出雲 上 さがり平さえもん 下 彦六 御さしかさやく」と3人の名が記録されている場所である。下苗振には政宗が鮎漁で立ち寄る「御飯屋」があった。白石城の戦いの戦地として名前が出てくる舟石もこの下流辺りになる。近くの「塩ノ倉」には塩の貯蔵庫があったとされ、政宗が娘の牟宇姫に小原で獲った鮎で作った鮎鮓を贈った手紙や、亡くなる前年（寛永12年）に峠を越えて小原を訪れ鮎漁をされた記録が残っている。

小原地区にある2本の榎の変種の推定樹齢は共に250年と公表されているが、将棋盤などに加工される西日本の榎と比べると北国の榎の成長は非常に遅いと感じる。発見されて約100年、発見当時の推定樹齢が150年。発見後の成長具合と推定樹齢の関係や、同じ遺伝子を持つ榎は他にあるのか等、最新の方法で再調査が行われることを望む。

6. おわりに

野臥は野伏（のぶせり）というようにアウトロー的な意味合いで使われるため、受ける印象は良いとは言えない。小原の「野臥」が記された伊達家の台帳に「御」を付けたことも解明されていない。小原は落ち武者が住み着いた隠れ里だったのだろうか。戦国時代の長引く争いを避けて移り住んだ秘密の山里だとしたら地形的にも最高の環境であったと推測する。「小原」の地名の由来や細川家との繋がりも非常に気になる点である。「白石三白」の和紙・葛・生糸の生産も盛んであった小原地区は、ただの農村では無かったという結論が浮かんでくる。白石川の右岸と左岸に何本も架けてあった吊り橋と峠道、温泉と風穴や信仰の対象に値する材木岩や鎌倉山、記念に植栽された様な珍しい古木、狼煙台と伝わる高台の祠や石垣などは非常に興味深い。『伊達天正日記』と繋がる小原地区に関する史料の発見を願わずにはいられない。

引用・参考文献

東京大学史料編纂所 所蔵史料目録データベース 1916「天正日記」wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp

遠藤ゆり子 2017『『伊達天正日記』所収「野伏日記」の一考察』『市史せんだい』vol.27 仙台市博物館

小野寺寅雄 1999「みやぎの峠」河北新報社

角田市史編さん委員会 1986「角田市史2 通史編 下」角田市

片倉信光 1982「白石城」白石市文化財愛護友の会

川北要始補 2007「三重の巨木・古木」（公社）三重県緑化推進協会

川村要一郎〔訳・編〕2007「白石城主片倉氏と家臣の系譜」創栄出版

菅野正道 1997「天正十七年の伊達氏の正月行事」『仙台市博物館調査研究報告』第17号 仙台市博物館

小林清治 1965「戦国大名下級家臣団の存在形態」『福島大学学芸部論集』第17号 福島大学

小林清治〔校注〕1967「伊達史料集 下」人物往来社

佐藤憲一 2019「伊達政宗公の次女牟宇姫ものがたり」角田市

七ヶ宿町史編纂委員会 1978「七ヶ宿町史 資料編」七ヶ宿町

白石市史編さん委員会 1974「白石市史 5 資料篇 下」白石市

白石市史編さん委員会 1984「白石市史 3 の（2）」白石市

白石市商工観光課 1979「しろいし郷土の夜話」白石市

平重道〔編〕1973「伊達治家記録 2」宝文堂

半澤秀雄 2015『『小原村誌』の著者 齋藤四郎治の生涯と日本の動き』個人出版

古田義弘 2013「仙台城下の町名由来と町割」本の森

読売新聞東北総局 1995「白石城物語」（財）白石市文化振興財団

宮城県南部の蛇像

－附、蛇石碑の補遺－

石黒伸一郎

(1)はじめに

今年は巳年なので、蛇にまつわる民俗資料を発表する。蛇は、縄文時代の土器や土偶にも取り付けられ、非常に古くから身近な存在の動物である。龍とともに水に関係する、屋敷の守護神、金運上昇の神様、あるいは弁財天のお使いの動物などとして信仰されている。仙台市以南の県南部には、蛇の姿を浮き彫りや線彫りした石碑、蛇神・蛇類明神・金蛇神社・蛇供養・蛇霊神などの文字を彫った石碑が多数確認されている。それらについては、『東北民俗』第55・56輯に報告した(文献1・2)。収録した数は62基である。年代については、江戸時代中期から昭和20年代と幅広いが、江戸後期から明治時代に多く立てられた。その造立趣旨は、養蚕神としての「蛇神」、あるいは蛇の供養や祟り封じが多いと推測した。石碑以外では、蛇の姿を丸ごと彫った石像が、村田町と丸森町に6点、木製などの蛇像が村田町の旧家で4点見つかったのでここに報告し、若干の考察を加えたい。あわせて、『東北民俗』刊行後に確認した蛇の石碑も紹介する。ここでの名称は、小字名や神社名を頭に付けたが、便宜上なもので正式な名称ではない。拓本の縮小率は任意である。

(2)石製の蛇像

①熊野神社像(第1・2図)

村田町大字小泉字北姥ヶ懐、熊野神社の社殿内に祀られていた。村田町教育委員会により昭和62年12月8日に調査が行われ、後に『村田町の石碑(姥ヶ懐編)』という報告書に収録された。後日、その蛇像は盗難に遭い、現在も行方不明である。実地に調査をすることが出来ないで、調査カードと報告書に基づいて記載する。石材は不明。高さ20.5cm、幅18.0cm、奥行き18.5cm。玉に巻き付く蛇を丸彫りしている。首は、玉の後ろから伸びし、頭が最も上に現わされ、体表面には鱗が彫られている。下は、方形の台となっている。報告書によれば、渡辺孝治氏の曾祖母はるよさんが長患いをした時に祈祷したら蛇のたたりと言われ、それで、裏の熊野さんに蛇を刻して祀ると全快したという(文献3)。



第1図 熊野神社像、正面



第2図 前同、左側面

②迫像(第3～7図)

村田町大字村田字迫、個人宅の裏山にあり、稲荷の石祠と「奉勧請土公神守護」の石碑とともに祀られている。石材は、玄武岩質安山岩(村田石)を用いている。高さ25cm、幅

2 宮城県南部の蛇像

14.5cm、奥行き 12.5 cm。玉に巻き付く蛇を丸彫りしている。頸は、玉の後ろから伸ばし、頭が最も上に現わされ、鱗が細かく彫刻されているが、全体的に右にやや傾いている。玉の最大径は 10.2cm。下は、方形の台となっている。台の正面に「奉納」、右側面に「大正八年」、左側面に「旧正月廿八日」と彫られている。この家の当主は、蛇石像を「ヘビノカミサマ」と呼んでいる。文献は、『村田町の石碑（村田字町編）』（文献4）。



第3図 稲荷の祠・蛇石像・「奉勸請土公神守護」碑の全景



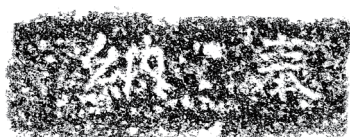
第4図 迫像、左側面



第5図 前同、正面



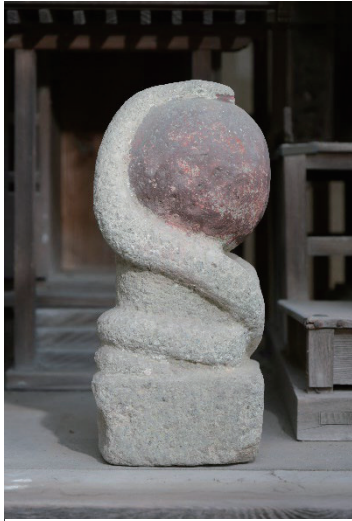
第6図 前同、右側面



第7図 前同、台石部分拓本

③町像（第8～10図）

村田町大字村田字町、江戸時代から続く商家の中に、屋敷神が祀られている。「正一位稲荷大明神」（明治44年）の扁額があり、祭神は宇迦之御魂大神（うかのみたまのおおかみ）と推定される。その屋敷神内に蛇石像が祀られている。石材は、白色の凝灰岩を用いている。高さ27.3cm、幅11.2cm、奥行き11.8cm。玉に巻き付く2匹の蛇を丸彫りしている。蛇は、下から上に伸び正面で交叉し、玉の後ろから2つの頭が現わされている。蛇の口と玉は、赤い彩色がみられる。眼は黒く彩色されている。蛇の体表面には、鱗が細かく彫られている。玉の最大径は10.8cm。下は、方形の台となっている。



第8図 町像、左側面



第9図 前同、正面



第10図 前同、裏面

④早魃田像（第11・12図）

丸森町耕野字早魃田、個人宅に祀られている。そこは、主屋とはかなり離れた竹藪の緩斜面である。緩斜面の一部を長方形に掘り、ブリキ製の屋根が架けられている。屋根の高さは39cm、幅43cm、奥行き58cm。石材は、薄い赤色を呈した伊達市梁川産の凝灰岩（赤滝石）を用いている。トグロを巻く蛇が丸彫りされている。頭は正面を向いている。下は、方形の台となる。高さ23.0cm、幅17.5cm、奥行き20.0cm。所有者は、この蛇石像を「ヘビガミサマ」と呼んでおり、正月15日に、松と幣束を立て、藁飾りを下げ、米を包んだ和紙をツツコに入れて供えている。前当主は、マムシを獲って売っていたので、この石像を昭和20年代に立てたと伝わる。



第11図 早魃田像、正面



第12図 前同、頭部アップ

⑤中ノ沢像（第13・14図）

丸森町耕野字中ノ沢、個人宅の屋敷神の石祠と並んでいる。その場所は、主屋とは離れた丘陵上で、周囲は竹藪となっている。蛇石像は、石祠の中にはめこまれている。石祠は、伊達市梁川産の凝灰岩（赤滝石）を用いている。母屋の大きさは、高さ26cm、幅18cm、奥行き15cm。母屋の正面には、縦19cm、幅9cm、奥行き11cmの長方形の孔がある。屋根が失われ、花崗岩の角礫が乗せられている。下には、花崗岩の台石がある。石材は、石祠と同じ凝灰岩（赤滝石）で、上にトグロを巻く蛇を立体的に彫刻し、下は方形の台となっている。蛇の頭は、欠失している。大きさは、残存高11cm、幅8cm、奥行き8cm。



第13図 中ノ沢像、全景



第14図 前同、祠内の蛇石像

⑥鹿島神社像（第15～19図）

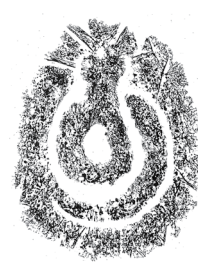
丸森町小斉字日向、鹿島神社の境内。拝殿へ向かって左手に「蛇塚」があり、ここには次のように伝説がある。天正年間（1573～1592）、鹿島神社の境内に周り2丈余りもある桜があった。その根元には、大人が数人入れる空洞があり、葉が茂っている季節は昼なお暗く、化け物でも出そうな場所であつた。ある夏、小斉村に雷雨があり桜に落雷して、数日も燃え続けた。その間、異様な臭いが隣村まで広がった。人々は恐れおののき、神様に訊いてみよう、湯立てをして託宣を仰いだ。そうすると、神様が言うには、桜の中には毒蛇が居て、村人に危害を加えようとしていたので、雷を落として退治したのだという。村人は、神様に感謝して盛大な祭りを執り行った。数日が過ぎて、桜の焼け跡へ行ってみると、大蛇の骨らしき物が残っていて、頭があった付近には牙が転がっていたので宝物とした。その後、熱の病には、この牙を削って飲むと効果があるとされた（文献5）。大蛇の死骸を埋めたのが「蛇塚」で、「大蛇の牙」は現在でも鹿島神社の神宝となっている（第20図）。蛇塚の石積みの上に蛇石像が祀られている。石材は、礫岩を用いている。全体的に台形を呈しており、その上面に「の」字形にトグロを巻く蛇が浮き彫りされている。高さ13cm、幅17cm、奥行き13cm。蛇の大きさは、縦13cm、横10cm、厚さ1.3cm。側面に「二十九年」と彫られている。



第15図 鹿島神社の蛇塚



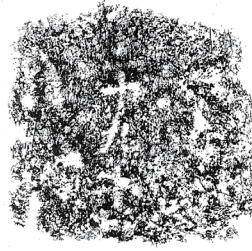
第16図 前同、蛇像



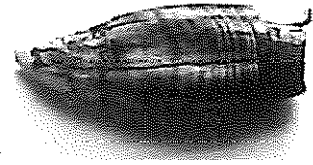
第17図 前同、上面拓影



第18図 前同、側面



第19図 前同、側面拓影



第20図 鹿島神社、大蛇の牙

(文献5から複写)

(3)木製などの蛇像

①旧大沼家像 (第21～23図)

村田町大字村田字町191番地、重要文化財に指定されている旧大沼正七家。江戸時代からの商人で、紅花などを商った。文政11年(1828)に建てられた「新蔵」と呼ばれる土蔵2階の神棚に、3点の蛇像が祀られている。便宜上1号像から3号像とする。

1号像は、木製で仏師の作と推定される。トグロを巻く蛇が岩座に乗っている。身体は褐色で、点状の模様が現わされている。腹の方は薄い黄色。胡粉を塗ってから彩色されている。眼・口・鱗は赤色。ゴツゴツとした岩座は、全体的に黒色で、所々に緑色で花が描かれている。台座は、金泥を塗っている。総高7.5cm。蛇の高さ5.0cm、最大径4.3cm。台座の高さ1.2cm、幅7.5cm、奥行き6.7cm。

2号像は陶製で、頭部が欠損している。トグロを巻く蛇の姿である。身体の上表面には、白色の釉薬がかかっており、細かな刻みで鱗を現わしている。わずかに残る頭部は、暗褐色を呈している。残存高5.5cm、最大径は5.6cm。木製の升に入っているが、これは専用ではなく流用である。升の側面には、丸に京の焼印が捺され、高さは3.2cm。

3号像は、緑灰色の練り物製で、材質は不明である。中には白い繊維が多数混入している。トグロを巻く蛇の姿であるが、頭部を欠損している。身体の上表面は、黒褐色に彩色されているが、剥がれている部分もみられる。細かな直線で鱗模様を現わしている。残存高3.5cm、最大径6.5cm。



第21図 旧大沼家1号像



第22図 旧大沼家2号像



第23図 旧大沼家3号像



第24図 旧加島家像

②旧加島家像（第24図）

旧加島家は、村田町大字村田字町183番地に存在していた。雑貨商、繭の仲買人、食堂などを営んだが、令和4年に解体された。蛇の像が、もともとどこにあったのかは不明。木製で、トグロを巻く蛇の姿であるが、円形ではなく、やや複雑な巻き方である。頭部を欠損している。全体的に暗褐色を呈している。鱗は、細かな曲線を刻んで表現している。腹面側にも、細かな彫刻がみられる。残存高2.6cm、最大幅7.7cm、奥行き7.0cm。

(4)蛇石碑の補遺

①畑中石碑（第25・26図）

山元町山寺字畑中、個人宅の屋敷神の脇に立てられている。安山岩の円礫を用いている。高さ45cm、幅25cm、厚さ23cm。中央上部に、トグロを巻く蛇の図像を線彫りで現されている。頭は、左を向き、舌を出している。蛇の大きさは、縦16.8cm、横15.0cm。下に「神」と彫られている。その両側に、「昭和二十九年、四月三日」と彫られている。所有者は、「へびガミサマ」と呼んでいる。元々、ここには蛇神を祀ってあったが、現当主の父親が巳年生まれで、守護神として山寺の春の祭典日に、この石碑を立てたと伝わる。



第25図 畑中石碑、昭和29年(1954)



第26図 前同、拓影

②榎下石碑（第27・28図）

村田町大字村田字榎下、個人宅の稲荷の屋敷神とともに祀られている。石材は、玄武岩質安山岩（村田石）の割石を用いている。高さ54cm、幅32cm、厚さ15cm。碑面の中央に「蛇明神」、その両側に「大正八年、十二月十四日」、下に「佐藤銀蔵、佐藤新九郎、菊地やい」と彫られている。右側面に1個の矢穴がみられる。



第27図 榎下石碑、大正8年(1919)



第28図 前同、拓影

③屋敷前石碑（第29・30図）

村田町大字関場字屋敷前、個人宅の裏山に祀られている。石材は、玄武岩質安山岩（村田石）の割石を用いている。高さ37cm、幅33cm、厚さ17cm。中央に「龍神」と彫り、その下に蛇の姿を線刻している。蛇の大きさは、縦6cm、横14cm。右に「昭和廿四年四月廿日」と彫られている。台石も村田石で、高さ14cm、幅40cm、奥行き21cm。



第29図 屋敷前石碑、昭和24年(1949)



第30図 前同、拓影

④上林東石碑（第31・32図）

丸森町字上林東の個人宅、屋敷神の石祠とともに祀られている。石材は、花崗岩の角礫を用いている。高さ41cm、幅30cm、厚さ15cm。中央に長方形の彫り込みがあり、その中にトグロを巻く蛇が浮き彫りされている。頭は左を向き、舌を伸ばしている。全体的にリアルに現わされている。蛇の大きさは、縦13.5cm、横17.0cm、厚さ0.4cm。蛇図像の両側に「明治十四年、四月吉日」と彫られている。



第31図 上林東石碑、明治14年(1881)



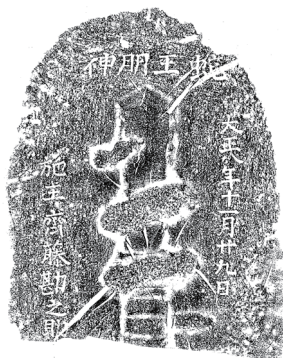
第32図 前同、拓影

⑤諏訪堂石碑（第 33・34 図）

白石市福岡蔵本字諏訪堂、礼賛寺の裏山、山頂に堂宇が2棟建てられている。その右手に、数基の石仏石碑群があり、その中に立てられている。石材は、安山岩の割石を用いている。高さ49cm、幅35cm、厚さ15cm。上に「蛇王明神」と彫り、その下に剣へ巻き付く蛇を浮き彫りしている。碑面からかなり突出するような彫刻方法である。剣の大きさは、縦36.5cm、横12.0cm、厚さ3.7cm。右に「大正八年十一月廿九日」左に「施主齋藤勘之助」と彫られている。台石は、安山岩の円礫を用いており、高さ14cm、幅49cm、奥行き53cm。石碑と台石は、コンクリートで固定されている。



第33図 諏訪堂石碑
大正8年(1919)



第34図 前同、拓影



第35図 田切石碑
年号なし



第36図 前同、拓影

⑥田切石碑（第 35・36 図）

白石市福岡蔵本字田切、個人宅の明神社境内に立てられている。明神社は、主屋と市道をはさんで南側の小高いところに鎮座している。石材は、凝灰岩の角礫を用いているが、かなり風化が進んでいる。高さ40cm、幅24cm、厚さ16cm。中央に「蛇明神」と彫られている。基部は、コンクリートで固定されている。

(5)まとめ

【分布と数量】宮城県南部の地域を調査の対象としたが、村田町と丸森町の2町にのみ分布している。村田町は、北姥ヶ懐の熊野神社、村田字迫の個人宅、村田字町の3ヶ所の個人宅。丸森町は、耕野字早魃田の個人宅、その西隣りに位置する耕野字中ノ沢、それに小斉の鹿島神社である。数量は、村田町で7点、丸森町で3点、合わせて10点である。

【素材と像容】素材別では、石製6点、木製2点、陶製1点、練り物製1点となり、石製が多い傾向にある。像容は、トグロを巻くもの、玉に巻き付くかあるいは玉に乗るものと、大きく二つに分けられる。村田町の石製の3点は、すべて玉に巻き付いており、町石像は2匹の蛇が赤い玉に乗っており、かなり特徴的である。

【祭祀場所】蛇像が祀られている場所を簡単にまとめると以下のようになる。

- 神 社 → 熊野神社像、鹿島神社像
- 屋敷神 → 迫像、町像、中ノ沢像
- 竹 藪 → 早魃田像
- 神 棚 → 旧大沼家1号・2号像・3号像
- 不 明 → 旧加島家像

【年代】年号が彫られている像か、年代の伝承があるのは、迫像・鹿島神社像・早魃田像の3点だけである。迫像は、大正8年(1919)。鹿島神社像は、明治29年(1896)である。早魃田像は、伝承から昭和20年代(1945～1954)と推測される。その3点以外の年代を、製作方法、経年変化の度合、像容などを合わせて考えてみたい。熊野神社像と町石像は、ともに玉に乗っているのも、迫像と同様に大正時代と推測される。中ノ沢像は、赤滝石製の祠に納められているが、この石祠は明治から大正時代に多く製作されたので、蛇像も明治から大正と推測される。旧大沼家1号像は、江戸時代末期から明治時代初期頃と推測される。2号像と3号像は、大正時代から戦前と推測される。旧加島家像は、大正時代頃の製作ではなかろうか。

【趣旨】各蛇像が製作された趣旨を、祭祀場所と伝承などから考察する。熊野神社像は、病気になったのは、蛇の祟りと言われたので、それを断つために蛇像を神社に奉納した。迫像は、台石に「奉納」と彫られているので、おそらく屋敷神へ水神か金運上昇などを祈願したものと推測される。町像は、屋敷神に祀られている。この家は、村田町中心部のあり江戸時代から続く商家である。村田の商人は、商売繁盛のために金華山をよく信仰した。金華山の大金寺は弁財天が本尊で、この石像は弁財天のお使いである蛇像と推測される。旧大沼正七家1号像・2号像・3号像、旧加島家像も村田商人なので、町像と同様な理由と推測したい。早魃田像は、蛇を獲って売っていたという伝承があり、さらに蛇が獲れるようにという祈願なのかもしれない。中ノ沢像と鹿島神社像は、養蚕が盛んな丸森町ということから、繭の豊作や鼠害防除という理由で、養蚕神としての「蛇神」と推測される。

【村田商人の金華山信仰】村田町の中心部は、伝統的建造物群保存地区として国から選定されているが、前記したように村田商人は金華山を篤く信仰した。その中心は、大金寺であったが、明治に入ると廃仏毀釈により廃寺となり、その後は黄金山神社であった。蛇像が3点祀られていた旧大沼正七家の金華山信仰資料を5点紹介する。①は、鋳銅製の弁財天像で、高さ6.0cm。箱の外面に次のような内容の朱書きがある。嘉永7年(1854)正月に、長谷川吉六が金華山方丈の開眼として900 駄を奉納し、100 駄が被下された。その内1 駄が大沼正七分として下された。長谷川吉六は、山形の大商人であるマルチョウ長谷川家6代吉郎治の三男(文政2～安政2)である。長谷川家と大沼正七家は、連携して奥州仙南地方の紅花を集荷したり、上方や全国の物資を販売していた。大沼家文書の中には吉六の帳面なども見つまっている(文献6)。共に、金華山を信仰していたことを物語る弁財天像である。②は大金寺の木製のお札である。最も大きい木札は、「奉修大弁才天女護摩供



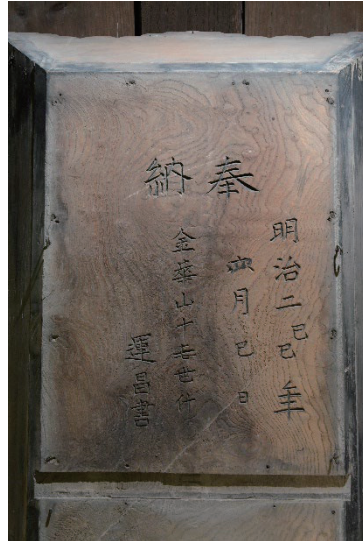
第37図 ①弁財天像、嘉永7年(1854)



第38図 ②大金寺の木札、明治2年(1869)



第39図 ③弁才天の扁額、表面



第40図 前同、裏面の銘文
明治2年(1869)



第41図 ④
金華山の盃



第42図 ⑤金華山団体参拝の記念写真、大正時代頃

家内安全子孫長久祈攸、六月廿日開白九月廿二日結願」と墨書されている。己巳に当たる明治2年(1869)。③は弁才天の扁額、書は大金寺第17世の運昌で、これも明治2年。④は金華山の盃、参拝記念のものであろうか。⑤は、団体での金華山参拝記念写真である。

【蛇石碑の補遺】県南部の蛇関係の石碑は、6基増えたので計68基となった。蛇図像1基、蛇図像と「神」字が1基、剣に巻き付く蛇像と「蛇類明神」が1基、蛇明神が2基、「龍神」と蛇図像が1基となり、5つに分けられる。畑中石碑の、トグロを巻く蛇図像と「神」で「ヘビガミ」と読ませるのであろう。剣に巻き付く蛇の図像がある石碑は、丸森町で3基見つかっている。大内字山ノ神は明治26年(1893)、金山字坂町の大日堂は明治40年(1907)、下滝明神の石碑は三本の剣があり年号はない(文献1)。年代では、最も古いのが上林東石碑の明治14年(1881)、新しいのは畑中石碑の昭和29年(1954)となり、その期間は73年間。造立の趣旨は、畑中石碑が自分の生まれ歳が巳年ということで立てたということが伝わっている。その他には伝承がないが、以下の様に推測する。榎下石碑は、すぐ道路向かいで養蚕をしていたので、養蚕神であろう。上林東石碑・諏訪堂石碑・田切石碑も養蚕に関係するのかもしれない。屋敷前石碑は、水神として「龍神」を祀ったものと推測される。

引用・参考文献

1. 石黒伸一郎 「宮城県南部の蛇図像がある石碑」『東北民俗』第55輯、pp. 1～10、東北民俗の会、令和3年6月
2. 石黒伸一郎 「宮城県南部の蛇供養・蛇霊神などの石碑」『東北民俗』第56輯、pp. 41～50、東北民俗の会、令和4年6月
3. 村田町文化財保護委員会 「村田町の石碑(村田字町編)」『村田町文化財調査報告書』第5集、村田町教育委員会、昭和62年3月
4. 村田町文化財保護委員会 「村田町の石碑(姥ヶ懐編)」『村田町文化財調査報告書』第6集、村田町教育委員会、刊行年不明
5. 丸森町文化財保護委員会 「ふるさとの伝説」『丸森町の文化財』第27集、丸森町教育委員会、平成17年3月
6. 岩田浩太郎 「巨大紅花商人ー山形の長谷川家についてー」『研究資料集』第30号、pp. 5～41、山形郷土史研究協議会、平成20年3月

大河原の石碑

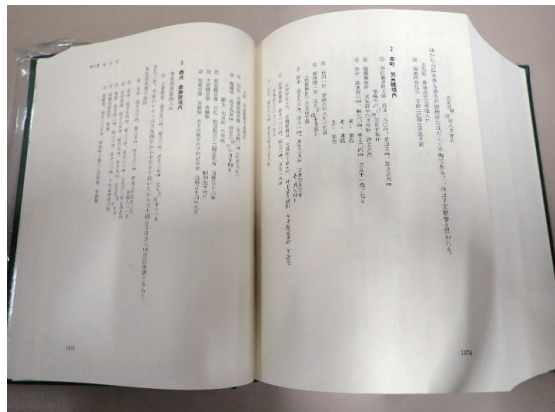
大河原町 遠藤慎一



「大河原の石碑」というごくありふれたタイトルで報告させていただきます。

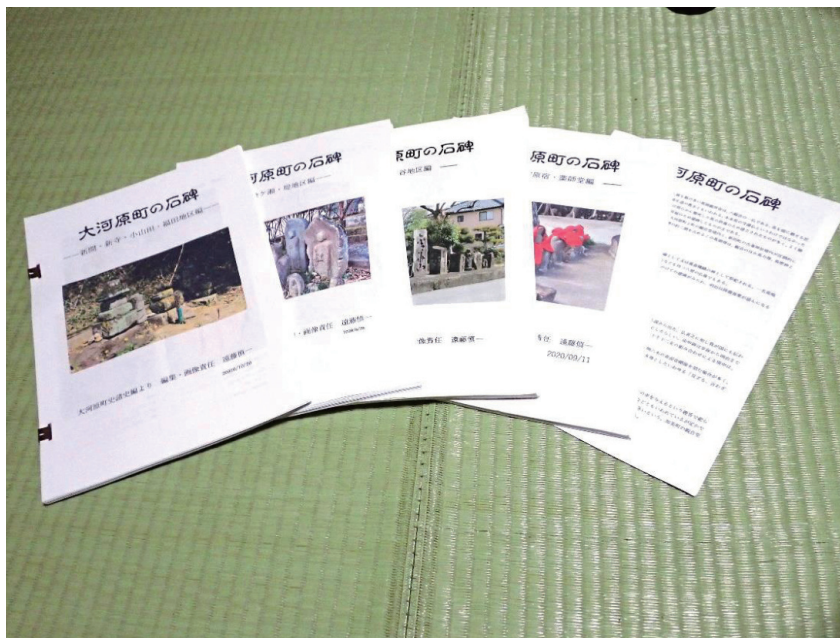
2020 年新型コロナの流行によって突然図書館が閉鎖になってしまいました。これは困ってしまっただことになってしまいました。明日からどこへ行って時間を潰したらよいか途方にぐれしました。地方史を調べるのに図書館はうってつけだったのです。夏は涼しいし、冬は暖かい。

そこで思いついたのが、大河原町内の石碑を全部写真に収めようと。大河原の石碑と石造物は町史によると 400 基ほどあります。普段はその存在は知ってはいたものの、じっくり観察しなかったのです。大河原町史に先人が調べた記述が「金石史」としてまとめてあります。実に助かりましたがデータが古く 50 年前の記録で、なおかつ写真がありません。



2 大河原の石碑

資料としては素晴らしいのですが、これでどれだけ町民に伝わるのかなどと考えてしまいました。近隣の市町村史を調べてみたら、他町村も似たようなものでした。それならもっと誰にでもわかりやすいものを作ってしまえというところで作業に取り掛かったわけです。ワードで作ればそれほどお金もかからないだろうし。



町を4か所に分画して各50pほどの分量になります。1年半ほどかかりました。あとは家庭用プリンターで印刷して、町の図書館に寄贈したわけです。

しかしコロナ騒動はまだ収まらず、石碑も伝えきれてないとうことがわかったので、同じ手法で動画を作ることにしました。



この動画は各 15 分ほどですが、全 21 巻になりました。これも大河原の図書館に寄贈させて頂きました。勿論、町の教育長にも寄贈させて頂いたことは言うまでもありません。

さてここまで来てハタと気が付きました。それは写真と動画では石碑の大きさがリアルに伝わらないということです。それには「拓本」が最適です。目視ではなかなか読めない文字が読める可能性があります。それと一番大事なことで、文化財の基礎資料として保存できるということです。

2023 年春から始め、現在 200 枚ほどを町に寄付をしました。これで約半分ほど消化したことになります。残りをこれから 2 年ほどかけ作業をしたいと考えています。



4 大河原の石碑

拓本も動画にしました。拓本の方法がわかりやすく解説した動画を目指して作成してます。あとに続く人が現れる事を願って、あと2年頑張ることにします。



白石地名考—石に託された物語—

大蔵山石文化研究所 山田政博

『白石市史』に白石の地名研究の項があり、それによると「白石の地名がいつごろ、どうして起こったかについては皆目わからない」という。「アイヌ語のシュラウシから出たという説や、『神石』が由来となった説、源氏に味方した刈田秀長が白石氏を名乗ったからとする説、白石の街中に流れている川（沢端川のことか）の両側に白い石がたくさんあったからという説」（風間観静 1984）を紹介しているが、いずれもその根拠とするまでには至っていない。実際に白石という地名が古文書類に出てくるのは「戦国時代になってから」（風間観静 1984）という。

白石市には「元調練場にある『神石白石』という灰色の石があり、その根は深く仙台市泉区の根白石につながっている」（飯沼寅治 1984）という伝説がある。この伝説が、白石の地名に大きく関係しているのではないかと思い、そのつながりを追いかけてみた。

白石市の側から見ると、単に白石と根白石が石の根でつながっていることしか見えてこないが、仙台市泉区根白石地区には次のような地名由来がある。「1189年（文治五年）、平泉藤原氏を攻めた奥州合戦の際、源頼朝が合戦の帰路に七ツ森で巻き狩りを行い、白鹿を追って射たところ、根元の白



白石市沢端町 神石白石 2020年11月 筆者撮影

い石に変わったため、その地を根白石と呼ぶようになったというもので、その石の根元は刈田郡白石まで通じている」（倉橋真紀 2014）という伝説。この地名由来の伝説に注目し、両地の共通性を探ってみた。結果、白石市と根白石地区には驚くほど共通する土地の記憶を持っていたのである。

一つは製鉄遺跡の存在。白石市には深谷地区に、上高野遺跡、下館遺跡、道内原遺跡、荒井遺跡、高野遺跡、など数多くの製鉄遺跡がある。

白石市史別巻によると、「上高野遺跡は奈良・平安期の遺構が検出されており、タタラ遺構を示す遺構が検出されている」（片倉信光・後藤勝彦・中橋彰吾 1976）。下館遺跡については、年代の特定の記述がないものの「急斜面を利用した自然送風抗と組み合った製鉄炉や、小型製鉄炉など多くの製鉄遺構が明らかにされている」（片倉信光・後藤勝彦・中橋彰吾 1976）。道内原遺跡については「平安時代の居住跡4軒とそれに伴う小型の多様な製鉄炉跡などの製鉄遺構や遺物を発見している」

(片倉信光・後藤勝彦・中橋彰吾 1976)。荒井遺跡については「縄文時代中末期の住居跡や、各種の製鉄遺構を検出した。昭和 42 年には岡山大学・和島誠一教授が佐藤庄吉氏の検出した製鉄遺構を再発掘し、検討を加えている」(片倉信光・後藤勝彦・中橋彰吾 1976) とのことである。これら、深谷地区の遺跡は「大太郎川の流域に密集していて、中でも上高野、荒井、湯ノ口、高野原、御所内、青木、道内原など主な製鉄遺跡が、この流域に集中している」(片倉信光・後藤勝彦・中橋彰吾 1976)。ということである。さらに下館遺跡の北約 700m に位置する三本木前遺跡からも「縄文時代や平安時代の遺物、鉄滓の散布がみられる」(片倉信光・後藤勝彦・中橋彰吾 1976) ことから、縄文時代の遺跡はともかくとして、これらの遺跡・遺構が、少なくとも平安時代の製鉄遺跡であるとみてよい。

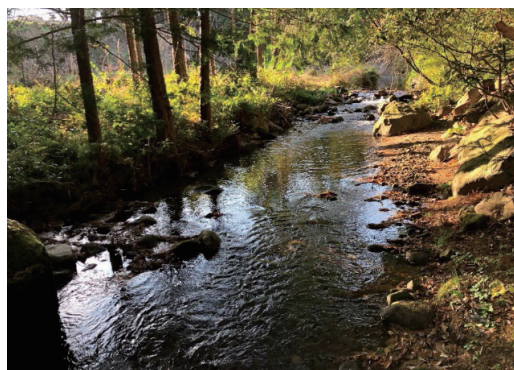


白石市福岡深谷 埋藏文化財保存庫 2020 年 11 月 筆者撮影



保存庫の製鉄埋蔵物の保存状態

また、地区内を流れる大太郎川は、読み方によっては「タタラ川」とも読める。

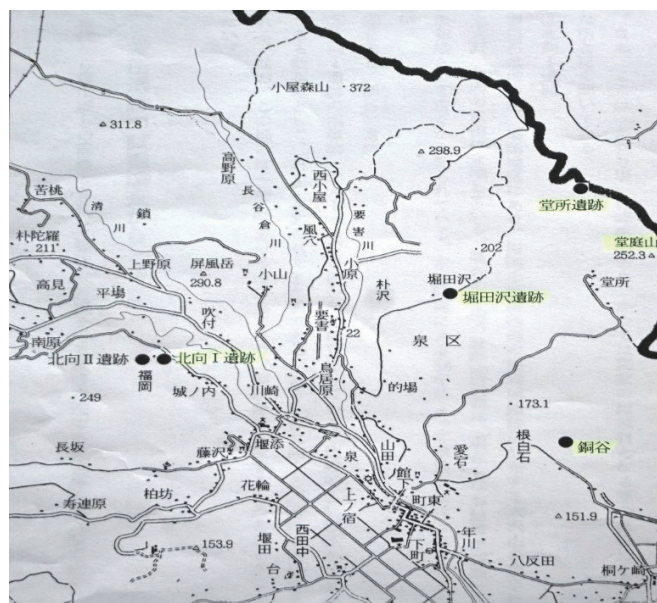


白石市福岡深谷地区を流れる大太郎川 2020年11月 筆者撮影

一方、根白石地区に注目してみると、『みちのくの鉄』の「根白石地区周辺の製鉄（タタラ）遺跡の項」に、「縄文時代の遺跡や古墳・奈良時代の遺跡の分布調査や化石調査の際に、鉄滓といわれる滓塊が、たまたま採取できる場所として数カ所認められており、鉄滓の分布が明らかになった」（早坂春一 1994）とある。

現在までに、堀田沢遺跡、堂所遺跡、北向遺跡、銅谷遺跡の四つの製鉄遺跡が確認されていて、「さらに調査を進めれば増える可能性がある」（早坂春一 1994）としている。堀田遺跡については「鉄滓が散布する。開田によって掘削されているが、以前は広範囲にわたる鉄滓分布地であった」（早坂春一 1994）。堂所遺跡については「広範囲にわたり鑪の羽口を含む多量の鉄滓が散布していて、タタラ製鉄跡を思わせるに十分な環境となっている」（早坂春一 1994）。北向遺跡は「現在もなお鉄滓が採取でき、その散布地として古くから知られていた」（早坂春一 1994）。銅谷遺跡については「古くから広い範囲から鉄滓が採取できる散布地として、古くから知られてきたところである。銅谷という呼び名は、製鉄を示唆するものとして注目しておきたい」（早坂春一 1994）ということである。さらに「この遺跡は古代から黒川郡との郡境とされ、多賀城の西域を守る鎮守寺院である宝塔院跡（堂庭廃寺）の発見（昭和43年）で注目された堂庭山をもつ堂所山は（略）①原料となる砂鉄が付近の川で採取可能であること、②エネルギー減となる木炭の生産が極めて容易であること、③水資源においても具備されていること、等が確認され、タタラ製鉄創業当時の姿を変容されることなく、今に残している」（早坂春一 1994）という調査結果が示され、「現段階では試掘的な調査にとどまっており、重機を導入した本格的な学術調査が待たれている」（早坂春一 1994）という。

白石市深谷地区の製鉄遺跡は少なくとも平安時代の遺跡ということができるが、根白石地区の製鉄遺跡の時代特定については今後の学術調査が待たれるところである。製鉄遺跡の存在が認められた堂所山は、多賀城の西域を守る鎮守寺院である宝塔院跡を含んでいることから、古代からの製鉄遺跡である可能性がある。



根白石地区のタタラ製鉄(鉄滓散布地)跡 『みちのくの鉄』より引用

次に、二つには平安時代の仏教遺跡の存在。白石には深谷地区の隣、福岡八宮に堂田遺跡^{どうでん}がある。調査の結果、「平安時代初期の仏堂跡」（志間泰治 1971）という。ここから、頂が二つ（双耳形）の青麻山が見えることを考えると、山岳信仰にもとづく青麻山を遙拝する施設だったと思われる。



白石市福岡八宮 堂田遺跡 2020年11月筆者撮影

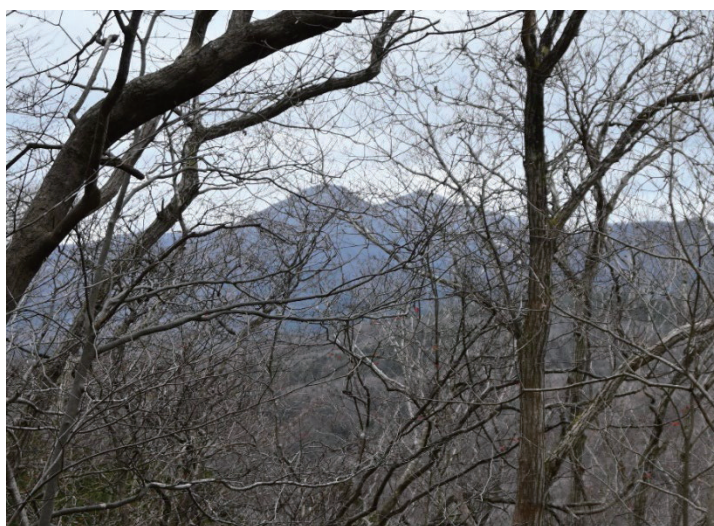


堂田遺跡から青麻山を望む 2020年11月 筆者撮影

一方の根白石には、前述した通り「堂庭山廃寺宝塔跡という平安時代の9世紀後半から10世紀初期の創建と推定される遺跡」（倉橋真紀 2014）がある。製鉄遺跡付近の標高252mの小高い山の山中にあると知り、その存在場所を確かめるために現地を訪れてみた。



仙台市泉区根白石 堂庭廃寺宝塔跡遺跡 2021年1月



堂庭山(252m)から泉ヶ岳を望む 2021年1月 筆者撮影

遺跡は木立に囲まれて8基の基礎跡があった。山頂まで100m。念のために山頂まで登ってみると、丁度そこから頂が二つ（双耳形）の泉ヶ岳が望まれたのである。現在は木立に阻まれて眺めが良くないが、当時はここから泉ヶ岳を遙拝したのであろう。

いずれの地にも同時期に建立された仏堂遺跡があり、その近くの同じような形の、おそらく遙拝していたと思われる山が存在するのである。

なぜ、両者にはこのような共通性があるのか。ここで、少し日本の古代史をさかのぼってみることにする。

古代日本は、「五世紀ごろに近畿地方を中心に、北は関東地方、西は九州に及ぶ統一国家が形成された。これが大和朝廷である。大和朝廷の政治力の北進は史上に蝦夷征伐の歴史であり、海上から船で蝦夷地に向かっている。奥州へ海からの北進の根拠地は、利根川河口付近、鹿島、香取の地であった。その地に祀られていた鹿島神、香取神の神威を報じて北進したものと思われる」（塩竈市史）。古代東北の地は、朝廷に従わない人々の勢力が強く、陸路で北上するのにはリスクがあった。それを避けるため、海上の船が盛んに利用されたのだ。

「また、新しく占領した土地に郡を建てるためには、租庸を負担すべき公民を、一定数、整えなければならない。帰服した現地民を編戸して公民とするほかに、大量の移民がおこなわれた。715年（霊亀元年）には、相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野の富民一千戸を陸奥国に移している」（宮城縣史）。それら海上移動の基地になった古代東北の港が塩釜である。

移民は一度だけということではなく、何度も実施されたものと思われる。これだけの人々を移民させれば、当然に、もともと自分たちの土地として古代東北に住んでいた人々の反乱が起きるだろうから、これを弾圧するための武力を常に蓄えておかなければならない。そこで塩釜の近くに、陸奥国府・多賀城を置き、古代東北経営の拠点とした。

その多賀城には国府直営の大規模の製鉄遺跡・柏木遺跡（鎌田俊昭 1989）がある。製鉄技術は権力側にとって軍事面の他に物資の生産力や生活全般の向上のためにも必要不可欠なもの。移民の中には製鉄技術を持ったタタラ集団も含まれていたことであろう。海上移動してきたタタラ集団は塩釜の港に着き、多賀城で大規模な製鉄施設を建設し、鉄づくりに励んだ。さらに付近の山々で鉱山探しを行い、製鉄が行われていた地の一つが根白石地区であろう。そのタタラ集団は県内各地で鉱山探しを行い、南下してきた集団が白石の深谷地区に入ったものと思われる。

なぜこのような道筋になるかという、多賀城を基準として考えれば、根白石は多賀城に近い。それに名前の由来にまつわる頼朝伝説が根白石の方に残っているからである。

白石市の「白石」の名前の由来は、根白石の「頼朝根白石伝説」をもとにして、両者の関係性を後世の人々に伝えるために、白石の「神石白石」にまで石の根がつながっているという伝説に託したと思われる。石がつながっているわけではなく、人々のつながりを石の伝説として残した。これが私の結論となる。

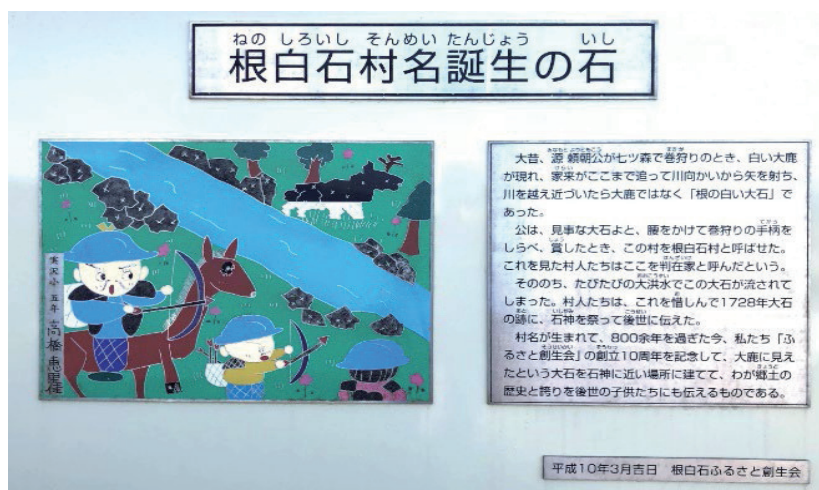
明治の初期、明治政府によって片倉家の所領が没収され、片倉家臣団はやむなく北海道にわたって開墾した。その土地は白石と名付けられ、それが現在の札幌市白石区になっている。これと同じよう

なことが、過去に根白石と白石の間にあった。根白石には泉ヶ岳があり、移ってきた先には郷里の山と同じ形の青麻山がある。白石に移り住んだ当時の人々は、白石という土地に非常な愛着を覚え、同じように遙拝する仏堂をつくり、名前も「白石」としたのであろう。

根白石では「天保(1830~44年)の頃、村人が名前の由来となった白い石に石神と彫り、信仰の対象となっている」(松浦勝彦 1987)ということだが、今は、この石は無い。理由は不明である。現在、同じ頼朝伝説の「頼朝が泉ヶ岳の下を流れる川の路傍にあった白い巨石にもたれて休息し、戦功を賞したため『根の白石』と呼ぶようになり、その場で賞与の判物を与えたため、その地を『判在家』^{はんざいけ}とった」(倉橋真紀 2014)という場所に、「根白石村名起因の石」という代替えの石が置いてある。



仙台市泉区根白石 根白石村名誕生の石設置状況 根白石ふるさと創生会設置 2021年1月 筆者撮影



根白石村名誕生の碑 裏面碑文

平成10年に「根白石ふるさと創生会」が「故事をしのび、大鹿に擬した大石を近い県道往還に建立祭祀して、郷土の歴史と誇りを後世に伝える」(村名起因の石・裏面碑文)ために建てられたものであり、この石が白石までつながっているとは書かれていない。平成10年建立の石では書けないのである。

最後に、白石という地名が、戦国時代になるまで古文書には現れなかったという疑問が残る。

最初に白石が文献に表されたのが「1538年(天文七年)、段銭古帳^{だんせんこちやう}の刈田の項に『しろ石』とある」(風

間観静 1987) とのこと。「1824 年（文政七年）までの伊達家諸家の系譜を記した伊達世臣家譜^{だてせしんかふ}に白石氏。刈田左兵衛尉経元を祖と為す。経元は、寛治（1087~94 年）中、鎮守府軍源義家の配下に属して、清原武衛兄弟を討ち、戦功あり。源公これを賞して、奥州刈田、伊具の両郡を賜う。是に於いて刈田白石城に住し、因りて之れ（白石）を氏とす」（太田亮 1963）とある。おそらく 11 世紀頃には「白石」という地名はあったのであろう。白石市史では「この時点で、白石の地名が『吾妻鏡』に記録されてもよいはずであるが、その形跡はない。刈田郡には刈田氏があり、白石氏祖先は平安末より鎌倉時代にかけて、勢力がまだまだ弱かったのであろう」（白石市史・筆者要約）と述べられている通り、「白石」が地名として記録に載るまでには至らなかったと思われる。

しかし、記録に載らないまでも、宮城郡と刈田郡に同じ「白石」の地名が並行してしばらくあった。伊達家が宮城県全域を治める段になって、両地が同じ地名では混乱が起こる不都合が生じ、その頃に、地名の整理が行われたものと思われる。従来の「刈田」という表記では範囲が広くて定まらない、との理由があったのかもしれない。根白石の地名については日本地名大辞典（日本地名大辞典 4 宮城県）によると「根白石は秀麗雄大な泉ヶ岳の東麓に位置する。根白石が先に白石と称したが、刈田郡の白石と区別するため、『根』が『泉が峰^ね』を意味するので、根白石と呼ぶようになったとある。



仙台市泉区根白石 白石城址 2021 年 1 月撮影



根白石地区白石城址から町並みを望む

取材中に根白石地区の「根白石市民センター」で、地元のことに詳しいというおばさん（推定年齢 75 歳）と話をする機会を得た。そのおばさんの話によると、「私の母は根白石のことを『しろいし』と言っていたので、どちらのことか迷うことがたびたびあった」という。おそらく話し言葉としては、古くからどちらも「しろいし」と言っていた。根白石には白石城跡がある。今でも、ある意味どちらも「白石」であり、それが両地の密接な関係を表しているようで好ましく思っている。

なお、本稿の白石市深谷地区の製鉄遺跡の記述について、白石市別巻の考古資料編・主要解説を参考にし書き綴ったものであるが、その後、深谷地区の製鉄遺跡について改めて調査がなされ、「荒井遺跡からの出土品であるふいご羽口を精査したところ、中世から近代の遺跡とされている」（石本

弘 2016) ことが判った。本稿は「石の地名由来が皆目わからない」という状況に対して、白石と根白石が石の根でつながっているという石の伝説を手掛かりに、地名由来について推理したものである。その結果、どちらにもタタラ遺跡が多数出土し、平安期の仏教遺跡があり、さらに山岳信仰のもとになっていた山の形が同じように双耳形であることを手掛かりにして、一つの物語としてまとめた。タタラ遺跡については根白石地区の本格的な調査はなされておらず、古代のタタラ遺跡と特定されるには至っていない。また、根白石に伝わる頼朝伝説や、石の根でつながっているという伝説は、いつごろからの伝説なのかは不明である。そもそも伝説ということからして歴史的な事実であるかは極めて怪しい。

ただ、石の根でつながっているという伝説が、白石と根白石との何かの関係性を暗示しているのではないかと思い、その暗示するものは何かを様々な文献や取材を通して探ってみた結果、人々のつながりを石の伝説として後世に託したのではないかという考えに至ったわけである。そのつながりにタタラ集団の存在が関わっているのではないかという一つの仮説として捉えていただければと思う次第である。

参考資料

- ・倉橋真紀 2014「仙台市史 特別編9 地域誌 根白石」
- ・片倉信光・後藤勝彦・中橋彰吾 1976「白石市史」別巻 考古資料編 主要遺跡解説」
- ・風間観静 1984「白石市史 3の(2) 特別史(下)の1 地名の研究」
- ・飯沼寅治 1984「白石市史 3の(2) 特別史(下)の1 白石地方の伝承」
- ・後藤勝彦・中橋彰吾 1982「宮城県白石市上高野遺跡・保原平遺跡発掘調査報告」
- ・早坂春一 1994「みちのくの鉄 仙台市根白石地区の鉄滓散布地調査」
- ・志間泰治 1971「堂田遺跡 白石市福岡八宮」 宮城県白石市教育委員会
- ・松浦勝彦 1987「宮城県の地名 泉市 日本歴史地名大系」
- ・風間観静 1987「宮城県の地名 白石市 日本歴史地名大系」
- ・太田亮 1963「姓氏家系大辞典 第二巻 (シロイシ シライシ)」
- ・鎌田俊昭 1989「宮城県多賀城市 柏木遺跡Ⅰ－古代製鉄炉の発掘調査報告書」
- ・石本弘 2016「市内遺跡発掘調査報告書9 V深谷地区製鉄遺跡」
- ・「日本の地名大辞典4 宮城県」角川書店 1979
- ・「塩竈市史Ⅰ 本編Ⅰ 第二章 古代の塩釜」 塩竈市史編纂委員会 1982
- ・「宮城縣史(古代・中世史)第二節 多賀城の建設」 宮城縣史刊行会 1987
- ・「宮城県の歴史」 山川出版社 1999
- ・「刈田郡誌」 刈田郡教育会 1972
- ・「県史シリーズ4 宮城県の歴史」 高橋富雄 山川出版社 1988

城下町白石 水物語

佐藤 充・立田基生・服部和憲（白石水路研究会）

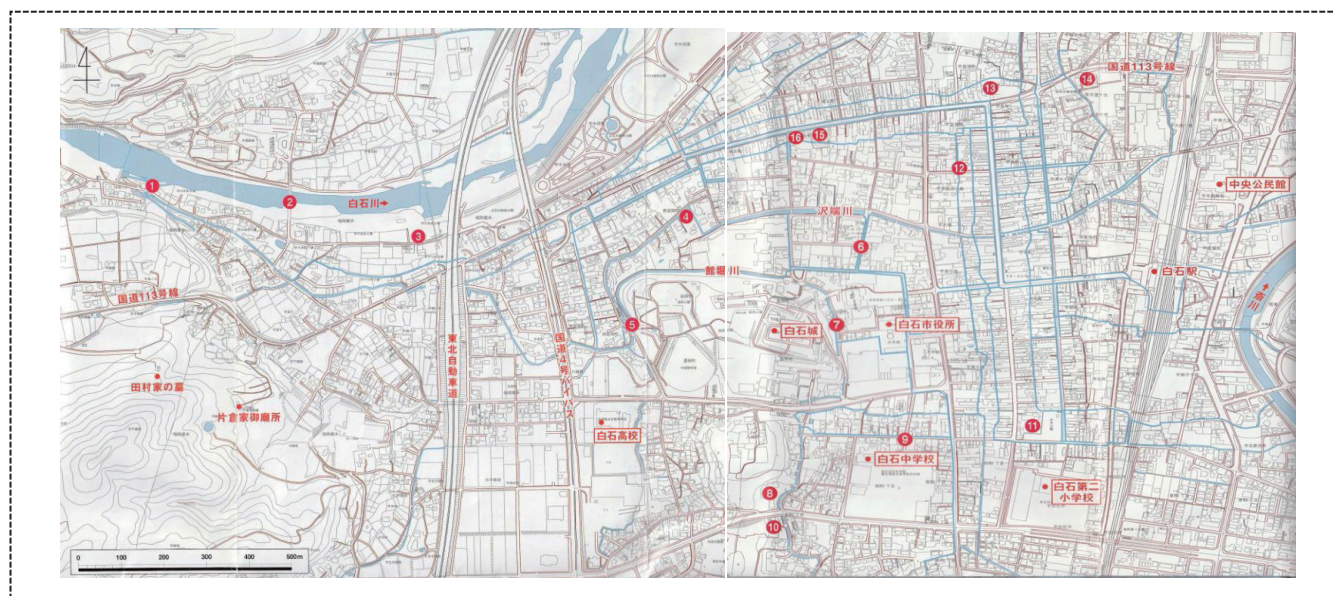
当研究会は、「白石 水めぐる城下町」報告書(佐藤充著 市街地周辺の用水路を2012年4月から調査・資料収集,2015年8月報告書作成)を下に,視聴覚教材「白石 水めぐる城下町」としてDVDを作成し,1923年9月に全国自作視覚聴覚教材コンクール社会教育部門に入選しました。

その後、江戸時代後期に安定した用水を確保するために活躍した片倉家中の片平観平親子と江戸時代の測量方法と用具の紹介が必要と考え、1925年に、「城下町白石 水物語」と改題してDVDを作成しました。その概要版から紹介します。

はじめに

白石にはいたるところに蔵王連峰を水源とする白石川の清らかな水が流れ、白石城の周りの用水路には梅花藻が揺らいでいます。この城下町の街並みと水路は今から約430年前、江戸時代のちょっと前1590年頃から造られはじめたといわれています。

白石川からの水の取り入れや城下町の水路の歴史や創意工夫などについて、先人たちの努力と工夫の跡を訪ねてみましょう。



(現在の市街地の用水路図 白石市教育委員会発行「白石 水めぐる城下町」パンフレットから複写)

主な内容

1. 白石市周辺の地形と白石川

(白石川が近くを流れ、緩やかな傾斜の盆地は用水路を造るのに適しています。)

2. 刈田郡・白石市の歴史と用水路

(天正19年 蒲生氏により白石の城下町と用水路の原型が造られ始めました。)

3. 城下町への導水の工夫

(河岸段丘の地形を利用し堀削し、街中には多くの堰を造り水路を巡らせました。)

4. 農業用水等の確保の工夫

(用水路の下流(末水)は多くの村々の田畑を潤し、また斎が川を樋桶で渡すなどの工夫で広い範囲の田畑が恩恵を受けられるように工夫されました。)

5. 堰の作り方の工夫

堰は木組で蛇籠に石を詰め、堤防を造り、川をせき止めますが、増水すると押し流され、その修理に大変苦勞しました。)

6. 片平観平物の業績【白石商工会議所『ちょっと素敵な物語』】

(安定した用水を確保するために活躍した片倉家中の武士のお話です。)

7. 江戸時代の測量の仕方や用具

(江戸時代の測量器具や測量方法を紹介します。)

8. 江戸時代の古地図にみる用水路の変遷

(蒲生時代の想定図と正保絵図、寛文絵図、天和絵図、安政絵図など)

9. 用水路の役割と明治以降の歩み

(昭和26年に新たな蔵本堰が造られ安定した用水の確保ができるようになりました。現在の水路の状況は一部を除き藩政時代と変わらぬ姿を残しています。)

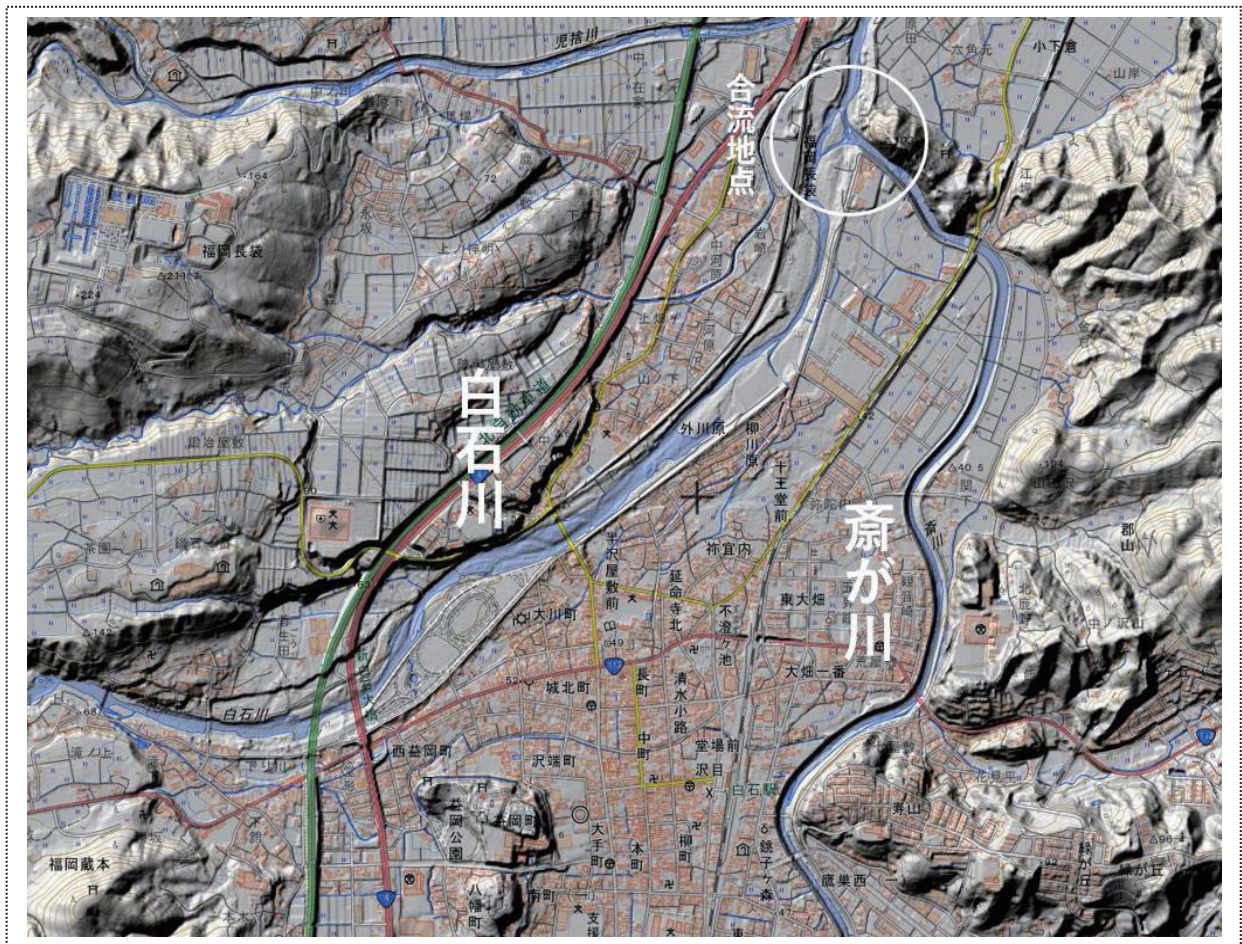
1. 白石市周辺の地形と白石川

○ はじめに 白石市の大まかな地形について押さえておきましょう。

1) 白石市は宮城県の南部に位置し、令和6年6月現在の人口は、30,821人です。

2) 市街地は、東側の阿武隈山系の丘陵と西側は奥羽山脈系の山地に囲まれた南北約10km、東西約3kmの緩やかな傾斜のある白石盆地の中にあります。白石川は西の蔵王山麓から東に流れ、白石盆地の北東部で、南の越河地区から北に流れる斎が川と合流しています。

3) 市街地はこの合流地点の南西部に位置しています。白石盆地の東部は斎が川によって形成された谷底平野・氾濫原であり、西部は鉢森山の崖下に形成された複合扇状地です。白石川は約100万年前の洪積世時代の地殻変動や浸食により、川岸から離れるにつれて階段状に高くなっている河岸段丘の地形です。河岸段丘の地形の典型は福岡小学校周辺の丘陵に見ることができます。



(白石盆地の地形 「白石陰影起伏図（地理院地図）」)

2. 刈田郡・白石市の歴史と用水路

○ 白石の歴史についておおよそを押さえておきましょう。

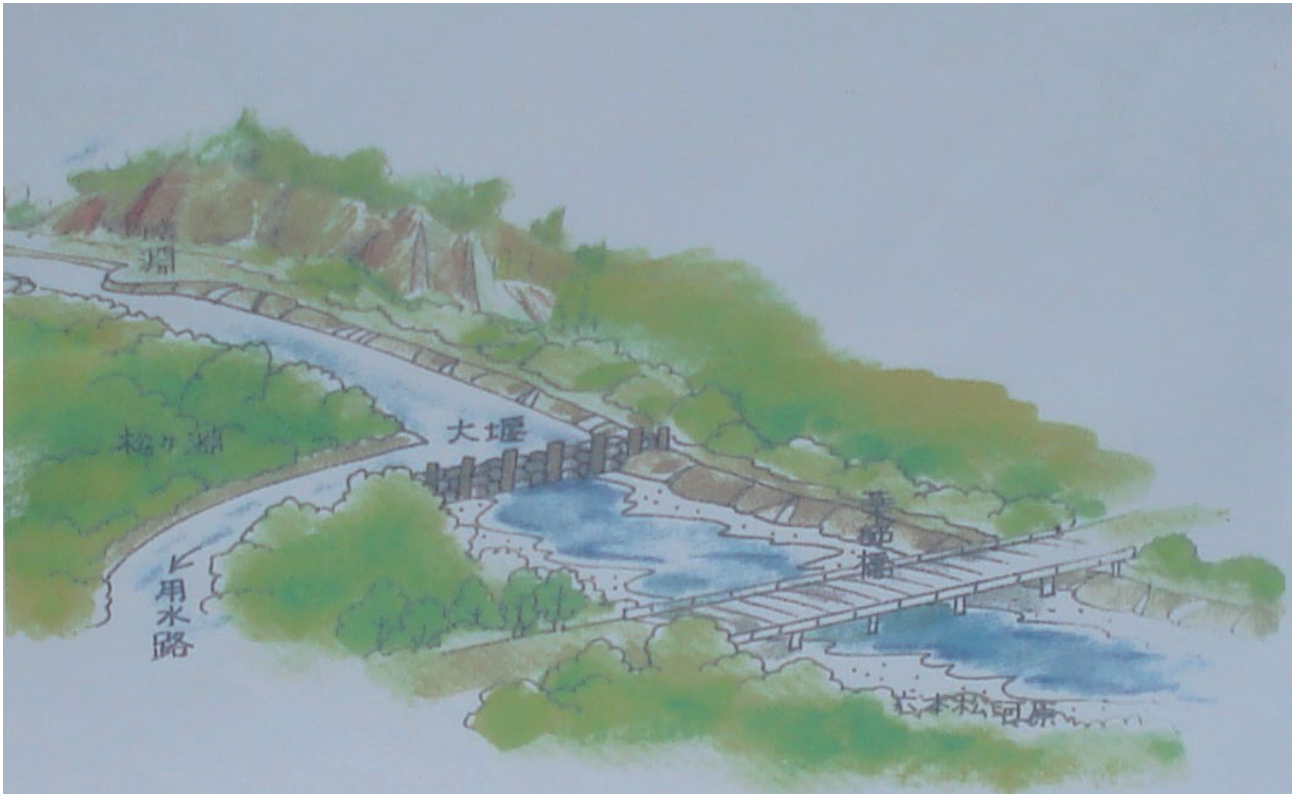
- 1) 刈田郡が歴史に現れたのは、8世紀前半、大和の国が政治の中心であった頃、「柴田郡の2郷を割き刈田郡を置く」との記録が見られます。刈田郡が主要な交通路となり、中央政府の支配を受けられるようになります。
- 2) その後、鎌倉時代、室町時代、戦国時代にかけて、刈田郡は次第に伊達氏の支配下に置かれます。
- 3) 天正18年（1590）、豊臣秀吉が天下をとると、「奥州仕置き」により、蒲生氏郷の家臣の蒲生郷成が白石城主となり、その後、上杉景勝の家臣の甘粕氏が白石城主となります。蒲生氏が支配していた当時、北方に位置する伊達政宗の南への進出を防ぐため、白石川と沢端川を防御用の濠として、白石城と城下町を建設したのではないかと推測されています。蒲生氏は、天正18年（1590）からわずか4、5年の間に城の建設、城下町の整備、沢端川の改修等を行い、現在の城下町、用水路の原型がここに造られたと考えられています。

- 4) 慶長5年(1600)7月、関ヶ原の戦いの前、徳川家康方の東軍に付いた伊達政宗は豊臣方の上杉の白石城を攻め落とします。同年9月、関ヶ原の戦いで徳川家康が天下を取ります。
- 5) 慶長7年(1602)、伊達政宗は片倉小十郎景綱に白石城主として刈田郡、1300貫文を与え、一円知行を許します。その後、知行は1800貫文となり、幕末まで続くことになります。慶長8年(1603)、片倉小十郎が亙理城より白石城に移り、白石城と本町、中町、長町、亙理町、短ヶ町、新町の6町の本格的な整備が始まります。片倉家は、慶応4年(1868)、戊辰戦争まで265年に渡って白石を中心に刈田郡を治めました。
- 6) その後、明治、大正、昭和、平成、令和の現在に至り、白石の街並みは時代に沿って変遷していますが、主な水路は、今なお当時の姿を残しながら大切にされています。

3. 城下町への導水の工夫

○ 城下町への用水路はどこから、どのようにしてつくられたのでしょうか。

- 1) 城下町の建設に重要なことの一つは、そこに住む人々の生活に必要な水の確保です。また、安定した米作ができるように田んぼへの水の確保が必要です。白石城下の北側に白石川が流れており、距離が近いことから、水は白石川から取り込みました。
- 2) 白石川からの水の取入れ口は、蔵本村にあり、丸太と土嚢(どろう)で堰(せき)を作り、水面を上げて水を取込みました。この堰を蔵本堰と呼ぶことにします。蔵本堰の最初の場所は、蒲生氏が白石を治めてまもなく、文禄元年(1592)頃、現在の蔵本ダムと薬師橋の間に設けられたと伝えられています。蔵本堰から城の西側、八幡宮の下までの用水路は、河岸段丘の崖下を掘削し、水を引き込みました。段丘の崖下が掘削しやすかったためです。
- 3) 江戸時代になると、白石の城下には北西から東南方向への緩斜面の地形を利用して、奥州街道の道の真中に堀を設けました。さらに、沢端川に多数の堰を設けて、町裏にはいくつもの堀を設け、人々の生活に必要な水を分配しました。



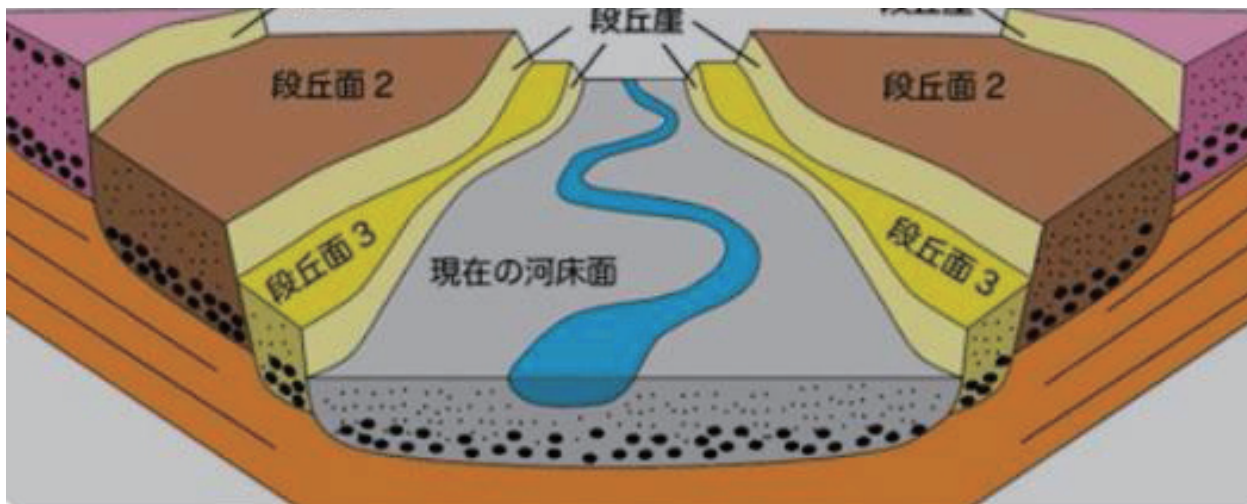
①蔵本堰の想像図（「私たちの郷土」白石市・蔵王町・七ヶ宿教育委員会 平成30年発行から複写） 蔵本大堰と用水路：蛇淵と薬師橋の間に大堰を造り、用水路に白石川から水を取り込んでいます。）



②薬師橋から望む現在の蔵本堰（初期の堰は現蔵本橋と現蔵本堰の中間点付近と想定しました。）

③河岸段丘のモデル図

用水路は河岸段丘の地形を有効に活用して建設されました。下図は河岸段丘のモデルです。



(産業技術総合研究所刊行「愛知県豊田市と周辺地域の 50,000 分の 1 地質図間「豊田」から複写」)

④河岸段丘地形を利用した用水路 用水路の多くは段丘崖に沿って作成されています。

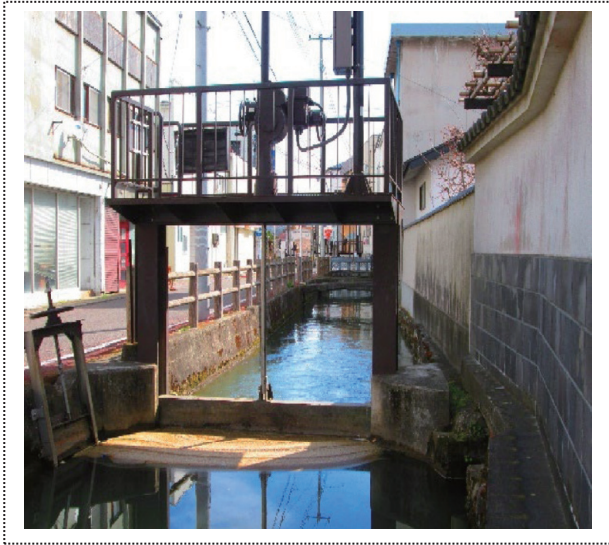


(蔵本地区 松田温麺付近)



(城北町・新町 やまぶき亭裏)

⑤町場での水の確保のための沢端川・館堀川の分水の工夫



(堰・水門を調整して分水する)



(左の水門の調整により手前の水路に水が流れ入る)



(水門により両側の水路に水が流れる)



(水門で水位を上げ、屋敷内に水を流入させる)

4. 農業用水等の確保の工夫

○ 用水路の水は多くの村々に行き渡るように工夫されました。その痕跡は今でも見られます。

- 1) 用水路の下流は農業用水として重要な役割を果たしていました。江戸時代に書かれた「安永風土記（風土記御用書出）」の『堰』の項目に、用水堀から田への配水状況が記されています。蔵本堰からの用水の恩恵を受けたのは蔵本村、白石本郷、鷹巣村、森合村、中目村、郡山村、坂谷村、三澤村の8ヶ村で、かなり広い範囲であったことが記されています。ここでは用水路を「御城御要害堰」という表記で記載されています。
- 2) 「安永風土記」から、中ノ目村から「桶樋」を使用して、斎が川を「持越」し、坂谷村へ水を引いています。それをまた三澤村に引き入れています。鷹巣村は白石本郷から斎が川を「桶樋」で持越し、農業用水を引き入れています。その様子は、現在でも鷹巣橋の所で見るができます。
- 3) 現在では、「サイホン式」で、用水は斎が川を越すようになっています。水が必要な時期に水門を閉じ、自然の力を利用して、斎が川の下を潜り抜け、対岸に届くようになっています。蔵本の堰で取り入れた白石川の水が広い範囲で利用されるように工夫されていることが分かります。
- 4) 昭和26年に新たな蔵本堰が完成すると堰から取り入れる水量を調整することができ、安定した用水路になったといわれています。

※「安永風土記」とは：「風土記御用書出」江戸時代安永期（1772～1781）に、仙台藩が領内の村々の様子を把握するために書上げさせたもの。

① 「安永風土記」の「堰」に関する記述

※（郡山村 森合村 中ノ目村は略）	江相掛申候二付当村二堰場ハ無御座候江共用水溜高有之候間御書上仕候事（以下略）	郡坂谷村より当村江引入当村分田代式拾六貫五百文之所	郡中目村より斎が川を桶樋二而持越 当村分田代式拾貫	文之所江相掛申候二付 当村二堰場ハ無御座候江共用水溜高有之候間御書上仕候（以下略）	溜高有之候間御書上仕候（以下略）	一堰 白石御城御要害堰 当郡蔵本村ニ而相揚候処右末水当	一堰 白石御城御要害堰 当郡蔵本村ニ而相揚申候処右御堀	之末水当郡白石本郷より桶樋ヲ以斎川を持越 当村分田	代式拾五貫六百文之所江相掛申候二付 当村二堰場ハ無	御座候得共共用水溜高御座候間御書上仕候事（以下略）	（坂谷村）	一堰 白石御城御要害堰 当郡蔵本村ニ而相揚申候処右御堀	鷹巣村）	事（以下略）	当村二堰場ハ無御座候江共用水溜高有之候間御書上仕候	水当村分田代百五貫九百八拾四文之所江相掛り申候二付	一堰 白石御城御要害堰 当郡蔵本村ニ而相揚候所御堀之末	分拾貫式百文御座候事（以下略）	鷹巣村 郡山村 都合八ヶ村入合用水ニ罷成候処 当村	村并当郡白石本郷 森合村 中ノ目村 三澤村 坂谷村	一堰 式つ	（蔵本村）

② 下流（末水） 中ノ目地区から坂谷地区へ 白石本郷から鷹巣地区へ用水を届ける工夫



手前が坂谷地区 中ノ目村から樋桶を利用
して対岸の坂谷村に用水を持越・送った
と思われる。

③ 現在の鷹巣の用水路。下は斎が川。



現在の鷹巣地区への用水路 手前が白
石沢目鷹巣橋の脇に用水路を造ってい
る。



手前が大平中目向かい側の坂谷地区で農業用水が必要な時は①を閉め②を開ける。



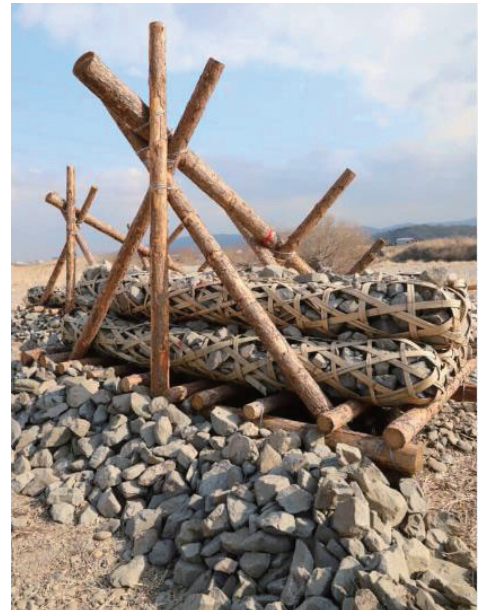
手前が坂谷地区 ③から④へ サイホン式で斎が川の下を用水が通過する。用水の必要が無い時は⑤から斎が川へ放水する。

5. 堰の作り方の工夫

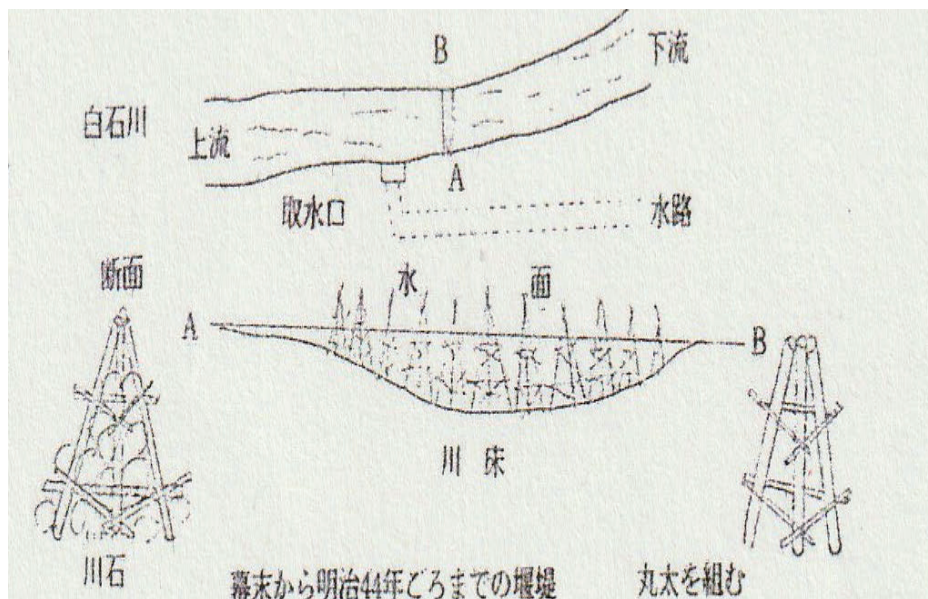
○ 用水の取入れ口の「堰」の管理はとても大変でした。どのように工夫されていたのでしょうか。

1) 江戸時代の一般的な堰の作りは、四角柱や三角柱の木組で、竹の蛇籠に石を詰め、堤防を作り、川の流れをせき止めて作りました。白石川の蔵本堰も同様の作りであると考えられます。これでは春先の少しの増水でも簡単に押し流されてしまいます。生活用水、防火用水、農業用水、水車を回す動力源などと広く利用されていましたが、度々水が来なくなったり、洪水になったりすると、普段の生活にも支障が生じていました。

①（木組と蛇籠で堰を作る）



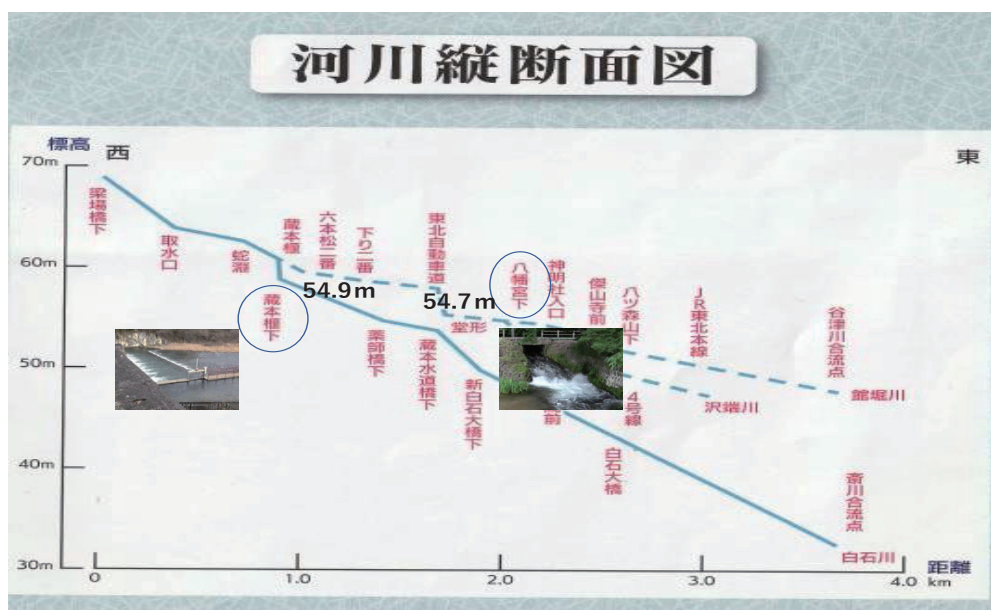
②（堰堤の作り方の想定図）



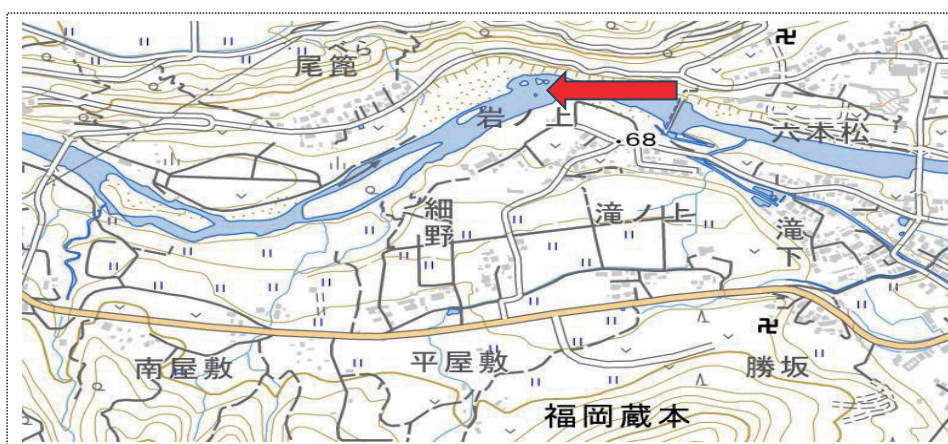
（蔵本堰の想定図 森治右衛門著「螺の吹き」1991年発行から複写）

- 2) 白石川の流れが荒く、当初の蔵本堰付近の川底が削られて低くなり、城下の取り入口との標高差が小さくなり十分な水の取り込みが困難になってきました。現在の標高で比較すると当時の堰周辺は54.9m、城の西側の八幡宮下の館堀川から沢端川への分岐点は54.7mのわずかが高低差になっています。
- 3) 蔵本堰は修復を繰り返し、上流へと移っていきました。この堰の修復や堰を上流に移す工事は人々にとって重い負担となっていました。
- 4) 白石市史には、享保20年(1735)領主片倉家から仙台藩南奉行へ「白石川の度々の洪水で堰が押し流され、当村民の人足だけでは普請できないので、人足を貸して欲しい」という願書が出されています。特に、天保年間の全国的にも毎年のように天候が悪く、凶作が続き、大飢饉となり、多くの死者がでました。また農民の中には他の土地に逃げ出すものもあったといわれています。さらに農民だけでなく、すべての人が苦しむようになりました。

用水路の標高差（白石市教育委員会発行「白石 水めぐる城下町」パンフレットから複写）

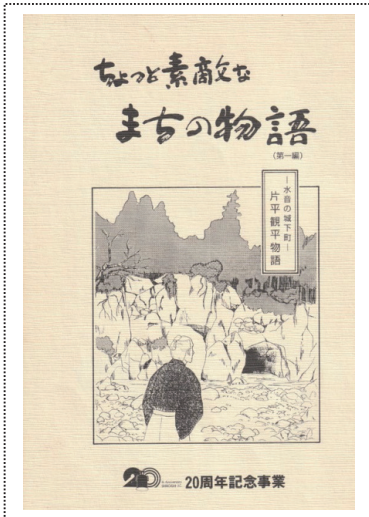


蔵本堰の上流への移動



6. 片平観平の業績

○ 安定した用水を確保するために活躍した片倉家中の武士のお話です。



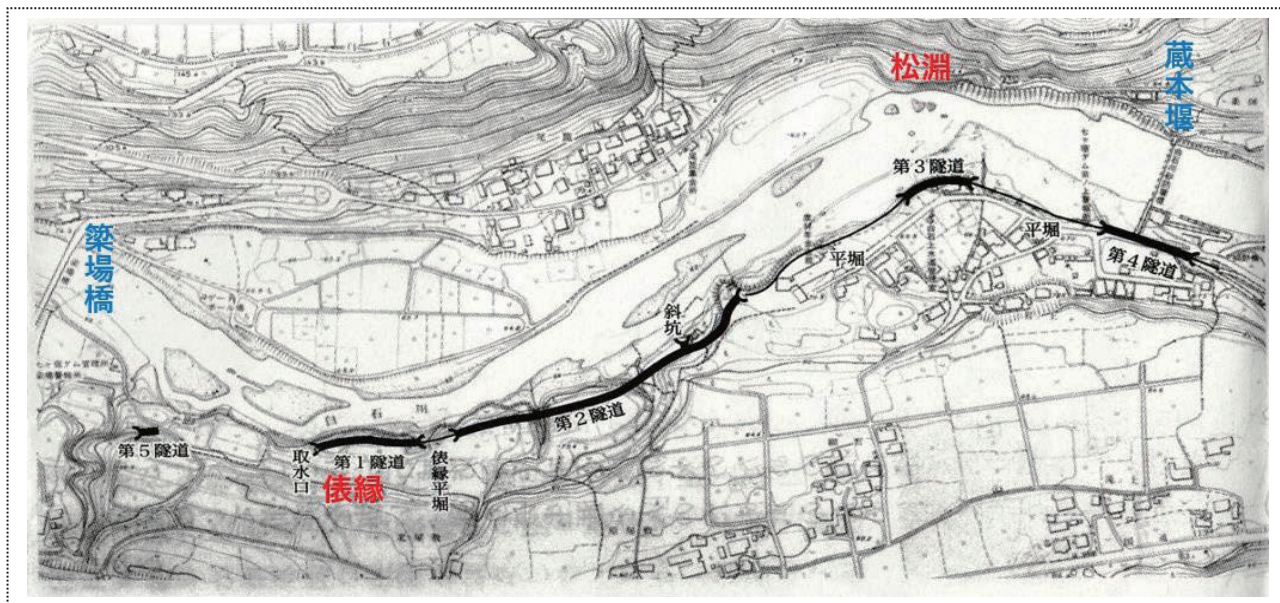
概要

- ・今から約220年前、文化・文政・天保の時代です。白石川ではたびたび大洪水で人々は苦しんでいました。そこで、片倉家中の武士、片平観平と息子友英が立ち上がり蔵本大堰を上流に、流されにくい場所に移す事を考え、川岸にトンネル（隧道）を掘り、水を通す計画を立てました。
 - ・俵渕から松渕まで切り立った崖に多くの人々が、のみと斧の手堀で頑張りました。
 - ・工事にかかるお金は片平観平の財産でまかないましたが、だんだんなくなってくると、援助してくれそうな商人の店を訪問し援助（借金）をお願いしました。
 - ・とうとう長雨が上がった翌日、勢いよくトンネルの中を流れていきました。
- （表紙は白石商工会議所編 1992 年発刊『ちよっと素敵なお話（第1編―水音の城下町―片平観平物語）』から複写）

○ 片平観平親子の業績に触れてみましょう。

- 1) 片倉家臣の片平観平は、人々がたびたび行われる堰の修復に駆り出される負担を軽くしようとしました。蔵本堰を、水面が高く川底の深い上流に移す必要があると考えたのです。
- 2) 天保元年(1830) 観平は、現在の蔵本堰上流約580mの松淵(まつぶち)から築場橋(やなばし)下流約150mの俵縁(たわらぶち)まで250間(約450m)の隧道(ずいどう)と平堀を作る工事に着手しました。この工事は切通(きんどし)工事と呼ばれています。
- 3) 松淵から俵縁まで切り立った崖に、多くの人々がのみと斧の手掘りでトンネルを掘って水を通しました。工事中は蔵王山の噴火や天保の大飢饉、地震や洪水など災害に見舞われ大変つらく難しい工事でした。
- 4) 私財を投じること150両、労役や資材の調達、岩盤のトンネル工事等、観平の卓越した才能を発揮して、完成まで4年とも10年とも言われる歳月を費やしました。トンネルの完成後は、白石城下に安定した用水が確保されるようになったと言われています。
- 5) 片平観平親子の切通し工事を行った時代は、当時の片倉家の財政が苦しかったこと、自然災害に見舞われたこと、観平自身の逼塞(ひっそく：刑罰の一つ)処分などが重なっていますが、工事の状況については確かな記録はなく、現在のところ伝承の範囲となっています。

- ① 片平観平が作った取水口と隧道の見取り図（高倉淳著「仙台領の潜り穴」2001年発行 今野出版から複写）



（上流に築場橋、下流に現在の蔵本堰）

- ② 現在の隧道等の様子



左岸から見た第1隧道入口 右の穴は潜穴



上から見た第1隧道入口 角落し用の粹跡

7. 江戸時代の測量の仕方や用具

○切通し工事にも使われたと思われる測量器具や測量方法を紹介します。

- 1) 江戸時代の測量といえはまず「検地」です。農民が所有する田畑の土地の面積を計り、年貢を徴収するために行われてきました。検地では竿と縄を使い一枚ごとに田畑を十字に切り、その長さから長方形の田畑の面積を求めています。
- 2) その他の測量器具としては、十字の曲尺、梵天竿、水縄などがあります。
- 3) 土地の水平や高低差を計測するのに重要な道具は水準器です、当時は水盛台といいました。測量には直線であること、垂直であること、水平であることが重要です。水盛台の太い角木の中央に溝を切り、そこに水を注ぎ、水平であることを確認しました。
- 4) 用水路を造る時には、予定された水路全体の土地の高低差を知ることが必要です。等間隔に竿を立て、その中間に水準器を置き、前と後の竿に水準器の高さの目じるしを付けます。その目印の高低差を測って行くことによって、水路全体の高低差を計算しました。
- 5) 暗闇で測ることは、より正確な測量地図をつくるため必要でした。そこで夜間も測量を行いました。水路予定の始点、終点、途中のいくつかの地点に、灯のともった提灯を立て、全体の提灯が見渡せる位置から、灯りが凹凸のない勾配になるよう調整しました。

① 検地の様子

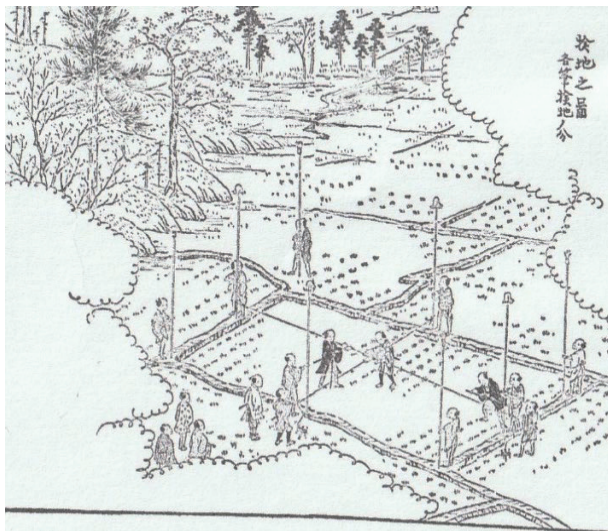


図4・8 十字法による一筆地の検地（安藤博『県治要略』より）

② 様々な測量の道具

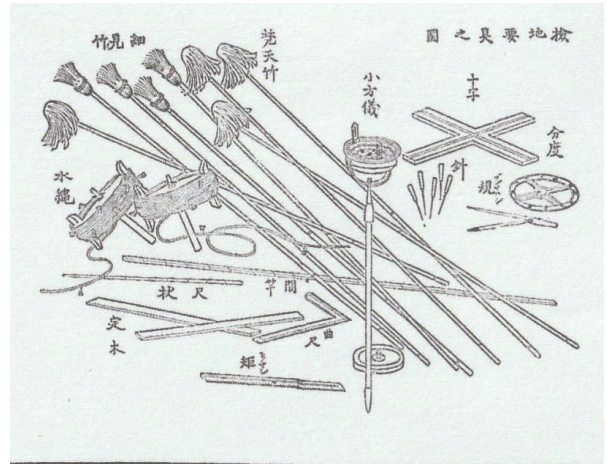


図4・10 検地要具（安藤博『県治要略』より）

（松崎利雄著『江戸時代の測量術』1979年発行 総合科学出版 から複写）

8. 江戸時代の古地図にみる用水路の変遷

○古地図から白石城下の用水路の移り変わりをたどってみましょう。

1) 正保絵図 (国立公文書館内閣文庫蔵から複写)



正保絵図は白石城絵図で最も古いものです。正保年間（1644～1648）に作成されました。

白石川から取り入れた館堀川は、八幡宮の下、西益岡町まで描かれています。ここから沢端川も描かれています。

正保絵図にはまだ三ノ丸外堀、外曲輪外堀はまだ絵描かれていません。城下町の家々の間を流れる小さな堀は描かれていませんが生活のための重要な水を供給する用水路はあったと思われます。

2) 安政絵図 (白石市教育会蔵)



安政3年（1856）の安政絵図には、沢端川と館堀川から分岐した東西方向、南北方向の小さな堀も描かれています。城下町の隅々まで用水が行き渡るように作られています。

3) 「町中堀」について

白石は城下町であり、奥州街道の宿場町でもあります。白石6町の街道沿いには旅人や荷物を運搬する馬などのために水の提供をする町中堀が整備されていたものと考えられます。これも用水路が整備されていたからこそであると思われます。

現在の市役所前の三ノ丸外堀と町中堀は、明治9年（1877）明治天皇東北御巡幸ときに、の通行の妨げになるという理由で埋め立てられ、道の両端に移設されました。



奥州街道の白石の北の入口（新町）から東方を見る。 白石第二小学校の方から北方（本町）を見る。

9. 用水路の役割と明治以降の歩み

○ 明治以降、用水路はどのような移り変わりがあったのでしょうか。

- 1) 用水路の水は、それぞれの水路から地下に浸透して井戸水となり、飲み水になりました。また、家の前の水路では、野菜を洗い、洗濯をし、風呂水を汲み、防火用水となりました。下流は農業用水として欠かすことのできないものでした。
- 2) 用水路の水を利用した水車は、江戸時代には白石の特産物、温麺（うーめん）の原料である小麦の製粉や精米用の臼挽き、製材用の大鋸挽きの動力源となっていました。明治16年（1883）の統計では白石に、315基の水車がありましたが、電気が使えるようになると動力源は電力へ切り替り、現在は、白石の水車はほとんど姿を消しました。
- 3) 蔵本堰は明治3年（1870）頃現在の場所に再び移設されました。昭和16年（1941）に台風により流出しましたが、翌年には改修工事は始まり第2次世界大戦で一時中断しましたが、昭和26年（1951）に新たな蔵本堰が完成すると堰から取り入れる水量を調整することができ、安定した用水路になったといわれています。
- 4) 昭和34年（1959）には、鉢森山麓部の大平・斎川地区の田んぼの用水は、国の補助事業として、館堀川からポンプで水を汲み上げること（ポンプアップ）により、長い間ため池に頼っていた農業用水の範囲がさらに拡大されました。

- 5) 平成3年(1991)白石川上流に建設された七ヶ宿ダムは、多目的ダムとして、安定した水の供給と洪水を防ぐための水量調整等の役割を果たしています。
- 6) 一年に2回実施される「川干し」には大勢の市民の方々による清掃活動や鯉の保護活動などのボランティア活動が行われています。また、高校生と一緒に毎月清掃活動を行っている団体もあります。未来につながる活動を大切にしていきたいものです。

おわりに

江戸時代の姿が残る城下町白石を廻る用水路は、現在もなお、梅花藻が揺れ、鯉が泳ぎ、蜉が飛び交い、蔵王の峰々を望む城下町の水面の光となり、せせらぎを奏でています。現在の市街地の用水路は、一部を除き430年の時を経た今でも江戸時代と変わらぬ姿を残しています

また、城下を巡る用水路は河川を浄化し、地下に浸透し、植物を育み、気温の上昇も防いでいます。持続可能な社会が求められている今日、科学的にもその役割を見直し、人々の生活を支え、郷土の文化を育んできた、城下町白石の水巡りを将来に伝えて行くことが大切であると考えます。

メモ

○現在の用水状況(白石市土地改良区の資料から)白石市土地改良区管轄

- 1) 蔵本堰は固定堰 堰長84m 堰高10.5m 1日の取水量は約12万トン
- 2) 用水の範囲は白石川右岸・南側の耕作地の大部分を占め、東西約2Km 南北約4kmにわたり452haを灌水
- 3) 用水路の長さ
 - ① 白石用水路(館堀川 蔵本堰～白石城周辺～中目ハッ森山周辺～中目斉原にて斉川サイホン型水路～坂谷樋ノ口～大鷹沢三沢にて谷津川サイホン型水路～大鷹沢三沢にて大鷹沢揚水機場ポンプアップ=PU) 全長 7725m
 - ② 大平幹線用水路(館堀川 蔵本西町白石下り1番から分岐～蔵本西町大平第1揚水機場にてPU～斉川地蔵院前) 4657m
 - ③ 大平森合用水路(幹線用水路 森合北六角から分岐 蔵本西町大平第1揚水機場PU～中目北城前 1251m)
 - ④ 斉川用水路(大平幹線用水路 中斎川下久保から分岐 斉川第3揚水機場PU～斉川町西裏下久保保留地) 1873m
 - ⑤ 大鷹沢用水路(白石用水路終点 大鷹沢三沢大鷹沢揚水機場PU～大鷹沢塔ノ入) 1129m
 - ⑥ 郡山西堀用水路(沢端川中町から分岐 深山堀「中町～半沢屋敷541m」の延伸。半沢屋敷～郡山西堀から白石川に放流) 1378m
- (その他の水路)
 - ⑦ 鷹巣堀(沢端川 清水小路から分岐～柳町～JR白石駅～鷹巣橋で水路橋～寿山～鷹巣荒屋敷前) 1630m
 - ⑧ 下り堀(館堀川蔵本滝下から分岐～六本松～西益岡～旧国道四号線～郡山外川原～郡山西堀から白石川に放流) 2820m
- 4) 受益面積は総計約447ha
 - ① 白石南地区(主に白石川南側・大平・斉川・大鷹沢) 約382ha
 - ② 白石地区(旧白石町) 約65ha

【その他の参考文献】

・片平観平親子の切通し工事時の時代背景は、「白石市史」1通史篇 第六節 幕末から戊辰戦争へ から

【DVD制作協力】

・「白石市教育委員会」 ・「白石市土地改良区」 ・「松田製粉(株)」・「白石まちあるきガイド」
・「大河原町自作視聴覚教材グループ」

【制 作】 視聴覚資料(DVD)及び小冊子(概要)

「白石水路研究会」

(代表) 佐藤 充 (白石市南町)・立田基生 (白石市西益岡町)・服部和憲 (白石市田町)(ナレーション)

中学校社会科に見る单元「身近な地域の歴史」の教材開発

水稻に必要な水利に関する歴史的事例を生かした選択的カリキュラムの構想

東北福祉大学教育学部 特別講師 大脇賢次

1 はじめに（主題設定の理由）

筆者はかつて角田市内の3つの小学校で社会科学習の研究を行った。それは、東京書籍小学校4年社会科教科書の单元「郷土を開く^①」に対応した郷土教材の制作と活用の研究である。その研究により制作した教材の概要は、角田市西根地区で明治時代に行われた溜池の造成と新田開発を学習内容とした「毛萱の溜池^②」、角田市枝野地区で明治から大正時代にかけて行われた蒸気式揚水機による灌漑と新田開発を学習内容とした「揚水翁 毛利萬之助^③」、そして、角田用水の造成と新田開発を学習内容とした「善右エ門と角田用水^④」である。しかし現在では、角田市の中心校である角田小学校で活用されている教材「善右エ門と角田用水」以外は、学校統廃合^⑤により廃校となり、前述した二つの教材は用済みとなってしまった。

本稿は、地域に残る文化や歴史的事柄が内在する教材をこのまま眠らせては郷土学習の損失になると思い、この2つの教材と「善右エ門と角田用水」を合わせた3つの教材を中学校社会科に生かす方法を考えた。なぜなら、学校統合により、前述した3地区の児童は同じ中学校の生徒として学習することになるからである。そして中学校学習指導要領及び東京書籍中学校社会科教科書等を調べ、これまで収集した資料や制作した3教材と照らし合わせるなどの考慮の末、中学校社会科歴史的分野に見る单元「身近な地域の歴史」の教材開発を手がけることが適切だと考へ本主題を設定した。

また、この論文の構成は、過疎化や少子化などによる角田市の学校統廃合からくる郷土学習の課題、角田市の阿武隈川と盆地地形からくる地域により異なる灌漑方法の歴史的事例、異なる地域の歴史的事例を基にした選択的カリキュラムの構想などの視点でまとめた。

2 角田市の中学社会科における郷土学習の課題

現在角田市では、過疎化と少子化などに伴う学校統廃合（角田市内9小学校を段階的に3小学校に統合し、4中学校を段階的に1つの中学校に統合される）が令和15年をめやすに進められており、近い将来、中学校の教室に異なる地区の生徒が在籍しあうことになる。この条件の基での郷土学習は、一部の生徒が住む身近な地域が、見落とされないような工夫が必要だと考える。その工夫として本教材は、三つの異なる地域の歴史的事例の選択肢を示すことにより、生徒は自分と関わり深い地域の事例を課題として学習することが可能となる。そして、わが故郷に対する興味や関心が高まり、主体的な学習が期待できる。

3 三つの地域の灌漑に関する歴史的事例

身近な地域の学習は、中学校学習指導要領解説社会編^⑥によれば、市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、歴史的及び地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付ける

ことをねらいとしている。本教材は「角田市における明治・大正時代の灌漑の歴史」の地域的な違いを課題とした。また、題材は土地利用に関わる水利に着目した事例であり、川や池を持つ地域の歴史を学習の対象とした。

(図1 出典 デジタル大辞泉)



(図2 国土地理院地図を加工)



角田市は図1のように、宮城と福島の間境付近にあり、東西は標高 300 メートル以下の亶理丘陵と角田丘陵が囲み、盆地地形になっている。盆地の中央には、宮城県で有数の一級河川である阿武隈川が流れている。(図2参照)

明治・大正時代、阿武隈川を中心として、地域により異なった灌漑施設が急速に整備された。歴史的事例は、丘陵地の麓にあたる西根地区、阿武隈川の東側にあたる枝野地区、阿武隈川の西側にあたる角田地区の3地区を課題として設定した。

(事例1) 西根地区の溜池による灌漑の歴史 (写真1 1991年 西根地区毛萱 筆者撮影)

西根地区のような丘陵地(図2参照)に、多くの溜池が存在する。角田市内の灌漑用溜池について書かれている溜池台帳^⑦を調べたところ、西根地区には28ヶ所の溜池が確認できた。これらの溜池のほとんどは、谷に流れ込む水流や湧き水を堰き止めて作られている。また、丘陵地の地形を生かした溜池なので、比較的に水深があり、多くの水を溜めることができる。西根地区毛萱の西の入溜池(写真1)を管理する日下菊夫氏は、溜池による灌漑の利点を、以下のように述べている。



「この辺は高台なので、阿武隈川の水は使えない、だから溜池を使っている。」「でも、溜池の無い場所では、田に水を年中溜めておいた。なので、牛や馬が農作業に使えなかった。溜池があるおかげで、乾田にして牛や馬を使って農作業ができる。」

耕耘機などが無い時代、牛馬耕を含めて農作業を計画的にできるようになったことを強調する。さらに、溜池の良さは温水効果があることだという。溜めた水を温めてから田に注ぐことにより、稲の成長が良好になることだ。また、日下菊夫氏は明治 11 年に造成された西の入溜池についての言い伝えを語った。

言い伝えの内容は、「明治時代、二宮尊徳の溜池作りの方法を相馬まで習いに行った。」「たぶん、その頃の肝入りだった庄司平治を中心に行ったと思う。」「だから毛萱の契約講は二宮式と言われてきた。」^⑧

この言い伝えに基づいて調査した結果、二宮尊徳は江戸時代の末期に徳川家の地領を中心に、今で言う土地改良や農村の共済組織を整える仕事をしていた。そして、多くの村の財政を立て直す貢献をした。尊徳がなくなり明治になると、尊徳の子供や孫を含めた弟子たちは、戊辰戦争の被害から逃れるために、江戸から福島県相馬の中村藩に身を寄せた。そして、復興会社を立ち上げ、相馬で溜池作りを含めた土地改良や農村の立て直しの活動を行っていた^⑨。そこに、西根地区の人々が溜池作りの方法を習いに行き、溜池を造成した。そして、溜池による灌漑により、新田開発が行われたという歴史である。

(写真 2 2010 年 角田市枝野 筆者撮影)

(事例 2) 枝野地区の蒸気式揚水機による 灌漑の歴史

阿武隈川の東側にあたる枝野地区は阿武隈川沿いに面した地域(図 2 参照)でありながら、地理的な条件などから阿武隈川から用水を引くことが困難であった。

枝野地区にある東禅寺には、大正時代に蒸気式揚水機による灌漑を成功させた毛利萬之助の石碑(写真 2)がある。石碑の碑文や書物^⑩によると、明治時代の枝野は枝野村と呼ばれていた。枝野村はすぐそばに阿武隈川が流れているのだが、灌漑には江戸時代に作られ、しかも遠距離にあった溜池を頼るしかなかった。しかし、雨が少ない年は、枝野村には水が届か

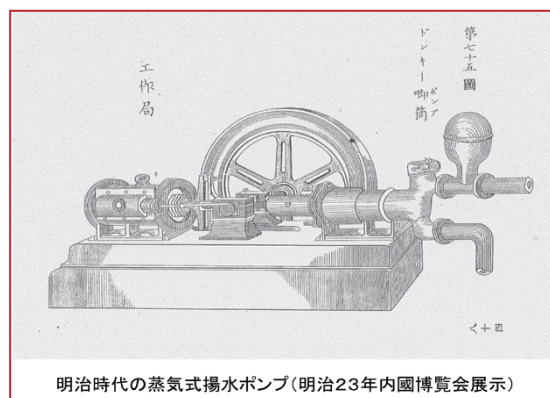


なかった。そのような年は干害になり、不作となった。明治時代の殖産興業の推進においては、米の増産や新田開発を進めることが必要であった。しかし、枝野村は新田を開発するどころか、安定した収穫さえ得られなかった。枝野村一の地主だった萬之助は、干害を防ぐためには、近くにある阿武隈川の水を利用するしかないと考えた。研究熱心な萬之助は家業の

養蚕や農業の仕事をしながら、揚水機について研究し、川から水を揚げようと何度も試みたが、失敗を重ねるばかりだった。萬之助は明治 23 年に東京で行われた内國勸業博覧会^⑩においてヨーロッパで発明されて間もない蒸気

(写真 3 国立国会図書館HP)

式の揚水機(写真 3)の存在を知った。そして萬之助は蒸気式揚水機により阿武隈川から水を揚げようと決意した。毛利家は枝野村屈指の資産家であったが多くの反対にあった。しかし、信念を曲げず、大正 8(1919)年、萬之助は私財を全て費やし、ドイツから高額な蒸気式揚水機を購入し、翌年に阿武隈川の土手に設置し、水を汲み上げることに成功した。枝野村は、阿武隈川の水を灌漑に利用できるようになってからは、干害の心配がなくなっただけでなく、新田開発を行うことができるようになったという歴史である。



明治時代の蒸気式揚水ポンプ(明治23年内國博覧會展示)

(写真 4 2000 年 高山彰氏所蔵)

(事例 3) 角田地区の用水開発の歴史
角田地区は、阿武隈川の西側にあたる(図 2 参照)。この地区は明治 40 年に阿武隈川の上流を水源にして、角田用水が造られた歴史がある^⑪。明治の初め頃の角田地区は、角田町と言われていた。角田町は城下町であり、人口が多かった。しかし、角田町の人々は、飲み水にするための井戸が少ないため、水売りから飲み水を買って生活するほどだった。



(写真 5 2000 年 台山公園 筆者撮影)

一方、町の西側に広がる水田の灌漑用の水は、江戸時代に作られた 7 カ所の溜池を利用していた。しかし、小河川から水を溜める平地の溜池だったので、水深が浅く、雨が少ない年は、すぐ枯れてしまい、農家は干害に悩まされた。明治元(1868)年、このような町の状況を改善するために、阿武隈川から上水と灌漑のための用水を開発する計画が持ち上がった。しかし、大河川から水を引く工事の技術力や金銭的裏付けがないことから、用水の開発計画は実行されなかった。

明治 39(1906)年 大河川の上流から、高低差を生



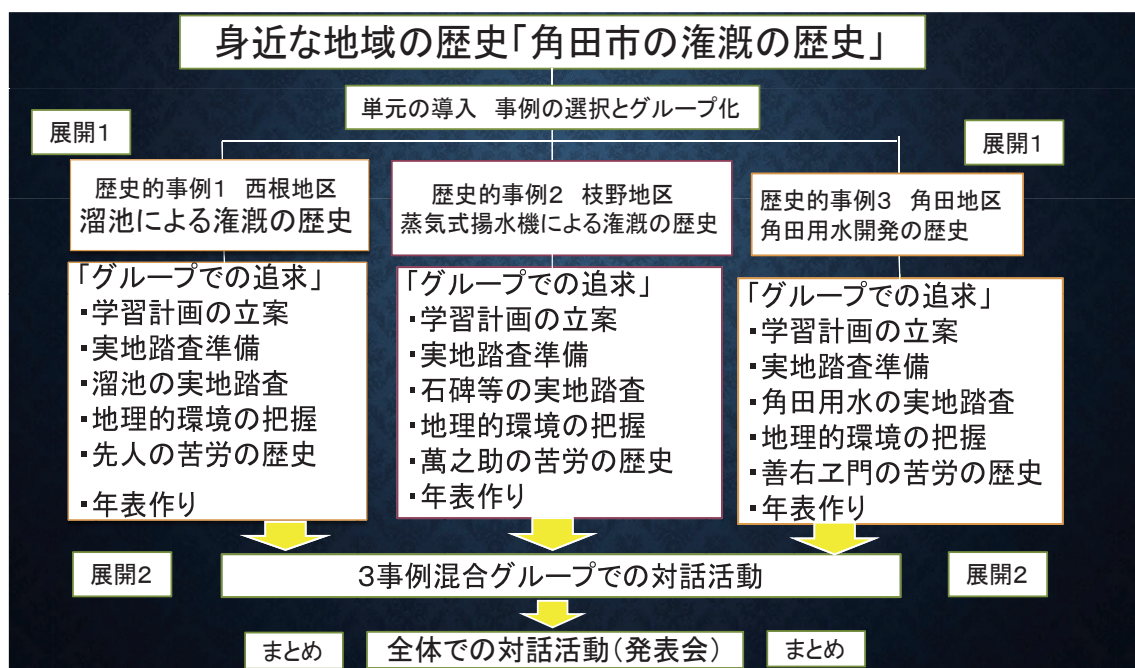
かした用水開発の技術が向上したこと、資金の計画が整ったことなどから、阿武隈川から用水を引く工事が始まり、翌明治40年に角田用水として完成した。（写真4）

角田用水の完成により、約1000ヘクタールの田に水を供給できるようになり、さらに明治41年には「大沼」「赤沼」「舟沼」など7カ所の灌漑用溜池が干拓され、約150町歩（ha）の新田が開発された。また、町内にも流し、上水として利用された。これらの功績により、角田用水の造成を中心に推し進めた高山善右エ門の銅像（写真5）が、現在でも角田地区に建てられている。以上のような歴史である。

4 3つの歴史的事例を生かした選択的カリキュラム

選択的カリキュラム^⑩（表1参照）は、学習課題を「西根地区・枝野地区・角田地区の3つの地区において、灌漑の歴史がなぜ異なっていたのか」に設定し、3地区の歴史的事例のいずれかを選択して学習するカリキュラムである。また、この課題を地理的・歴史的な角度で解決するために、アクティブラーニング型、つまり、主体的・対話的で深い学びがある学習^⑪を展開しようと考えた。郷土にある河川を中心とした3つの歴史的事例を提示することで、生徒は主体的な選択が可能となる。また、歴史的事例の中核となる素材が日常の生活環境の中にあり、イメージしやすく興味・関心が高めやすい。さらに、課題の追求に必要な実地踏査などの見通しが立てやすい。以上の点から、選択的カリキュラムは、生徒の能動的な学習に繋がると考える。生徒は、別々の事例を班ごとに学習し、その知識は生徒間の対話の中で共有化できる。また、3地域の歴史と向き合うことにより、共通点や相違点を発見し、学習課題である「西根地区・枝野地区・角田地区の3つの地区において、灌漑の歴史がなぜ異なっていたのか」を解決することができ、深い学びへと繋がる。

（表1 選択的カリキュラム 筆者作成）



(1) 単元の導入（歴史的事例の選択）

単元の導入における「事例の選択」では、生徒に、地域や歴史的事象への興味・関心を高めさせるために、角田の3つの事例の概要を知らせる。次に、3事例の中から、生徒が住む地区の事例若しくは、生徒が住む地区と類似している地区の事例や、生徒が追求してみたい事例を主体的に選択させる。そして、選択した事例ごとに2～4人の活動グループを編成する。

(2) 展開1（歴史的事例の追求）

- ①学習計画の立案では、映像や地図から、追究への見通しを持たせることにより、これからの学習意欲を高めさせる。学習は、グループによる対話的活動の形態をとる。
- ②地域ごとの地理的環境を、地図上と写真で空間的に把握させる。また、実地踏査の準備については、教科書の資料を活用する。
- ③歴史的事例（溜池、用水、揚水機）ごとに、実地踏査を行う。また、写真や動画などの映像による記録も行う。
- ④先人たちの苦労の歴史や、地元に残る伝説を、地域人材との対話活動の中で理解する。地域人材が不在の場合、教員のプレゼンテーションや教員との対話の中で、理解させる。
- ⑤年表作りにより、歴史的事例の中に登場する先人たちの活動の時間軸を理解させる。

(3) 展開2（3事例混合グループによる対話活動）

- ①異なる事例を学習してきた生徒による混合グループの編成（3～6人）を行う。グループ内で歴史的事例（溜池、用水、揚水機）の追究で学んだことを教え合う。そして、共通点や相違点を発見しあうことで、異なった事例の知識を共有化する。そして、学習課題である「西根地区・枝野地区・角田地区の3つの地区において、灌漑の歴史がなぜ異なっていたのか」を解決する。
- ②発表用壁新聞又は、発表用パワーポイントに対話的活動でわかったことをまとめる。（表現活動）

(4) 全体でのまとめ

学年や学級全体で事例混合グループごとの発表会を行う。そして、学年や学級全体の対話的な活動の中で、さらに知識の共有化をはかり、深い学びへと繋げていく。

活動の概要は、表1の選択的カリキュラムとして示した。

5 まとめと今後の課題

1の「はじめに」で述べた小学校4年社会科の地域教材が、小学校の廃校という理由により学習内容から外れた。しかし、この用済みとなった教材は、以下の理由から中学校社会科

教育で生かしていけることが分かった。

単元「身近な地域の歴史」は、平成29年告示の中学校学習指導要領第2章第2節社会の歴史的分野の内容Aの(2)において、「自らが生活する地域や受け継がれてきた伝統や文化への関心をもって、具体的な事柄との関わりの中で、地域の歴史について調べたり、収集した情報を年表などにまとめたりするなどの技能を身に付けること。」であり、歴史的事例の選択的カリキュラムにより、生徒が生活する地域を扱うこと、歴史的な遺産が近くに存在することなどから生徒は、学習への見通しを持つことができ、より能動的に課題の追求が行うことができる。また、もう一つの学習指導要領の内容は「比較や関連、時代的な背景や地域的な環境、歴史と私たちとのつながりなどに着目して、地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現すること」であり、同じ市内の歴史的事例を選択して扱う本教材は、3つの事例の比較・関連・時代背景・歴史と私たちとのつながりなどを捉えるのに適している。

今後の課題としては、生徒が持つ学習アイテムの一つとして、タブレット端末がある。インターネット等による情報収集や表現方法を、本教材の展開に生かすには有効であり、カリキュラムの改善を図る余地がある。また、本稿は、筆者が退職してからの企画であり、実践する機会がない状況である。しかし、この論文をきっかけにして、実践ができる働きかけを行い、実現させていきたい。

最後に、本稿で示したような選択的カリキュラムの指導方法が、過疎化や少子化などからくる学校統廃合が持つ、地域学習やふるさと教育への弊害^⑤を改善するためのモデルケースになればと願っている。

(注及び参考文献 等)

- ① 東京書籍小学校4年社会科教科書「単元 郷土を開く」について（昭和40年代「開発の昔と今」、昭和50年代から平成初期「郷土を開く」、平成後期「郷土に伝わるねがい」、令和期「郷土の伝統・文化と先人たち」と変遷してきた）
- ② 大脇賢次『毛萱の溜池』角田市西根地区の灌漑の歴史（西根小学校 1991）
- ③ 大脇賢次『揚水翁 毛利萬之助』角田市枝野地区の灌漑の歴史（枝野小学校 2010）
- ④ 大脇賢次『善右エ門と角田用水』角田市角田地区の灌漑の歴史（角田小学校 1998）
- ※②③④の教材は、宮城県仙南広域事務組合視聴覚教材センターのライブラリーとして保管されている。
- ⑤ 角田市教育委員会編『角田市学校の適正規模等に関する基本構想』（角田市、2020）
- ⑥ 文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』（日本文教出版、2017）
- ⑦ 角田市産業建設部農林振興課編『角田市溜池台帳』（角田市、2020）
- ⑧ 日下菊夫「日下家自宅にて取材」（1991）
- ⑨ 三戸岡道夫『二宮金次郎の一生』（栄光出版社、2002）
相馬郷土研究会編「富田高慶」『相馬郷土』第35号（2020）
- ⑩ 佐藤良逸「毛利揚水翁頌徳碑碑文」『枝野郷土誌』（2000）
- ⑪ 内国勸業博覧会とは 明治政府初代内務卿大久保利通が明治6（1873）年のウィーン万国博覧会を参考に推し進めた博覧会。出品物は殖産興業推進のために必要な欧米からの技術と在来技術の出会いの場となった産業奨励会であった。5回開催され、東京において、明治10（1877）年・明治14（1881）年・明治23（1890）年の3回、明治28（1895）年京都、明治36（1903）年大阪で行われた。
- ⑫ 角田市史編纂委員会編『修訂版石川氏一千年史 角田市史別巻1』（1985）
角田市史編纂委員会編『角田市史2及び3』（1986）
- ⑬ 三浦和美「選択的扱いを意識した年間計画のポイント」『社会科教育』（明治図書、2003）
- ⑭ 文部科学省『中学校学習指導要領』（2017）
- ⑮ 身近な地域の歴史的事例などの郷土独自の教育遺産が、廃校という理由により、学習内容から外されることなど

私達の郷土を走っていた幻の S L

－ 仙南温泉軌道 －

佐藤富雄（大河原町自作視聴覚教材制作グループ）

1. はじめに

今から 100 年ほど前，この郷土を軽便鉄道という小さな蒸気機関車が，煙を吐きながら長閑に走っていた時代があった。

蔵王町の永野から遠刈田までを走った「仙南軌道」と，大河原町から村田町までを走った「城南軌道」である。



初めて村田を軽便が走るという日。停車場に **【開通を祝う村田停車場 提供蔵王町生涯学習課】** は県知事をはじめ近くの町や村から多くの人々が押し寄せて開通を祝った。地域の人々がこの軽便をどれほど待ち望んでいたのかが分かる。焼き芋屋のような汽笛を鳴らし，煙突から煙を吐いて走る姿は，沿線地域の大きな期待をのせてスタートした。

その後，この二つの軽便鉄道会社は合併し「仙南温泉軌道」という一つの会社に生まれ変わった。間もなく，村田から永野までの約 10 ㎞も線路を敷いたので，大河原から村田を経由して遠刈田まで約 27 ㎞が一本の線路で繋がることになった。

遠刈田方面への下り列車は，青根温泉，遠刈田温泉への湯治客や，蔵王への登山客を乗せ，一方の大河原に向けた上り列車では，蔵王町から産出される珪藻土や米，野菜，村田町からの木炭などを運んで活躍したが，この軽便の営業運転期間は，たった 20 年間であった。

大正末期からの乗合自動車の出現，仙南地方を襲った大豪雨による線路や橋の被害などで客足は減少し続け廃業となってしまった。

しかし，短い間とはいえ軽便が沿線に住む住民の大きな期待の中で，地方交通や産業，観光に大きく貢献したことは否めない。廃線となった後，軽便が通った線路跡は，道路や畑に姿を変え，今ではその痕跡を見つける事さえ容易ではないが，私たちの郷土を走った軽便の歴史とともに，数少ない名残りにについても辿ってみることにした。

2. 軽便鉄道の定義

軽便鉄道の定義は，明治 43 年の「軽便鉄道法」で定められた「軌間」，つまり線路の幅が 1,067 ㎜未満のものをいう。

少し中途半端な線路幅のようにも思えるが，これは鉄道の発祥地であるイギリスでの基準 3 フィート 6 インチに当たり，それをセンチメートルに換算すると 1,067 ㎜になるという事によるものだ。

なお，実際の軽便鉄道の線路幅では，762 ㎜（2 フィート 6 インチ）を採用するケースが比較的多かった。

軌 間	採 用 鉄 道
1,435 ㎜ (世界標準)	東北新幹線，東西線 (仙台市地下鉄)
1,067 ㎜	東北本線， 南北線 (仙台市地下鉄)
762 ㎜	仙南温泉軌道 (軽便)

現在の世界標準の線路幅が 1,435 ㎜なので軽便の線路幅は、その半分程度という事になる。

他の列車の線路幅をみると、東北本線は 1,067 ㎜。東北新幹線は、世界標準の 1,435 ㎜を採用。因みに仙台市の地下鉄でも、南北線と東西線で採用している線路幅が異なっているのは興味深い。

3. 軽便鉄道の特徴と求められた時代背景

軽便の特徴や軽便鉄道が求められた時代背景についてみると、まず建設費・維持費の抑制のため、低規格で建設が出来たこと。地形的な制約の克服のために、急カーブや、急勾配が多かったことがある。

こうしたことから速度は遅く輸送力も小さいものとなり、産業が未成熟で限定的な輸送力しか必要としない地域に建設される事例が多かった。

4. 宮城県内を走っていた主な軽便鉄道

宮城県では、この郷土以外でも軽便は活躍していた。主なものとしては、現在の柴田町槻木から丸森町の舘矢間を走った「角田軌道」。仙台市青葉区から大崎市の西古川間を走った「仙台鉄道」。また「仙北鉄道」には、栗原市瀬峰から登米市までの路線と、瀬峰から築館までの二つの路線があった。

	名 称	始 発	終 着	距離	駅数	開通	廃線	営業 年数
1	角田軌道	柴田町(槻木)	丸森町(舘矢間)	19.3	10	明 33	昭 5	30
2	仙南軌道	蔵王町(永野)	蔵王町(遠刈田)	8.2	2	大 6	大 11	5
3	城南軌道	大河原町	村田町	8.0	3	大 7	(合併)	4
4	仙南温泉軌道	大河原町	蔵王町(遠刈田)	26.6	10	大 11	昭 12	15
5	仙北鉄道(登米線)	栗原市(瀬峰)	登米市	28.6	14	大 10	昭 43	47
6	仙台鉄道	青葉区(通町)	大崎市(西古川)	43.9	20	大 11	昭 35	38
7	仙北鉄道(築館線)	栗原市(瀬峰)	栗原市(築館)	12.6	6	大 12	昭 25	27

宮城県を走った軽便は、明治 33 年から昭和 43 年までの 68 年間である。下表はそれぞれの軽便が営業運転(全通)をしていた期間を示している。

この郷土を走った軽便は、仙南軌道が 5 年間、城南軌道は 4 年間。そして両社が合併後の仙南温泉軌道になってからは 15 年間。大正 5 年から昭和 12 年まで 20 年間だけの営業運転で、その使命を終えたという事になる。

	1900(明治 33)年 ～ 1968(昭和 43)年		68 年間
1	角田軌道 30 年間		
2	※ 1	(※ 1) 仙南軌道 5 年間	
3	※ 2	(※ 2) 城南軌道 4 年間	
4	※ 3		(※ 3) 仙南温泉軌道 15 年間
5	仙北鉄道(登米線) 47 年間		
6	仙台鉄道 38 年間		
7	仙北鉄道(築館線) 27 年間		

5. 軽便鉄道が郷土を走るまでの歩み

① 柴田鉄道

蔵王の遠刈田温泉は、明治になると次第に観光地として知られるようになっていた。こうした中、明治20年に日本鉄道(現在の東北本線)が開通し大河原町にも駅が設置された。

しかし、当時の村田町や蔵王町は主要交通網から外れていたために、依然として人力車や、馬車による輸送が中心で、大河原駅に連絡する便利な交通機関を作ろうという機運が高まっていた。

このような時期、明治33年8月「柴田鉄道」が設立された。これは現在の川崎町の青根から産出された鉄鉱石を、大河原駅から塩釜駅を経由し、そこからは海路で九州の八幡製鉄所まで輸送するというものである。また、これを利用して温泉客の誘致も行おうという一石二鳥の計画であった。

このルートは、**青根** → **遠刈田** → **永野** → **宮** → **向山** → **金ヶ瀬** → **大河原** までの約22キロ。蒸気機関車による計画で、発起人には近隣の11人に加え、東京からも6名が参加し設立委員会の翌年には測量も始まった。

しかし、その頃から東京の発起人達の資金繰りの問題で、残念ながらこの計画は途中で頓挫してしまった。

② 青根大河原間馬車鉄道

それから6年後の明治39年12月。東京の経営者らによって「青根大河原間馬車鉄道」の計画が発表された。これは青根からマンガン鉱石が産出され、それを機会に遠刈田には製鉄所が計画されたで、その運び出しを目的にしたものだった。

計画したルートは、**青根** → **遠刈田** → **永野** → **矢附** → **堤** → **金ヶ瀬** → **大河原** までの馬車鉄道である。

遠刈田と永野の間は予定通りに開通したが、間もなく馬車鉄道の運営を行っていた製鉄所が不況のあおりを受けて解散してしまった。

また、永野から先の矢附と堤との間のトンネルの難工事などに直面し、結局この計画も永野から先の大河原までは、未開通のままに途中で立ち消えてしまった。

③ 仙南軌道

明治も末期になると、輸送力の増強とスピードを求めて、馬車鉄道に代わり蒸気機関車による軽便鉄道が主流となった。そうした中で、明治44年12月に「仙南軌道」の開業申請があった。

ちょうどこの時期に、大河原駅から南側一つ手前に、北白川駅が開業していた事もあり、この駅から遠刈田まで繋ごうという計画だ。

ルートは、**遠刈田** → **永野** → **宮** → **三軒茶屋** → **籠石** → **北白川** というもので、この発起人には遠刈田や青根、柴田の槻木などから84名のほか、福島県からも2名が名を連ね社長には、福島県の奥山忠左衛門が就いた。



【蔵王町を走る軽便 提供:蔵王町生涯学習課】

④ 城南軌道

ところが翌年の明治 45 年 2 月、仙南軌道と同じような目的を持った「城南軌道」が設立され、こちらも県に開業申請を提出した。

このルートは、**遠刈田** → **永野** → **円田** → **平沢** → **村田** → **沼辺** → **大河原** というもので、発起人には大河原や村田の資産家など計 14 名で社長には村田の田山孫八が就いた。

こうして、東北本線から遠刈田までの路線が「仙南軌道」と「城南軌道」との競合のような形になってしまった。二つの申請を前後して受けた県では、この裁定に困り果て、その後 2 年間はどちらにも開業の許可を出さないまま保留するという事態になってしまった。

このような膠着状態を心配した株主の一部からは、資金の返還を求める声も上がり始めた。この事態に当時の柴田郡の郡長であった兼子悌次が仲介に乗り出し、両者間の協定を成立させた。

これにより大正 4 年 3 月「仙南軌道」には遠刈田から永野までの開業許可があり、同年の 10 月には「仙南軌道」が設立された。遠刈田と永野の路線は、先に馬車鉄道が営業していた軌道のある程度は活用出来たので、その後の工事も順調に進み大正 6 年 8 月には遠刈田、永野間が開通した。

一方の「城南軌道」へは、同じ時期に永野から大河原までの開業が許可された。「城南軌道」は、線路の設置個所が多かった事などから、当面は平坦部の大河原と村田間を優先区間として大正 7 年 3 月からの営業運転となった。

⑤ 仙南温泉軌道

こうしてスタートした軽便鉄道だったが、営業運転の開始後は様々な問題が発生した。

「城南軌道」では、機関車の故障が続き運行時間が乱れがちであった。また、始発駅は当初、現在の大河原駅前ではなく、駅から尾形橋を越え西に 400 メートルほど離れた場所にあったために大河原駅との接続が悪く乗客からの不満や荷物のスムーズな運搬も困難だった。



【尾形橋上の軽便 提供蔵王町生涯学習課】

一方、「仙南軌道」の方も、遠刈田と永野の間の運行だけでは、東北本線から離れており、業績は上がらなかった。こうした中で「城南軌道」では、大正 8 年に尾形橋を補強し、始発駅を大河原駅まで伸ばすことにより村田方面への乗客や貨物の運搬は大きく改善された。

これに先立って「仙南軌道」と「城南軌道」の合併の機運が高まっており、城南軌道が仙南軌道を吸収合併する形で、大正 10 年 9 月に新会社「仙南温泉軌道」が誕生した。

また、それまで未着工だった村田と永野の間の線路も、郡境の山間地など急勾配に苦労しつつも、大正 11 年 11 月にやっと全線開通となり、大河原から遠刈田までの約 27 ㌔が一本の線路で繋がり、沿線の 10 箇所に停車場や停留所が置かれた。新会社の社長には村田町の大沼万兵衛が就任した。



6. 仙南温泉軌道が保有した車両・設備

当初は「仙南軌道」と「城南軌道」から引き継いだもので、蒸気機関車は3トンや5トンのものが主流。その後、新たに5.5トンも購入。また、ライバルとなる乗合自動車が出てからは、勾配対策としてガソリンカーも導入した。

客車は30人乗りが4両。40人乗りが3両。また荷物を運ぶ貨車は、屋根のある有蓋車両が4両。屋根の無い無蓋車両と呼ばれるものが15両というものだった。車両の整備は村田停車場で行ったが、大規模な修理となれば盛岡や郡山の国鉄まで持ち込む事もあった。

軽便の座席は、通勤電車のようなサイドシート。つり革、網棚、天井には換気のための金網張りの通風口があった。冬には車内に長火鉢があったが、トイレや洗面所はなかった。

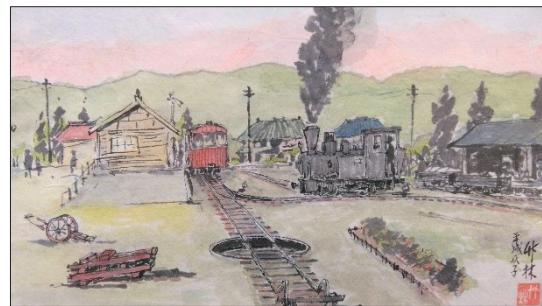
7. 仙南温泉軌道の足跡

① 停留所と停車場

軽便が大河原から村田を経由して遠刈田まで走った線路の各駅で「停留所」と呼ばれる所の大半は、茅葺き農家の軒先に「仙南温泉軌道待合所」の看板がある程度のものであった。

一方、ホーム、交換設備、給水所、引込線などを備えている駅を「停車場」と呼んだ。この「停車場」で規模が大きかったのは村田と遠刈田で、ターンテーブルや車庫を備え、二階建て駅舎の売店では、タバコや菓子の販売も行っていた。

大正8年以降の大河原の始発点はJR東北本線の「大河原駅前」。現在の大河原駅の北側にある駐輪場当たりがホームで、駅前駐在所付近に小さな待合所があったと思われる。



【大河原駅前の軽便 提供蔵王町生涯学習課】

当時、大河原駅に軽便が到着すると、子供たちが「汽車の子供が止まっている」と言いながら駆け寄って来たという話も伝わっている。

② 始発駅の大河原～沼辺～小泉～村田

大河原駅を出た軽便は、西に向けて当時は木製であった尾形橋を渡った。中央停留所の場所は、現在の大河原町中央公民館斜め向かいの「竹川呉服店」付近にあった。開業後の1年間は、この場所が大河原の始発駅だった。

ここを出た軽便は、現在の大河原町社会福祉協議会などを左手に見ながら西に300メートルほど進み、左手にコンビニのある交差点を右折した。

その後は大河原中学校や小学校の脇を1キロほど進み、現在のタクシー会社付近で大河原から村田方面へのバス路線である県道「亘理大河原川崎線」に合流し、国道4号線の大河原バイパス交差点を越えた。



【本社の村田停車場 提供村田町歴史みらい館】

ここから先は、一部分を除けば、現在のバス路線に沿って走る「併用軌道」として北上し、村田方面に向かった。

次の「沼辺停留所」は、現在の「JA葬祭」の倉庫付近にあったと思われる。この停留所では付近の堀や田からバケツで、蒸気機関車への給水も行っていたようだ。

次は「小泉停留所」。軽便が使用した当時の乗車券の多くは、この場所から少し離れた「豪農の館」と呼ばれる建物から発見された。

村田停車場は、現在の「JAみやぎ仙南村田支店」付近にあり、「仙南温泉軌道」の本社を置いていた。ここは最も規模が大きい駅舎で、車庫や整備工場、給水所のほか、ターンプールがあり、この場所で機関車の向きを変えて遠刈田を目指した。

「村田停車場」があった場所には、当時の駅舎の一部として使われていたと思われる建物も今でも残っている。もちろん、屋根瓦や窓枠などは、これまでの間にだいぶ手が加えられているようだが「板張り外壁」は、当時のままの様子を今に伝えている。



【現存する駅舎の一部 撮影:令和5年12月】

③ 村田～平沢

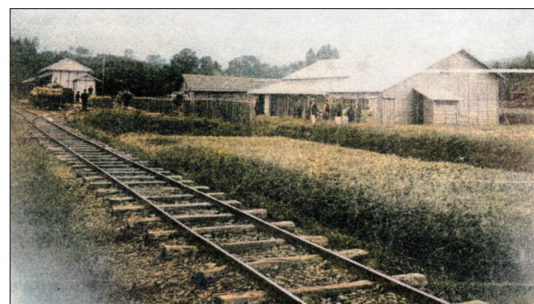
村田停車場を出た軽便は、ここからは西寄りへと進路を大きく変え、現在の村田工業団地の方向へと進んだ。

当時の軽便が通った痕跡は、ほとんど消えてしまっているが、村田停車場を出て程なくした場所の飲食店と石材店の敷地内に、今でも当時の線路跡をうかがい知る事が出来る「細長い空き地」が残っており、僅かながらも当時の面影を偲ぶ事が出来る。

ここからは、コースの中でも最も難所と言われた割山を目指して、スイッチバックやカーブを描きながら登ったものと思われる。今は村田工業団地のほか、住宅地や高校のグラウンドなどになっている。

現在の工業団地を登り切った所が、東北縦貫自動車道の上を跨ぐ陸橋付近で、ここが柴田郡と刈田郡の郡境になる。この場所には「交換場」と呼ばれる無人の信号所があったようだ。

ここからは平沢停車場に向かって、ようやく下り坂になった。その後は、田んぼの中を今の産直市場「みんな野」方面に向かい、県道「岩沼蔵王線」に沿って西に進むルートだ。



【珪藻土を積む平沢停車場 提供:蔵王町生涯学習課】

蔵王町に入って最初の平沢停車場は、現在の白石警察署平沢駐在所の斜め向かい付近にあった。

当時の駅舎は、業務委託を受けた民家が停車場となっていた。この場所では珪藻土の積み出しのために保管倉庫も備えられていた。

珪藻土は、毎日2トン貨車で10両の出荷と言うので、相当量のものを積んでいたことが分かる。そして、停車場があった民家の敷地からは、当時のホームに使われた名残りのコンクリートが今でも確認される。

④ 平沢～円田～永野

平沢停車場から次の円田停車場までは、現在の県道岩沼蔵王線から少し東寄りのコースを進んだものと思われ、停車場は現在の円田郵便局の西隣りにあった。ここでは遠刈田に向かう軽便の給水も行っていた。

円田停車場から次の永野停車場までは、塩沢地区を経由して、しばらくは県道の岩沼蔵王線の東側に沿って進んだ後、県道が西寄りに曲がると、今度は県道の南側を進んだようだ。

永野停車場は、現在の永野小学校近くにあり、廃線後にはパンの製造工場が置かれていた時代もあった。ここを出た軽便は、小学校の裏を通った後、左に進路を変えて蔵王町役場の敷地を横切る。

その後は、蔵王町ふるさと文化会館ございんホール付近で県道の白石上山線に合流し、この道沿いに遠刈田方面に進んだ。

⑤ 永野～遠刈田

永野から遠刈田に向かうコースで、現在、果樹園やその直売店などがある棚村あたりまでは、ほぼ県道の白石上山線に沿って緩やかなコースが続いた。そして、この先は急勾配が待ち構えていることから、疣岩には給水所を供えた停留所が置かれていた。

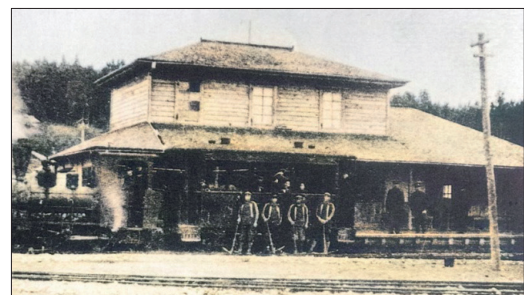
疣岩を出て釜沢付近になると県道南側の松川寄りに進路を変更し、現在の別荘地近辺を西に進んだようだ。この後、小妻坂付近で一端は県道に近づいた後、バス停「上小妻坂」付近からしばらく西に進んだところで、再び県道から左手にそれたコースになる。

永野から遠刈田までのコースを距離にすれば僅か8^{キロ}程度だが、勾配33分の1という坂道のコースには、1時間以上もかかる時があったという。

一方、同じコースを折り返して来る際には下り坂なので、たった15分程度のもので、こんなことも小さな軽便ならではの事かも知れない。ここからのコース跡は、今では車一台が辛うじて通れる程度の畑や墓地に沿った小道を遠刈田停車場に向かって進む事になる。

⑥ 終着駅の遠刈田

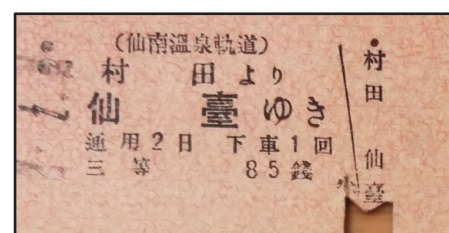
終着駅の遠刈田停車場は二階建て駅舎で、一階は改札口や事務所のほかに待合室や売店もあった。この建物は、軽便の廃止後も倉庫や戦後引揚者の住宅として使用されていた時代もあったという。なお、遠刈田停車場のあった場所は、現在、旅館の「さんさ亭」になっている。



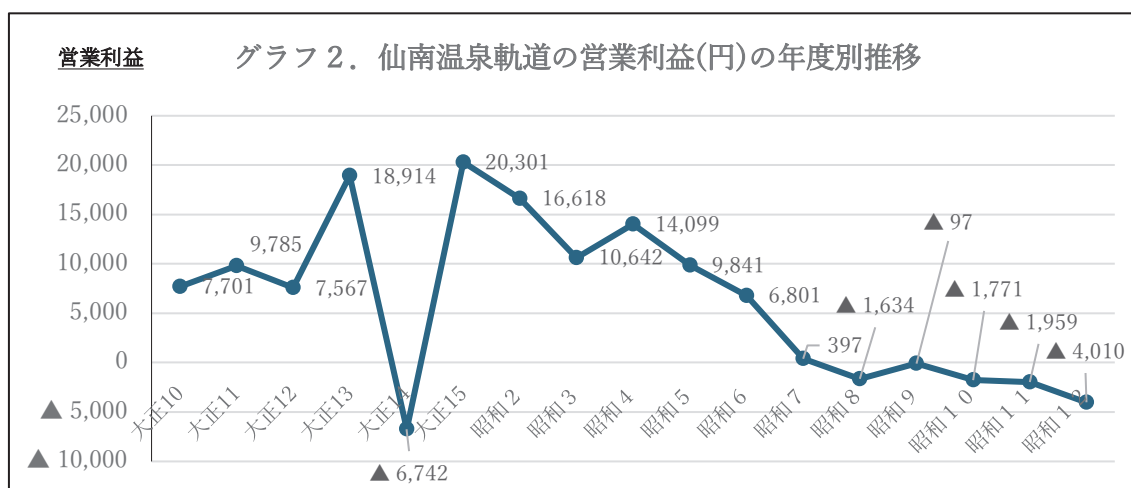
【終着駅の遠刈田停車場 提供:蔵王町生涯学習課】

8. 乗車券と時刻表

右の写真は当時使われていた乗車券。村田停車場で販売された仙台行のものだ。村田から大河原までは軽便、大河原からは現在のJR東北本線を利用するルートであった。同じように当時は遠刈田停車場から上野駅までの乗車券も購入することが出来たという。



【村田発仙台行き 提供:村田町歴史みらい館】



10. 時代変遷

多くの人々の期待を一身に受けてスタートした軽便であったが、その前途は様々な問題に直面し当初から多難に満ちたものだった。とりわけ開業後の大きな試練は、道路の整備などによって、モータリゼーションの変化が急速に進み、乗合自動車やトラックが、この地域にも進出してきた事にある。大河原駅と青根の間にも、新たに乗合自動車の会社が出来て運行を開始した事により軽便の客は減少した。

また、大正14年には仙南地方を襲った大豪雨により平沢橋や荒川橋、元関場橋など、軽便が走る主要な橋の多くが流され、この復旧に10日間の運休を余儀なくされたことなども客足の減少に拍車をかけることになった。



【昭和12年輕便鉄道廃線の日 提供:村田町歴史みらい館】

こうした事に危機感を抱いた軽便の会社側は、運賃の3割値下げを断行した。しかし、これだけでは客足は伸びず、経営環境の更なる悪化により、従業員の給与は当時の社長の個人資産から一時的に支払ったという記録もあるようだ。

従業員への制服の支給は途絶え、レール修理もままならないことから脱線が頻繁に発生し定時の運行も困難な状態。そんな中、会社存続のためにと従業員側の方から「自分達の給与を減額してほしい」との申し出もあった。

その後も軽便の客足減少は止まらず、やがて乗客は2～3人だけというのも、珍しい事ではなかったようだ。このような状況だったので、軽便が坂道を登る時の音は、まるで「欠損、欠損」と聞こえたとも言い、線路の近くで農作業をしている人達からは「今日も軽便は車掌の貸し切りだ」と揶揄されたことも度々あったという。

昭和6年には、乗合自動車の大河原自動車の株を購入し合併。組織体制を「自動車部門」と「軽便部門」にし、本社を大河原に移転。しかし、その後も「自動車部門」が「軽便部門」の損失を補うという経営が続いた。

そして、その後の昭和12年6月30日に「軽便部門」は全線廃止となった。線路跡は地主に返却され、やがては道路や畑に戻ったのである。

1 1. その後の仙南温泉軌道

「軽便部門」を廃止した後「仙南温泉軌道」は、社名が「仙南温泉自動車」に変更された。

それからは近郊にある乗合自動車会社など数社との合併を繰り返し、昭和 18 年に「仙南交通自動車」に名称を変更。

昭和 34 年には秋保電気鉄道と合併し名称は「仙南交通」。

その後、昭和 45 年には宮城バス、宮城中央バスと合併し、今日の宮城交通となった。

仙南温泉軌道という軽便鉄道会社は遠い昔に姿を消しているが、そのDNAは今も着実に引き継がれている。

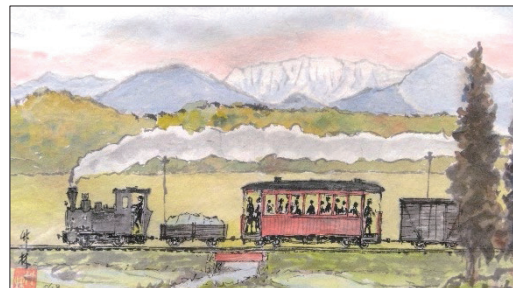
	時 期	変 遷
1	明治 33	柴田鉄道設立
2	明治 39	青根大河原間馬車鉄道設立
3	大正 6	仙南軌道開通(遠刈田～永野)
4	大正 7	城南軌道開通(大河原～村田)
5	大正 9	仙南温泉軌道に改称(仙南と城南が合併)
6	大正 11	仙南温泉軌道全線開通(大河原～遠刈田)
7	昭和 6	大河原自動車と合併
8	昭和 9	島津自動車と合併
9	昭和 12	仙南温泉自動車に改称(軽便部門廃止)
10	昭和 14	仙南自動車と合併
11	昭和 16	赤井自動車と合併
12	昭和 18	仙南交通自動車に改称 (刈田自動車、昭和自動車商会と合併)
13	昭和 34	仙南交通設立 (秋保電気鉄道と合併)
14	昭和 45	宮城交通発足 (宮城バス、宮城中央バスと合併)

1 2. おわりに

軽便が大河原から村田を経由して、遠刈田まで全線開通したのは大正 11 年であった。故郷の山河を機関車が煙を吐いて走る姿は、当時の文明開化そのものであったと思う。

料金が高く乗客が少なかった事や、修繕費が増大した事、道路が良くなりバスやトラックが時代の主流になった事などにより、20 年間走り続けた【蔵王を背景に走る軽便 提供:蔵王町生涯学習課】軽便鉄道は、昭和 12 年に廃止されバスに切り替えられた。

僅か 20 年と言う短い期間であったが、私たちの郷土をSLが走っていたという事を、これからも語り伝えていきたい。



【資料提供】 ・村田町歴史みらい館 ・蔵王町生涯学習課 ・龍泰寺 ・児玉泰隆画伯

【引用・参考文献】 ・宮城県 1960『宮城県史』5(地理・交通) ・村田町史編纂委員会 1977『村田町史』
・大河原町史編纂委員会編 1982『大河原町史』通史編 ・蔵王町史編纂委員会 1994『蔵王町史』通史編
・村田町 1995 町制施行 100 周年記念誌『時輝のまなざし過去からの伝言・そして未来へ』
・村田町歴史みらい館 2000『みらい館を見たか』 ・蔵王町 2014『写真で見る ふるさと いまむかし』
・福田忠吉 1991『村田広報誌 まぼろしのSL・軽便鉄道の思い出』
・岡崎明典 2008『大河原・村田・蔵王を走った仙南温泉軌道』
・大沼勇吉 1965『大河原・村田・遠刈田間 軽便鉄道の想出』
・大河原学生会 OB 会 1992『写真に見る大河原町誌』
・国土地理院 1931『旧版地図』 ・フリー百科事典『ウィキペディア』

ペルー移民 117 年の軌跡

— 『Miyagi, Centenario de la Inmigración de Miyagi al Perú (1908-2008)
35 Aniversario de Perú Miyagi Kenjinkai (1973-2008)』を中心に—

ペルー国立シカン博物館 相原 淳一

はじめに

筆者の祖母の姉はブラジル移民であった。我が家の口伝によれば、祖母方は戊辰戦争の後に、新潟県東蒲原郡から落ち延びて来たという。祖母は口減らしで里子に出され、姉はブラジルに渡り、コーヒー農家に嫁いだ。明治の女たちの前には、橋田壽賀子の『おしん』さながらの世界が広がっていた。その大伯母さまは宮城県の里帰り事業で 1981 年夏に故国の地を踏み、コーヒーの花の匂い立つばかりの美しさを語り、去っていった。

筆者は 1996 ～ 2000 年に仙台市博物館において、原河英二氏とともにふたつの巡回展『黄金の都 シカン発掘展』、『ペルー移民百周年記念 悠久の大インカ展～哀しみの美少女フワニータ～』を担当した（相原 1996、2000abc）。特に前者のシカン発掘展は博物館学芸員としての初めての仕事であり、鮮烈な記憶として筆者の脳裏に焼き付いた。2011 年東日本大震災による被災資料中から、元カルフォルニア移民だった北村千代治氏の評伝をまとめる機会を得た（相原・大出 2017）。決して継続的に移民に関する研究を行って来たわけではないが、その折々に少なからぬ関心を寄せて来た。

この度、JICA の海外協力隊によってペルー国立シカン博物館に学芸員として派遣されることとなり、棄民（石川 1935）とまで称された国の移民政策について、いつかは調べてみたいという漠然とした想いが形を結ぶことになった。昨年 4 月に合格通知を受け取ってから、時折活字として見られるペルー宮城県人会の連絡先を八方手を尽くして探してきたが、日本国内ではとうとう探し出すことはできなかった。11 月に日本を出国、翌 25 年 1 月からはペルー北部のランバイエケ州フェレニャフェに所在するペルー国立シカン博物館に勤務することになった。赴任後、ほどなくして宮城県人会設立 50 周年の時の会長の連絡先がわかった。3 月 23 日に開催された新年会（写真 1）に招かれ、貴重な宮城県人ペルー移住百周年記念誌：『Miyagi, Centenario de la Inmigración de Miyagi al Perú (1908-2008) 35 Aniversario de Perú Miyagi Kenjinkai (1973-2008)』（Miyagikenjinkai 2011）をいただいた。また、ASOCIACIÓN PERUANO JAPONESA (APJ、ペルー日系人協会) の Centro Cultural Peruano Japonés (日本ペルー文化会館) 内の Museo de la Inmigración Japonesa al Perú "Carlos Chiyoteru Hiraoka" (日本人ペルー移住史料館 "平岡千代照") ・図書館においても、ペルー国内でしか閲覧困難と思われる資料に接することができた。ここに宮城県人ペルー移民 117 年の概略について記す。



写真 1 宮城県人会新年会（2025 年 3 月、APJ）

1. ペルー移民前史の概略

日本最初の海外移民は、1868年に40人余がグアム島、153人がハワイ、翌1869年に40余人がカリフォルニアに渡航したことに始まる。明治政府は1884年にオーストラリア北東部ヨーク岬半島とニューギニアとの間の真珠貝採取移民を初めて許可した。同年、ハワイ渡航約定が締結され、翌1885年のハワイ移民420名中に、東北ではただ1人、柴田郡大河原町の大槻幸之助がいる（丹野1981）。

1894年、日清戦争開戦により官約移民が廃止され、ハワイ移民の送出しは、移民の募集と渡航の周旋をする民間移民会社の取扱いとなった。これ以降、神戸渡航合資会社、海外渡航株式会社、森岡眞（個人経営）など移民会社が設立され、これらの会社が移民渡航を担った。ハワイ以外にも、明治20年代から米国本土、カナダ、オーストラリア、ニューカレドニア、フィジー、西インド諸島、明治30年代からメキシコ、ペルー、フィリピンへ、それぞれ移民会社によって日本人移民が送り込まれた。（以上、国立国会図書館2008から）

2. ペルー渡航のはじまり

1614年1月27日のペルー副王による人口調査において、当時リマ市には20人の日本人男女が住んでいたという記録（原本：スペイン国立図書館、マドリッド）が残されている。1873年ペルー共和国と日本国との間で第1次ペルー日本第1次和平修好通商航海条約によって日本国民が正式にペルーに渡航できることが明記された。通常は1899年4月3日に「佐倉丸」(写真2 日本郵船)によって日本人が到着した日を公式に日本人がペルーに渡航した日とみなす。

ペルーでは19世紀初頭に沿岸の甘蔗（サトウキビ）や綿花のプランテーション農業において、充分な労働者を確保できなくなりつつあった。1821年ペルー独立後には、労働力不足に一層拍車がかかった。1849～74年には、中国・ポリネシアから多くの労働者が雇われた。特に1854年黒人奴隷解放宣言後は、黒人奴隷の欠を補うために、中国人・ポリネシア人が劣悪な労働環境下に送り込まれた。1874年にはマカオ港が閉鎖され、中国が提供する安価な労働力（苦力）はますます見込めなくなった。日本政府から正式に認可された移民会社は、ペルーでの給料や生活条件を誇大に広告し、多くの



写真2 佐倉丸

（写真提供：Museo de la Inmigración Japonesa al Perú “Carlos Chiyoteru Hiraoka”）

明治32（1889）年2月27日 横浜港発
同 年4月3日 カヤオ港着

新潟県	372名
山口県	187名
広島県	176名
岡山県	50名
東京府	4名
茨城県	1名

渡航人員 790名 （男子のみ）

表1 第一航海者（佐倉丸）名簿
（ペルー新報社1974）より

人々の注目を集めた。このころ多くの日本人はペルーに渡って、お金をためて日本に帰国する出稼ぎにあこがれた。

労働契約では、20 歳から 45 歳までの心身ともに頑健であること、品行方正が求められ、契約期間は 4 年間である。契約では、4 年の間、甘蔗耕地または製糖工場で勤務し、一か月 2 ポンド 10 シリング相当のペルー貨を支給される。一日の労働時間は野外 10 時間、屋内 12 時間、日曜・祭日は休みである。労働賃金から毎月 8 シリング天引きし、契約の保証と帰国費に充てる。日本円にして 25 円、食費は自弁だから、月 10 円とみて、月 15 円を貯めれば、4 年で 960 円、1000 円近くの大金を手にすることができる計算であった。

第 1 回渡航は森岡会社が 798 人の日本人を募集し、790 人が 1899 年 2 月 28 日に横浜港を出発し、4 月 3 日にペルーのカヤオ港に着いた。乗船名簿によると、約半数が新潟県人で占められている（表 1）。正式な通関手続きを終え、森岡商会ペルー支店設立関係者をおろし、佐倉丸は契約書に記された耕地近くの港に移動した。ちなみに新潟県人は、エストレヤ（サンタ クララ）耕地（耕主プライス・監督飯田勘之助）50 人、パルパ耕地（耕主イゲラス・監督川口吉三）30 人、パンパス耕地（耕主ウエルス・監督熊木平次）50 人、ルリフイコ耕地（耕主ベルビアンシュガーステート会社・監督宮崎勇雄）50 人、ポマルカ耕地（耕主グティエレス・監督長谷川潤郎）新潟 13+ 山口 27 人、サンタバルバラ耕地（監督中野芳蔵・景山鍋吉）176 名である。なお監督者にスペイン語を操る者はいなかった。

1899 年 4 月 25 日にはサンニコラウス農園（1907 年サンニコラウス墓地。農園で働いた 137 人の契約移民とその後に亡くなった日本人 480 人が埋葬された）では、最初のストライキが組織された。植民地的な待遇制度を押し付けようとする雇用主との闘いであった。渡航した日本人たちは、トイレも水もない劣悪な生活環境の中で、マラリア、黄熱病、赤痢といった風土病にかかり、満足の医療も受けられず、カサブランカ耕地では入耕 3 か月後、226 名中就労できるものはわずか 30 数名、5、6 月中には 40 名の死者を出す惨状となった。

翌 1900 年 10 月までに 124 名の死者を出した。契約を破棄し、逃亡する者もいたが、ほとんどの日本人はお金がなく、日本に帰ることもできず、ペルーに留まるしか選択の余地はなかった。移民は契約が切れると、すぐに自由になった。ほとんどの移民は契約を更新するか、他の農園に出て行った。完全に転職する者もいた。農園に残るものの多くは管理職として働いた。

1909 年 12 月までの 10 年間にペルーに渡航した 6295 名中、死亡した者は 481 名、帰国した者 414 名である。多くは錦衣帰郷の目的を果たすことはできず、ペルーに残留することとなった。（以上、伊藤・呉屋編 1974 『在ペルー邦人 75 年の歩み』 から）



写真 3 宮城県人会・サンニコラシナ協会による合同墓参
2008.11.1, サンニコラス墓地
(Miyagikenjinkai2011 から)

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
出発日	1890227	19030520	19061016	19070105	19080407	19080928	19081030	19090608	19090713	19090916	19091103	19100106	19100315	19100514	19100712	19101106	19110306	19110908	19111030	19111229	19120302	19120626
出港	横浜	神戸	横浜	横浜	横浜	横浜	神戸	神戸	横浜		横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜
到着日	1890403	19030729	19061121	19070208	19080521	19081114	19081210	19090716	19090903	19091020	19091216	19100227	19100425	19100628	19100819	19101219	19110419	19111019	19111211	19120208	19120415	19120731
寄港	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ		カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ
首位	新潟	福岡	熊本	静岡	熊本	福島	鹿児島	熊本	富山	高山・福島	富山	福島	香川	沖縄	鹿児島	大分	熊本	熊本	沖縄	福岡	熊本	熊本
人数	372	387	243	84	191	95	159	88	17	11・11	16	28	37	13	36	20	39	35	43	40	21	33
%	47	33	31	19	21	16	16	16	28	20・20	31	23	17	46	30	33	74	27	62	18	100	32
新潟	372		1	13		33																
福島				52		95		44		11	3	28	22	6	1				1	3		2
宮城						26	25	31			7	1	6		9	8	14					6
山形								7			1											
岩手								2														
秋田																						
青森																						
北海道																						
Total	790	1175	774	452	903	596	966	551	61	56	52	123	214	28	121	60	53	129	69	228	21	104

(※1908年6月18日

ブラジル移民開始 (781人)

回	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47
出発日	19130218	19130419	19130620	19130825	19131013	19131225	19140217	19140428	19140711	19141022	19150123	19150324	19150525	19150724	19150924	19151124	19160121	19160401	19160629	19160725	19161007	19161126
出港	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜
到着日	19130403	19130530	19130802	19131002	19131201	19140205	19140402	19140609	19140823	19150107	19150311	19150513	19150714	19150911	19151114	19160115	19160314	19160523	19160721	19160918	19161124	19170115
寄港	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ
首位	福島	福岡	鹿児島	鹿児島	熊本	沖縄	山梨	熊本	沖縄	熊本	福島	福島	福島	福島	福島	福島	福島	山口	熊本	福岡	広島	
人数	27	26	105	106	53	60	15	73	70	72	60	77	29	62	92	54	67	36	57	35	58	66
%	42	33	28	52	41	36	31	27	18	30	52	23	30	27	34	35	58	41	27	14	18	29
新潟									1		3				1				18	30	7	5
福島	27	18	14	41	4	19	12	61	39	57	60	77	29	62	92	54	67	36	17	17	35	18
宮城	18		6	12	2	2	12	20	5		1	12	15	6	6	8	11		14	18	9	8
山形																					1	2
岩手					1																1	
秋田											2											
青森																						
北海道															1	1						
Total	65	79	376	205	128	166	48	273	396	243	116	329	97	233	274	155	115	88	214	244	328	227

(※第1次大戦旅程77日間)

回	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69
出発日	19170123	19170403	19170526	19170725	19170923	19171201	19180124	19180330	18180529	19180726	19181009	19181122	19190130	19190404	19190517	19190727	19190923	19191118	19200127	19200326	19200530	19200923
出港	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜
到着日	19170317	19170522	19170716	19170916	19171113	19180122	19180316	19180516	19180711	19180915	19181127	19190109	19190325	19190522	19190707	19190914	19191114	19200109	19200317	19200515	19200720	19201112
寄港	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ
首位	熊本	熊本	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄
人数	92	109	92	70	58	105	102	115	113	120	195	118	70	106	85	151	202	98	137	126	27	57
%	39	28	32	29	28	40	45	60	60	80	44	40	45	32	72	72	54	74	88	36	70	59
新潟	8	4		3												2				1	1	
福島	21	36	33	21	26	13	12	30	6	2	5	4	10	8	3		8	4	4	3	2	5
宮城	21	9	10	15	8	5	4	8			4		1		1		2	1	1	2	2	
山形		19	6	12	6	3	14	21	2	3	5	5	1	6	5		2	2		3		1
岩手												1	1						2		1	
秋田																						
青森														1								
北海道																				1		
Total	236	385	216	199	372	254	257	437	201	245	268	173	236	269	209	282	181	184	144	74	81	198

	71	72	73	74	75	76	77		78	79	80	81	82
出発日	19210130	19210320	19210529	19210704	19210920	19211010	19211123		19230210	19230321	19230514	19230621	19230808
出港	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜	横浜		横浜	横浜	横浜	横浜	横浜
到着日	19210322	19210609	192107018	19210824	19211115	19211208	19220112		19230329	19230506	19230628	19230809	19230924
寄港	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ		カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ	カヤオ
首位	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄		広島	沖縄	沖縄	沖縄	沖縄
人数	58	94	100	2	10	10	19		17	22	15	18	25
%	51	57	68	100	40	43	46		52	45	29	49	83
新潟		1	2			2	1						
福島		3	1						1		1		

表3 北日本のペルー移民 (1899年第1回～1923年第82回渡航)

伊藤 カ・呉屋 勇編 1974 『在ペルー邦人75年の歩み』を底本に

栃木県 13 名、山梨県 12 名、三重県 12 名、東京都 1 名）が乗船していた。宮城県名簿には、女性とみられる石川エンが含まれている。また、男性の名前は儀八、留五郎、次郎、三五郎、久六、泰三、善四郎、新七、祐三郎、利四郎、庄三郎と、その多くは家督以外の子息だったと推定される。最初からリマに入った者もあり、全員が必ずしも農業を目指したわけではなさそうである。

宮城県人のペルー移民の翌年の 1909 年、第 8 回渡航中には、山形県人 7 名（鈴木三郎・鏡善次郎・狩野蒲吉・高橋三蔵・竹田清造・我妻源四郎・増村伊三郎）と岩手県人 2 名（及川晋治・相沢専蔵）が含まれている。山形県の増村伊三郎のピンソス以外は全員サンニコラス耕地に配属された。ちなみにこの回の福島県人 44 名・宮城県人 31 名のうち、福島県の林里見のピンソス以外は全員サンニコラス耕地に配属されている。東北出身者では福島県の天野留次郎・ヨシが夫婦者とみられるほかは全員男性単身者である。

さらに遅れて、1915 年の第 37 回渡航中には、秋田県人 2 名（岩井藤松・岩井謙直 チクリン）、同年の第 40 回渡航中には、北海道人 1 名（藤田徳三郎 カニエテ）が含まれている。青森県からは 1919 年第 61 回渡航者名簿中に、横山紋一郎 チクリンを見出すことができる。

総じて、早い時期からペルー移民を出した福島県・宮城県・山形県の南東北 3 県はのちに県人会組織が作られるが、遅れた北東北 3 県と北海道は人数的にも少なく、県人会・道人会組織は作られなかった。この中でも、福島県からの移民は突出しており、特筆される（表 3）。1908 年第 6 回、1909 年第 10 回、1910 年第 12 回、1913 年第 26 回、1915 年第 36～41 回、1916 年第 42・43 回渡航において、福島県は県別では首位を占めている。なかでも移民船の 50%以上を福島県人が占める第 36 回、第 42 回渡航がある。移民に至る個々の動機は定かではないものの、会津戦争に代表される戊辰戦争の戦乱、あるいはその後の福島事件ほかの自由民権運動の高まりとその擾乱の影響が社会的背景にあったものと推測される。1917 年第 50 回渡航船では、沖縄県が県別で首位となり、契約移民制度がなくなる 1923 年第 82 回まで、その首位の座は揺らぐことはなかった。

ペルー移民を輩出した福島県人の中に、1917 年の第 48 回紀洋丸乗船名簿総員 230 名中に、野内与吉の名を見出すことができる。野内は福島県安達郡玉井村出身、福島県人 20 名とともにペルーに渡航し、サンニコラス耕地に配属された。農場は 1 年で辞め、南米各地を放浪の後、1923 年頃にペルーへ戻り、鉄道技師として 1929 年にはクスコ～マチュピチュ区間の鉄道建設にあたった。1935 年には、この村初の本格的なホテル・ノウチを建てた。村人の信頼が厚い与吉は、1939～1941 年にはマチュピチュ村の最高責任者である行政官を務めた。1947 年にはマチュピチュ村の川が氾濫し、大きな土砂災害に見舞われた。地方政府から復興のため与吉はマチュピチュ村村長に任命された。1958 年にはペルー国政府招待の三笠宮がマチュピチュ遺跡を訪れる栄誉に浴した。1968 年に帰郷、マチュピチュ遺跡などについて講演し、翌年、クスコで亡くなっている（野内 2015）。

契約満了後は次第に都市に仕事を求める人が増え、日本人による団体や組合が全国に設立された。1923 年 9 月 1 日には日本で関東大震災が起き、ペルー中央日本人会は 167,000 ソーレスの見舞金として日本本国に送るまでにペルー日本人社会は力をつけていた。この年の 8 月第 82 回渡航の楽洋丸をもって契約移民の歴史を終えた。ここまで 18,727 人の契約移民がペルーに渡航した。

第6回 26人（明治植民合資会社取り扱い）			
カラベラス号（横浜発）19080928-19081114（カヤオ着）			
石森 儀人		猪野 安兵衛	
石川 留五郎	ネベニア谷 サンハシント		
石川 弥吉		石川 エン	
小野 次郎		大泉 卯平太	
小野 三五郎	リマ	大窪 造酒之助	
菅野 久六		川村 幸之丞	
加藤 盛	ランド	山家 泰三	
藤島 金作		赤間 重右衛門	
赤間 善四郎	サン アグステイ	佐藤 新七	
佐々木 祐三郎		三浦 平兵衛	サン ニコラス
北村 周喜		庄司 泰司	
真壁 金吾	カヤオ	鈴木 利四郎	
鈴木 庄三郎	ネベニア谷 サンハシント		
鈴木 久右衛門			

第7回 25人（取り扱い 空欄）			
蔵島丸（神戸発）19081031-19081210（カヤオ着）			
早坂 源三郎	サン ニコラス	石川 卯平	サン ニコラス
二階堂 房之助	〃	吉田 稔	〃
高野 東治	〃	村上 幸之助	〃
福田 金也	〃	佐藤 藤七	〃
佐藤 恒三郎	〃	佐藤 熊吉	〃
佐藤 貞治	〃	三浦 春吉	〃
三浦 幸得	〃	樋口 豊七	〃

千田 運平	ワチツバ	小野寺 慶次	ワチョ ローサ
小野寺 万四郎		遠藤 良之助	
佐々木 宇外		佐々木久一	
佐々木 広平	（ワチツバ）チャンカイ ヘクワン		
三浦 学理		三浦 喜一郎	ワチツバ
三浦 利孝		菅原 長吉	

第8回 31人（取り扱い 空欄）			
香港丸（神戸発）19090608-19090716（カヤオ着）			
伊東 吉郎	サン ニコラス	二宮 庄七	サン ニコラス
武田 留五郎	〃	武田 喜助	〃
武田 亀吉	〃	高野 文作	〃
高橋 運七	〃	丹野 養之助	〃
氏家 運助	〃	日下 勘七	〃
山家 新六	〃	相沢 基司郎	〃
浅野 幸右衛門	〃	齋藤 政治	〃
佐藤 藤五郎	〃	佐藤 直四郎	〃
佐藤 林吉	〃	佐藤 春右衛門	〃
佐藤 小市	〃	佐藤 梅五郎	〃
佐藤 久兵衛	〃	佐藤 源三郎	〃
平間 久松	〃	平間 喜四郎	〃
平間 初太郎	〃	平間 七兵衛	〃
平間 平之丞	〃		

第11回 11人（取り扱い 空欄）				
香港丸（横浜発）19091003-19091216（カヤオ着）				
高橋 運太郎	バラモンガ	村上 冬治	バラモンガ	
黒田 三治	〃	日下 長蔵	〃	
佐久間 政治	〃	穴戸 留郎	〃	
庄司 清	〃			

第12回 1人（取り扱い 空欄）				
満洲丸（横浜発）19090106-19090227（カヤオ着）				
内海 茂	バラモンガ			

第13回 6人（取り扱い 空欄）				
紀洋丸（横浜発）19100315-19100425				
大槻 運之丞	サン ニコラス	玉手 忠吾	サン ニコラス	
玉手源右衛門	〃	鈴木 素亮	〃	
佐藤 大吉	〃	三浦 太市	〃	

第15回 9人（森岡移民第14回航海）				
香港丸（横浜発）19100712-19101219（カヤオ着）				
佐々木 文吉	サン ニコラス	千葉 熊太	サン ニコラス	
山内 英馬	〃	木戸 伊佐治	〃	
木戸 政治	〃	佐藤 健治	〃	
山崎 完平	〃	佐久間 庄太郎	〃	
遠藤 周平	〃			

第16回8人（森岡移民第15回航海）				
武洋丸（横浜発）19101106-19101219（カヤオ着）				
伊藤 量助	バラモンガ	山岸 利蔵	バラモンガ	
伊藤 大亮	〃	笠間 武之進	〃	
佐藤 善蔵	〃	佐藤 武志	〃	
三浦 千富	〃	上野専三郎	〃	

第17回14人（森岡移民第16回航海）				
紀洋丸（横浜発）19110306-19110419（カヤオ着）				
石崎 秀雄	バラモンガ	伊藤 昌五郎	バラモンガ	
大友 善四郎	〃	渡辺 国児	〃	
高橋 源九郎	〃	高橋 熊吉	〃	
平 運吉	〃	只野 武司	〃	
村松 勇四郎	〃	蔵本 貫一郎	〃	
遠藤 耕次郎	〃	安部 義雄	〃	
佐藤 栄太郎	〃	佐藤 鶴治	〃	

第22回6人（森岡移民第16回航海）				
紀洋丸（横浜発）19110306-19110419（カヤオ着）				
平岡 初吉	サン ニコラス	大宮徳五郎	サン ニコラス	
平岡 源平	〃	浅野留之丞	〃	
浅野 政吉	〃	二宮 喜六	〃	

表4 宮城県人のペルーへの移民（1）（1908年第6回～1911年第22回渡航）

伊藤 カ・呉屋 勇編 1974 『在ペルー邦人75年の歩み』を底本に

8 ペルー移民 117 年の軌跡

第37回12人（森岡移民第35回航海）				
安洋丸（横浜発）19150324-19150513（カヤオ着）				
	鈴木 養助	サン アグスチン	鈴木 ミネ	サン アグスチン
	皆川 清治	ツマン	大柳 文之助	ツマン
	佐々木 倉治	〃	庄司 菊次郎	〃
	山本 真一	〃	佐々木 兵衛	〃
	横山 仁助	〃	大槻 為蔵	〃
	二階堂 寿雄	〃	入生田 庸治	〃

第38回15人（森岡移民第36回航海）				
静洋丸（横浜発）19150525-19170714（カヤオ着）				
	穴戸 善三	パラモンガ	安瀬 忠蔵	パラモンガ
	門馬 栄三郎	〃	菊池 治平	〃
	高橋 平吉	〃	斎藤 栄吉	〃
	安部 勇次郎	〃	平塚 重蔵	〃
	千葉 善之助	〃	斎藤 菊雄	〃
	島津 安平	〃	桜井 斎治	〃
	桜井 喜悦	〃	八木 亀治	〃
	横田 保右エ門	〃		

第39回 6人（森岡移民第37回航海）				
紀洋丸（横浜発）19150724-19150911（カヤオ着）				
	伊藤 重允	カニエテ	高橋 新助	カニエテ
	浅野 米吉	〃	庄子 友吉	〃
	阿部 柳三	〃	樋口 弥作	〃

第40回 6人（森岡移民第38回航海）				
安洋丸（横浜発）19150924-19151114（カヤオ着）				
	佐藤 卯蔵	カニエテ	荒川 一郎	カニエテ
	吉川 重吉	〃	大槻 吉次郎	〃
	土井 吉之助	〃	渋谷 康吉	〃

第41回8人（森岡移民第39回航海）				
静洋丸（横浜発）19151124-19160115（カヤオ着）				
	阿部 恵吉	チクリン	伊藤 惣助	チクリン
	大村 養之丞	〃	樋口 松蔵	〃
	浜田 栄之進	〃	小山 忠治	〃
	中村 栄吉	〃	渡辺 俊治	〃

第42回11人（森岡移民第40回航海）				
紀洋丸（横浜発）19160121-19160314（カヤオ着）				
	古内 佐助	ツマン	大海 長吉	ツマン
	鈴木 弥七	〃	鈴木（サトシ）	〃
	石崎 雄也	〃	門田 万治	〃
	米倉 新一郎	〃	佐々木 寛次郎	〃
	宮城 惣治	〃	日下 莊九郎	〃
	永沢 与二郎	〃		

第44回14人（森岡移民第42回航海）				
静洋丸（横浜発）19160529-19160721（カヤオ着）				
	阿部 匡	カニエテ	荒 清之丞	カニエテ
	岩淵 盛	〃	及川 養治郎	〃
	渋谷 源四郎	〃	工藤 妙作	〃
	工藤 ゲン	〃	三塚 時己	〃
	岡田 四郎助	〃	早坂 寛一郎	〃
	佐竹 朝治	〃	柴田 幸吉	〃
	鈴木 繁治	〃	斎 長十郎	〃

第45回18人（森岡移民第43回航海）				
紀洋丸（横浜発）19160725-19160916（カヤオ着）				
	山内 耕造	カニエテ	佐藤 峻	カニエテ
	藤村 三次	〃	須藤 喜悦	〃
	須藤 隆治	〃	千葉 誠	〃
	浅野 重五郎	〃	大友 善兵衛	〃
	今野 長吉	〃	小原 直治	〃
	田中 庄蔵	〃	高橋 三郎	〃
	高橋 万三郎	〃	三浦 国吉	〃
	阿部 正男	〃	氏家 万次郎	〃
	佐々木 作吉	〃	遠山 正治	〃

第46回 9人（森岡移民第44回航海）				
安洋丸（横浜発）19161007-19161124（カヤオ着）				
	高橋 卯蔵	カニエテ	水間 東右エ門	カニエテ
	渡辺 清助	サン ニコラス	小野 清平	サン ニコラス
	水間 健治	〃	二階堂 英治	ローマ
	高橋 庄助	ローマ	寺島 潔	〃
	小野寺 勉	〃		

第47回8人（森岡移民第45回航海）				
静洋丸（横浜発）19161126-19170115（カヤオ着）				
	渡辺 良治	ローマ	宮崎 忠哉	ローマ
	千葉 忠思	〃	千葉 円喜治	〃
	堀籠 学治郎	〃	阿部 簾助	〃
	常盤 磧	〃	佐藤 七三郎	〃

第48回21人（森岡移民第46回航海）				
紀洋丸（横浜発）19170123-19170317（カヤオ着）				
	高橋 数馬	サン ニコラス	菅原 常三郎	サン ニコラス
	菅原 三郎治	〃	氏家 エイ	〃
	佐藤 長七	〃	小関 清喜	〃
	大森 菊治	〃	森谷 養次郎	〃
	大石 強	〃	菅原 末治	〃
	久道 雄二郎	〃	栗田 芳五郎	〃
	宮内 新吉	〃	我妻 四郎吉	〃
	我妻 今朝七	〃	我妻 重之助	〃
	小川 峻	〃	穴戸 静次	〃
	我妻 運寿	〃	工藤 仁三郎	〃
	木村 善蔵	〃		

表5 宮城県人のペルーへの移民（2）（1912年第23回～1915年第36回渡航）

伊藤 カ・呉屋 勇編 1974 『在ペルー邦人75年の歩み』を底本に

第37回12人（森岡移民第35回航海）				
安洋丸（横浜発）19150324-19150513（カヤオ着）				
	鈴木 養助	サン アグスチン	鈴木 ミネ	サン アグスチン
	皆川 清治	ツマン	大柳 文之助	ツマン
	佐々木 倉治	〃	庄司 菊次郎	〃
	山本 真一	〃	佐々木 兵衛	〃
	横山 仁助	〃	大槻 為蔵	〃
	二階堂 寿雄	〃	入生田 庸治	〃

第38回15人（森岡移民第36回航海）				
静洋丸（横浜発）19150525-19170714（カヤオ着）				
	穴戸 善三	バラモンガ	安瀬 忠蔵	バラモンガ
	門馬 栄三郎	〃	菊池 治平	〃
	高橋 平吉	〃	斎藤 栄吉	〃
	安部 勇次郎	〃	平塚 重蔵	〃
	千葉 善之助	〃	斎藤 菊雄	〃
	島津 安平	〃	桜井 斎治	〃
	桜井 喜悦	〃	八木 亀治	〃
	横田 保右エ門	〃		

第39回 6人（森岡移民第37回航海）				
紀洋丸（横浜発）19150724-19150911（カヤオ着）				
	伊藤 重允	カニエテ	高橋 新助	カニエテ
	浅野 米吉	〃	庄子 友吉	〃
	阿部 柳三	〃	樋口 弥作	〃

第40回 6人（森岡移民第38回航海）				
安洋丸（横浜発）19150924-19151114（カヤオ着）				
	佐藤 卯蔵	カニエテ	荒川 一郎	カニエテ
	古川 重吉	〃	大槻 吉次郎	〃
	土井 吉之助	〃	渋谷 康吉	〃

第41回8人（森岡移民第39回航海）				
静洋丸（横浜発）19151124-19160115（カヤオ着）				
	阿部 恵吉	チクリン	伊藤 惣助	チクリン
	大村 養之丞	〃	樋口 松蔵	〃
	浜田 栄之進	〃	小山 忠治	〃
	中村 栄吉	〃	渡辺 俊治	〃

第42回11人（森岡移民第40回航海）				
紀洋丸（横浜発）19160121-19160314（カヤオ着）				
	古内 佐助	ツマン	大海 長吉	ツマン
	鈴木 弥七	〃	鈴木（サトシ）	〃
	石崎 雄也	〃	門田 万治	〃
	米倉 新一郎	〃	佐々木 寛次郎	〃
	宮城 惣治	〃	日下 莊九郎	〃
	永沢 与二郎	〃		

第44回14人（森岡移民第42回航海）				
静洋丸（横浜発）19160529-19160721（カヤオ着）				
	阿部 匡	カニエテ	荒 清之丞	カニエテ
	岩淵 盛	〃	及川 養治郎	〃
	渋谷 源四郎	〃	工藤 妙作	〃
	工藤 ゲン	〃	三塚 時己	〃
	岡田 四郎助	〃	早坂 寛一郎	〃
	佐竹 朝治	〃	柴田 幸吉	〃
	鈴木 繁治	〃	斎 長十郎	〃

第45回18人（森岡移民第43回航海）				
紀洋丸（横浜発）19160725-19160916（カヤオ着）				
	山内 耕造	カニエテ	佐藤 峻	カニエテ
	藤村 三次	〃	須藤 喜悦	〃
	須藤 隆治	〃	千葉 誠	〃
	浅野 重五郎	〃	大友 善兵衛	〃
	今野 長吉	〃	小原 直治	〃
	田中 庄蔵	〃	高橋 三郎	〃
	高橋 万三郎	〃	三浦 国吉	〃
	阿部 正男	〃	氏家 万次郎	〃
	佐々木 作吉	〃	遠山 正治	〃

第46回 9人（森岡移民第44回航海）				
安洋丸（横浜発）19161007-19161124（カヤオ着）				
	高橋 卯蔵	カニエテ	水間 東右エ門	カニエテ
	渡辺 清助	サン ニコラス	小野 清平	サン ニコラス
	水間 健治	〃	二階堂 英治	ローマ
	高橋 庄助	ローマ	寺島 潔	〃
	小野寺 勉	〃		

第47回8人（森岡移民第45回航海）				
静洋丸（横浜発）19161126-19170115（カヤオ着）				
	渡辺 良治	ローマ	宮崎 忠哉	ローマ
	千葉 忠思	〃	千葉 円喜治	〃
	堀籠 学治郎	〃	阿部 簾助	〃
	常盤 磧	〃	佐藤 七三郎	〃

第48回21人（森岡移民第46回航海）				
紀洋丸（横浜発）19170123-19170317（カヤオ着）				
	高橋 数馬	サン ニコラス	菅原 常三郎	サン ニコラス
	菅原 三郎治	〃	氏家 エイ	〃
	佐藤 長七	〃	小関 清喜	〃
	大森 菊治	〃	森谷 養次郎	〃
	大石 強	〃	菅原 末治	〃
	久道 雄二郎	〃	栗田 芳五郎	〃
	宮内 新吉	〃	我妻 四郎吉	〃
	我妻 今朝七	〃	我妻 重之助	〃
	小川 峻	〃	穴戸 静次	〃
	我妻 運寿	〃	工藤 仁三郎	〃
	木村 善蔵	〃		

表 6 宮城県人のペルーへの移民（3）（1915 年第 37 回～1917 年第 48 回渡航）

伊藤 カ・呉屋 勇編 1974 『在ペルー邦人 75 年の歩み』を底本に

10 ペルー移民 117 年の軌跡

第49回9人（森岡移民第47回航海）				
安洋丸（横浜発）19170403-19170522（カヤオ着）				
	鈴木 哲	サン ニコラス	鈴木 さひ	サン ニコラス
	斎藤 直治	〃	江村 長栄	〃
	江村 エン	〃	夷塚 実	〃
	夷塚 ラト	〃	工藤 義雄	〃
	工藤 キクノ	〃		

第50回10人+幼児1人（森岡移民第48回航海）				
静洋丸（横浜発）19170526-19170716（カヤオ着）				
	瀬戸 明治郎	ローマ	瀬戸 とめの	ローマ
	岩松 銀之丞	〃	岩松 まつみ	〃
	岩松 みどり	〃	佐藤 昌	〃
	佐藤 なを	〃	佐藤 ハナエ	〃
	達久 重五郎	〃	尾形 繁治	〃
	尾形 いね	〃		

第51回15人（森岡移民第49回航海）				
紀洋丸（横浜発）19170729-19170916（カヤオ着）				
	阿部 伊勢吉	サン アグスチン	阿部 ナツ	サン アグスチン
	阿部 一次	〃	阿部 長之助	〃
	阿部 ハルヨ	〃	阿部 長之進	〃
	松ヶ根 政志	〃	達久 テルノ	ローマ
	達久 トシコ	ローマ	田中 サクヨ	〃
	寺島 由之助	カニエテ	菅原 万吉	カニエテ
	小野 祐治	〃	小野寺 卯蘇虎	〃

第52回8人（森岡移民第50回航海）				
安洋丸（横浜発）19170923-19171113（カヤオ着）				
	小関 久四郎	カニエテ	小関 ハナエ	カニエテ
	浅野 喜三郎	サン アグスチン	高橋 雄三	サンアグスチン
	鈴木 茂吉	〃	相沢 清	〃
	橋本 寅治	〃	歳桃 清四郎	ローマ

第53回5人（森岡移民第51回航海）				
静洋丸（横浜発）19171201-19180122（カヤオ着）				
	手代木 卯七	ローマ	瀬戸 直次郎	ローマ
	斎藤 菊雄	〃	佐々木 善兵衛	〃
	桜井 清之進	〃		

第54回4人（森岡移民第52回航海）				
紀洋丸（横浜発）19180124-19180316（カヤオ着）				
	小野寺 賢治郎	サン アグスチン	矢島 一郎	ローマ
	小野寺 サカエ	〃	菅原 栄喜	〃

第55回8人（森岡移民第53回航海）				
安洋丸（横浜発）19180330-19180516（カヤオ着）				
	堺籠 昌	ニヤニヤ	吉川 勝次	ニヤニヤ
	吉川 サキ	〃	若山 十内	〃
	青柳 重吉	〃	佐藤 敏藏	〃
	下道 清治	〃	高橋 義吉	〃

第58回4人（森岡移民第56回航海）				
安洋丸（横浜発）19181009-19181127（カヤオ着）				
	西方 慶七	サン ニコラス	斎 喜久三郎	サン ニコラス
	小野寺 文蔵	〃	小高 茂之丞	〃

第60回1人（森岡移民第59回航海）				
安洋丸（横浜発）19190130-19190315（カヤオ着）				
	高橋 孝治	サン ニコラス		

第62回1人（森岡移民第60回航海）				
静洋丸（横浜発）19190517-19190707（カヤオ着）				
	渡辺 善三郎	ローマ		

第64回2人（森岡移民第62回航海）				
安洋丸（横浜発）19190923-19191114（カヤオ着）				
	佐々木 養七	カニエテ	大槻 三蔵	チクリン

第65回1人（森岡移民第63回航海）				
静洋丸（横浜発）19191118-19200109（カヤオ着）				
	船迫 秀樹	（空欄）		

第66回1人（森岡移民第64回航海）				
紀洋丸（横浜発）19200127-19200317（カヤオ着）				
	加藤 文治	サン ニコラス		

第67回2人（森岡移民第65回航海）				
安洋丸（横浜発）19200326-19200515				
	二瓶 春吉	カサ グランデ	牛渡 馨	カサ グランデ

第68回2人（森岡移民第66回航海）				
静洋丸（横浜発）19200530-19200707（カヤオ着）				
	小室 義弥	カニエテ	小室 コン	カニエテ

第70回1人（森岡移民第68回航海）				
静洋丸（横浜発）19200923-19201112（カヤオ着）				
	佐々木 休三郎	カサ グランデ		

第72回1人（森岡移民第70回航海）				
安洋丸（横浜発）19210330-19210609（カヤオ着）				
	佐々木 久	サン アグスチン		

表7 宮城県人のペルーへの移民（4）（1917年第49回～1921年第72回渡航）

伊藤 力・呉屋 勇編 1974 『在ペルー邦人75年の歩み』を底本に

自由移民・呼び寄せ移民																											
回	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105				
出発日	19240621	19240808						192510-			19260730			19261207			19270320	19270513					19271129				
到着日	19240809	19240924	19240919	19241116	19241218	19250614	19250930	19251230	19260430	19260630	19260915	19260801	19261028	19270118	19270213	19270321	-	19310622	1931.6.22	19270724	19270902	19271012	1928----				
Total (人)	37	30												797			40	93	55	43	22	55	35				

回	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128				
出発日										19281231							19291111	1930----									
到着日		19280402	19280513	19280616	19280728	19280905	19281016	19241125			19290214		19290612	19290723	19290904	19291015	19291121		19300219	19300323		19300417	19300513				
Total (人)				600(88)	50	39	46				18		32	31	22	25	33	32	16	25	25	24	11				

回	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151				
出発日					19301011										19311027												
到着日	19300612	19300701	19300923			19310114	19310220	19310321	19310423	19310616	19310717	19310821	19310916	19311106		19320121	19320211	19320511	1932061	19320613	19320910	19320901	19321003				
Total (人)	10	3	11		4	65	44	21	57	48		25	44	25	47	27	14	44	35	38	81	42	36				

回	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174				
出発日																											
到着日	19321206	19330201	19330309	19330308	19330624	19330803	19330917	19331122	19340105	19340205	19340424	19340606	19340718	19340923	19341109	19341220	19350303	19350412	19350527	19350808	19350913	19351031	19360105				
Total (人)	72	38	50	80	41		36	97	98	70	76	54	76	91	58	128	88	62	149	115	81	129	106				

回	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197				
出発日																											
到着日	19360212	19360325	19360604	19360709	19360822	19361101	19361207	19370125	19370408	19370510	19370703	19370910	19371013	19371206	19380211	19380309	19380503	19380503	19380710	19380813	19381007	19380211	19380114				
Total (人)	114	165	172	141	7	52	37	83	28	48	62	29	1	26	24	16	52	6	26	28	42	46	27				

回	198	199	200	201	202	203																					
出発日																											
到着日	19390217	19390305	19390517	19390618	19390719	19390815																					
Total (人)	6	28	29	29	7	34																					

表8 ペルーへの自由移民と呼び寄せ移民（1923年第83回～1939年第203回渡航）

1923年第83回渡航～1939年第203回渡航までは、自由移民と呼び寄せ移民の形となり、統計上のデータも欠落が目立ち、県単位の移民の動向は不詳である（表8）。日本人同士の助け合いから都市部での商業やサービス業で成功する日本人が現れ、「写真花嫁」の女性たちが大勢ペルーにやって来るなど、1930年代の首都リマ周辺には日本人移民の8割以上が居住するようになった。

ところで、時はさかのぼり、1869年5月に元会津藩軍事顧問平松武兵衛（プロイセン人シュネル）と会津藩士と家族らは米国サンフランシスコに渡航し、最初の移民集落である若松コロニーを作った。当時人口わずか千人のサンフランシスコは、その後ゴールドラッシュによって大きく人口は膨れ上がった。1906年にカリフォルニア大地震が襲い、市内では比較的被害が少なかった地に日本人は移り住み、サンフランシスコ日本町を形成した。しかし、このことは日本人排斥を引き起こす大きな引き金となり、様々な偏見から日本人排斥運動が巻き起こった。日本人学童は公立学校への通学を禁止され、1907年日本は米国への渡航を自粛する紳士協約、その後も排日土地法成立などの動きが続き、帰化不能外国人の移住を禁じる条項を入れた1924年移民法では、事実上、日本人の入国は禁止した。同年、カナダも同様の動きをして、ハワイ準州を含む米国、カナダへの移民、移住は不可能となった（相原・大出2017、浅沼2020、北脇2022、大隅2024）。

1924年、日本政府は国策としての移民、移住先として北米を失ったために、その活路をブラジルなどの中南米に求め、翌1925年には日本政府が渡航費を補助するブラジルへの移民が始まった。ペルー日系人社会約20万（外務省推計2024）に対し、ブラジルの日系人社会は現在190万人に及ぶ南米最大のコミュニティーにまで成長した（浅沼2020）。



写真4 1940年5月13・14日 日本人襲撃事件

(写真提供：Museo de la Inmigración Japonesa al Perú “Carlos Chiyoteru Hiraoka”)

首都リマとカヤオでは、略奪と暴行は2日間、死者1名と負傷者10数名、被害は614件に及び、全財産を失った316名は日本に帰国した。

ペルー日本人飲食店の食べ物には毒が入っているという噂や武器の密輸入に携わっているというデマが新聞なども通して広がった。とうとう1940年5月13日の正午過ぎ、リマの中学生の一群が日本人の商店に対して投石を始め、さらに近所の住民たちが略奪をはじめた。リマ全市での日本人商店・住居に対する暴動が始まり、20時間余りにわたって続いた。ペルー官憲の取り締まりも消極的であり、暴動はさらに郡部への広がりを見せた。14日午前8時に、リマ市内には戒厳令がしかれ、間もなく武装警官や軍隊が出動した。暴動も下火になった5月24日には、リマ地方にMw8.2の大きな地震が発生し、リマで32名、カヤオで58名、ベラビスタで11名の死者と数千の建物の倒壊が発生し、避難所は排日暴動避難民と地震避難民とで大混乱に陥った。

1932年の満洲国建国、1933年国際連盟脱退と、日本は孤立の道を歩んだ。1940年9月日独伊三国同盟の締結から、さらに1941年12月に太平洋戦争が始まると、ペルー政府は日本との国交を断絶し、資金凍結、財産没収等を施行した。翌1942年1月には邦字新聞がすべて発行停止にされた。2月12日、ペルー国は対日宣戦布告と同時に、日本人3人以上の集会と日本語の使用が禁止された。ペルー各地にあった日本人学校は相次いで閉鎖された。1942～45年にかけて在ペルー日本人有力者1,771人は米国収容所へと強制移送された(Museo de la Inmigración Japonesa al Perú “Calos Chiyoteru Hiraoka”から)。日本と同じく同盟国だったドイツ・イタリアに対しては、こうした措置は取られなかった。

米国収容所に送り込まれた一人に秋田県南秋田郡脇本村出身の天野芳太郎がいる。天野は1928年に横浜港を出航し、ハワイ、ロサンゼルス、メキシコを経て、パナマに着く。パナマで天野商会を開業した。その後、パナマを拠点とした事業を中南米各地に展開し、チリ(農場)、コスタリカ(マグロ漁)、エクアドル(製菓業)、ペルー(金融業)に進出した。天野は少年時代に遺跡で土器や石器を収集したことがあり、1935年にマチュピチュ遺跡訪問の折には、野内与吉の案内で1週間の遺跡探索を行っている(稲村ほか2015)。1941年の日米開戦と同時に、米国官憲によりスパイ容疑で逮捕され、バルボア収容所に収容される。パナマ運河を租借する米国は、在パナマ日本人にことごとくスパイ疑惑

ペルー社会における日本人の急速な成功は、次第にペルー人の妬みと嫌悪感を生み出し、次第に排日感情を高めた。その感情はラジオや新聞で繰り返し流され、1930年以降、ペルー政府は立て続けに排日政策を表明した。1932年には企業雇用労働者の80%以上をペルー人と定めた法令7505の制定、1936年外国人居住者を国籍(nacionalidad)ごとに16,000人に制限する大統領令(日本人だけが16,000人を超えていた)が施行された。このためペルー国籍を取得しようとする二世が増えたが、大統領令によって外国籍の子どもの遅れたペルー国籍取得は無効とさ

をかけた。天野の資産は没収の上、1942年には国外退去となった。

戦後、天野はなおも中南米への夢を諦めず、1951年にペルーに戻った。日本に強制送還される前に知人に託した資産を元手に事業を再開した。天野は事業が成功した後、ペルー中部のチャンカイ遺跡の調査に取り組んだ。1956年、東京大学の泉靖一が天野のもとを訪ね、「運命的な出会い」（稲村ほか 2015）を果たした。泉は天野が調査してきた遺物や遺跡に大きく心を動かされ、後に東京大学にアンデス考古学の講座を開設し、日本のアンデス考古学の道を拓いた。天野は1958年に天野博物館を設立し、この年三笠宮のチャンカイ遺跡訪問を賜った。1964年にはリマに博物館を竣工。1967年には皇太子夫妻のご来訪の栄誉に浴した。1982年にリマで死去した。



写真5 天野プレコロンビアン織物博物館

（2024年12月22日 筆者撮影）

三世の H.Sakane 氏が秋田弁で熱のこもった解説をしてくれた。

（2）戦後

日本は焼け野原の敗戦国に、ペルーは間違いなく戦勝国に。一国の首都に世界遺産に指定された旧市街のセントロ（中央）地区に残される膨大な建造物群をみた筆者の第一印象である。

日本語禁止令は1942年2月から終戦をはさんで、1947年6月に解除されるまで5年以上に及び、当地で連綿と続いていた日本語教育は完全に遮断されてしまった。ペルーの日系人があまり日本語を話せないのは、こうした政治と歴史によるところが大きい。

積極的にペルー社会への同化の道を選ぶようになった日系人は、敗戦後の貧しい日本に物資や食料、お金を送る人が増えた。日系二世は高学歴で、医師や技術者、弁護士、薬剤師などが多く輩出し、ペルー社会では日系人の技術への信用は大きく高まった。

1990年、一泡沫候補に過ぎなかった日系二世のアルベルト・フジモリが大統領に就任した。彼のカンビオ（変革）90のスローガンは「誠実、勤勉、技術」であった。同年、日本の入管法改正で日系人の出稼ぎが活性化し、ペルーからも数万人が大挙して日本へと渡った。

2011年5月10日、義援金8,579.50ソル（邦貨約25万円相当）が在ペルー日本大使館に振り込まれた。かつて日本の援助を受けたクスコ州の農民約1,500人が東日本大震災の救援に向けて募金したものである。彼らの一ヶ月の平均所得は約6,100円と決して裕福ではない中での浄財である。

ペルー日系人協会は震災直後から「日本と共に」と題した一連の被災地支援キャンペーンを実施し、「頑張れ日本」と題した日系社会による支援イベントでは日系の若手音楽グループが延べ数千人が観客を集めたという。このイベントの入場料が義援金として送られたほか、日系人らより総額およそ25万ドル（約2千万円）の義援金が在ペルー日本大使館に渡された（外務省 2012）。

(3) 宮城県人のペルー移住 117 年の歩み

ここからは、宮城県人ペルー宮城県人百周年記念誌『Miyagi, Centenario de la Inmigración de Miyagi al Perú(1908-2008) 35 Aniversario de Perú Miyagi Kenjinkai(1973-2008)』に従い、宮城県人のペルー移民の歴史について述べる。
(以下、すべて引用者相原 謹訳)

移民：大地巡歴の証言—移民の歴史的な概要—

宮城県からの最初の移民団 25 人は 1908 年 11 月 14 日に「カラベラス号」に乗ってペルーに到着した。1899 年以降、日本人移民を乗せて着いた 6 番目の船である。

LA INMIGRACIÓN: TESTIMONIOS DEL PEREGRINAR DE UNA TIERRA

Breve reseña histórica de la Inmigración

El primer grupo de inmigrantes de la Prefectura de Miyagi, conformado por 25 personas, llegó al Perú el 14 de Noviembre de 1908, en el barco de nombre "Carabela"; siendo la sexta embarcación que llegara trayendo inmigrantes japoneses desde 1899.

Desde esa fecha hasta el 09 de junio de 1921, se registró la llegada de 453 trabajadores por contrato provenientes de la Prefectura de Miyagi, para laborar en los ingenios azucareros y las haciendas.

Posteriormente, empezaron a llegar en la modalidad de "yobiyose" o "llamado" por sus familiares. Eran jóvenes animados por sus familiares que emigraron al Perú, ubicándose en su mayoría en la ciudad de Lima, abriendo negocios como encomenderías, bazares, restaurantes, entre otros. También vinieron profesores que se instalaron en la zona norte de Lima, dedicándose a la docencia, tal es el caso de Hideo Ohara.

Sin embargo, no todo fue trabajar, hubo quienes dedicaron su tiempo libre al deporte como el baseball o atletismo, surgiendo entre ellos campeones como los hermanos Takeo y Fumio Yamasaki.

Otros dedicaron su tiempo a obras sociales o dirigencias institucionales, siendo reconocidos dentro de la colectividad japonesa y por el Gobierno Japonés con la Condecoración del Emperador del Japón.



Foto tomada en la embarcación Heiyo Maru en 1931, en la que arribaron al Perú provenientes de la Prefectura de Miyagi en Japón, la Sra. Chiyoko Takahashi (20 años) y el Sr. Sakae Nikaido (14 años).



Escuela Japonesa de Supe en la Hacienda San Nicolás (fundado por inmigrantes japoneses)

写真6 LA INMIGRACIÓN:TESTIMONIOS DEL PEREGRINAR DE UNA TIERRA

『Miyagi, Centenario de la Inmigración de Miyagi al Perú(1908-2008) 35 Aniversario de Perú Miyagi Kenjinkai(1973-2008)』 P.34 から

その日から 1921 年 6 月 9 日までに、製糖工場や農場で働くために、宮城県から 453 人の契約労働者が到着したことが記録されている。

その後、親戚から「呼び寄せ」や「呼ぶ」という形で移民は行われた。彼らは家族からペルー移住を勧められた若者たちで、主にリマ市に定住して、食料品店、市場、食堂などの事業を立ち上げた。リマ北部に定住して教育に専念した Ohara Hideo 氏のような人もいる。

しかし、仕事ばかりではなく、野球や陸上競技等のスポーツに自由時間を捧げる者もあり、その中から Yamasaki Takeo・Fumio 兄弟のようなチャンピオンも生まれた。

他の人々は、社会活動や組織のリーダーシップに時間をさき、日本人コミュニティで認められ、日本政府から日本の天皇（Emperador）の勲章を授与された。

〔写真 6 右上〕1931 年、日本からペルーに到着した宮城県の Takahashi Chiyoko さん（当時 20 歳）と Nikaido Sakae さん（当時 14 歳）を乗せた平洋丸で撮影された写真

〔写真 6 右下〕サン ニコラス農園のスペ日本人学校（日本人移民による設立）

曲がりくねった道の証言（TESTIMONIOS DE SINUOSO CAMINO）

ペルーにおける第 1 世代：われわれ高齢者 1 世

① Nikaido Sakae さん ペルー人のところで愛する（querer）ことを学んだ日本人移民

Nikaido Sakae さんは 91 歳ですが、記憶力が非常に鋭く、故郷の宮城で過ごした日々など、人生の些細なことまで思い出すことができます。宮城県、そして 10 代のころに移住し、幸福と未来をつかむことを決意したペルー。

彼は日本の船「平洋丸」に乗って 40 日間の長い航海をしましたが、Nikaido が台所や洗濯を手伝ってくれたおかげで海上での日々はあっという間に過ぎました。彼は船の機械に油を差す責任も負うことになりました。「船がカヤオに到着した時平洋丸の船員たちは私をとってもかわいがっていたので、残って一緒に働くように頼んでくれたのです。」

リマの最初の数年間は、言葉の知識がなかったことと、叔父の食堂で働くために朝 4 時に起きなければならなかったことから、困難を極めました。「食堂の開店前に買い物に出かけていたので、その時間には起きていました。」と彼は完璧なスペイン語で話します。彼の話の聞いていると、日本語が彼の母国語であるとは信じがたいことです。

Nikaido Sakae は、叔父の食堂で 2 年間働いた後、整備士、溶接工、大工、料理人、配管工、レンガ職人、電気技師など様々な仕事を経験しました。彼はリマ、ラオロヤ、タルマで働いていました。

1949 年に、Aizawa Yoshie と結婚し、58 年間の人生を共に暮らしました。彼には 5 人の子ども、11 人の孫、そして 1 人のひ孫がいます。彼の子どものうち、3 人は海外に住んでおり、2 人はペルーに住んでいます。

（Ciria Chaaucá によるインタビュー記事）

（『ペルー新報』2008 年 4 月 3 日号掲載）

プロフィール 1917 年 3 月 5 日生まれ。ペルーには 1931 年、14 歳の時に到着した。

② Ishii Haruko さん 「ペルー来て感謝しています。」

Ishii Haruko さんは、1915(大正4)年5月1日に13人兄弟の9番目として生まれました。「Haruko は意志が強く、とても明るく機知に富み、控えめなユーモアのセンスを持っているので、父親が非常に厳しくなった時に、家族の雰囲気のを和らげてくれました。」姉の Masako さんは回想します。

1937 年 10 月に彼女は Ishii Yoshiji と家庭を築くことを決意し、東京で結婚式を挙げました。「年末に私たちは墨洋丸に乗って横浜から出港しました。私たちは興奮と大きな期待に胸を膨らませていましたが、別れを惜しんでいました。私たちは上から紙のリボンを投げ、それを姉の Masako が船の足元でキャッチしました。私は胸が締め付けられ、涙で目がいっぱい、Masako の姿がほとんど見えませんでした。

彼らは 1938 年 2 月 12 日にカヤオに到着し、リマのセントロ（旧市街）の中央市場近くにある叔父の商店倉庫の隣に住み着きました。

ほんの数年後の 1940 年 5 月 13 日、リマ近郊の暴徒が警察の監視を受けずに日本商店を略奪し始めました。「私は書類、写真、コート、息子の着替えを詰めました。父と他の男たちは建物を守るために入り口と屋根に留まって見張りをしなければなりませんでした。壁は高かったのも、屋根に登るには梯子を二本、結び付けなければなりませんでした。」当時、Ishii Haruko さんは妊娠中で、首から離れない長男のひろちゃんを連れて屋根に登らなければならなかったのです。彼女は無事でしたが、同胞の多くが襲撃され、すべての所持品を失ったと話しています。5 月 24 日に強い地震がリマを襲いました。日本人を虐待したことに対する神の罰だと人々が言ったことを思い出してください。

「1940 年 10 月、私は夢の中で小さな白いねずみを見ました。母が近づいてきて、私を抱きしめ、耳元で気をつけなさい、それは「何か悪いこと」が起こる前兆だからとささやきました。11 月に私は女の子を産みました。丸い顔、サテンのような肌、バラ色の頬をした彼女は、まるで小さな天使のようでした。私は何度も彼女を見て、どうしてこんなにかわいくて完璧な赤ちゃんが生まれたのだろうと考えました。しかし、Rosita Keiko は当時の医学では治せない先天性の病気でした。私は昼も夜も彼女を膝の上に抱き、ほかに何をしたら良いかわからず、むなしく母乳を与えました。彼女が亡くなった後、一言も身振りも私を慰めてはくれませんでした。その年の終わりに日本から手紙が届き、私は読むまでもなく葬儀の報せと知りました。同封された写真には、丸善旅館の正面に立つ弔問客と、葬儀に参列した人々の名前が書かれた横断幕が写っていました。故人：私の母、Masako の夫、そして兄の Goro の娘は、それぞれ別の状況で、近い時期に亡くなっており、私の家族と一緒に葬儀を執り行うことを決めていました。当時、日本からの手紙は船で到着するまでに 1 か月半以上かかりました。10 月に私が見た夢と、母が亡くなる前の昏睡状態は同時に起こっていたのです。その時、彼女は痛みを苦しむ魂 (alma en pena) としてさまよっていたと言われています。私を支えていたのは 2 歳の息子の世話だけでした。」

「第二次世界大戦は私たちに悲しみと不安をもたらしましたが、同時に反省の時でもあり、この新しい祖国に対する私たちの気持ちを強める時でもありました。気づかぬうちに年月は過ぎ、私たちの子どもたちはそれぞれ自分の道を歩んでいました。」「Koke は Ursula Takuma と結婚し、しゅう

ちゃんは Luisa Emi Hirota と、Kaori は Okada Tayushi と。ひろちゃんは 1995 年に亡くなりました。そして Yoko は今、私の母であり、私の姉であり、私の仲間です。」

現在、「私は植物や盆栽への愛着と茶道への献身を続けています。私はペルーの裏千家流派の創作者の一人であり、現在は積極的にその流派に参加してはいませんが、茶道の哲学（調和、尊敬、清らかさ、静けさ）は私の精神を養い続けています。ペルーにいられること、寛大で、素朴で、陽気で、常に他人を気遣う Ishii Yoshiji 先生と人生をともにできたこと、今では家族の一員となった大切な友人たち、そしてお父さん（Papá）と苦楽を共にし、毎日私の人生を充実させてくれる最も素晴らしい宝物である私たちの子どもたち、嫁たち、孫たち、ひ孫たちに感謝しています。」

プロフィール 1915 年 5 月 1 日生まれ。ペルーには 1937 年、22 歳の時に到着した。

③ ROSA FUJISHIMA 日系二世の最初の専門職のひとり

Rosa Fujishima さんはリマ生まれの 85 歳で、うらやましいほど明晰な頭脳を持ち、家族の末っ子さえも憧れる人生を送っています。「孫が言うには、私の毎日はとてもおのんびりしている。好きな時に起きて、好きな時に寝て、働かずに給料をもらい、そして何よりも家事をしなくていいんだ」と、満面の笑みで語りました。

しかし、彼女の人生は常にそのような平穏の中で過ぎていったわけではありません。彼女がまだ 20 歳だった時に、彼女の父親藤島金作、またはカトリックの洗礼を受けた後に名づけられた Jorge は、第二次世界大戦中に捕虜として米国に移送されました。太平洋での戦闘により、真珠湾攻撃後、日本は圧倒的な勝利を収めていたため、アメリカ人はラテンアメリカ人の捕虜と交換し、国外追放をはじめました。

1943 年に父親はテキサスに送られ、終戦までそこに留まり、その時点で彼は釈放され、日本に帰ることを決意しました。父は私たちにこのように手紙を書いた。「大丈夫だと思ったら、戻って来るよ。」しかし、私たちは二度と父と会うことはなかった。1963 年に彼女の父が亡くなるまでの 18 年間、彼女の父親は年に 4 回の手紙を書きました。

金作の強制送還から、母親の Mercedes Jaime は家族の経済的な責任を引き受け、裁縫サービスを提供して自身のファッションスタジオを設立しました。当時、Rosa さんはサンマルコス国立大学の 2 年生でお金が全くなかった困難な時代を覚えています。「私たちはここで放っておかれ、どうやって生き延びたのかわかりません。国立大学では授業料と試験料だけを払えばよく、本は無料で読めるので、幸運にも勉強することができました。働くこともできたかもしれませんが、私の家族は常に私の勉強を中断させないことを優先していました。

彼女は医学を学び、ペルーではマラリアと結核による死亡率が高かったことを覚えています。彼女は奇跡的にそれらの病気にはかからなかったのですが、彼女の三人の兄弟はそれほど幸運ではありませんでした。彼らはマラリアにかかりましたが、何とか回復しました。

Fujishima 博士は逆境を乗り越え、1949 年に学業を修了し、ペルーで最初の二世の専門職の一人

となりました。数年後、彼女は Bobbo Chiessa と結婚し、Carlos と Lucia という二人の子どもが生まれました。彼女の母親は 92 歳で亡くなりましたが、彼女は母の偉大な強さを覚えています。彼女にとっては、物心ついたころから、女性は家族を築いてきたものであり、母親はその最高の手本でした。

聞き手は Joanna Chavamia Loli

プロフィール 1941 年サンマルコス大学入学（17 歳）、サンマルコス大学卒業（25 歳）

③真壁金吉 最初の移民の家族の移民の証言 1908 年到着

真壁金吉氏は宮城県刈田郡蔵王町に生まれ、長く困難な航海を経て、1908 年にペルー共和国に渡った宮城県移民団の一人に加わりしました。



それは日出ずる国（Tierra de Sol Nacient）が経験していた非常に困難な時期でした。真壁金吉は長男として、家族を助けるより良い機会を求めて、ペルーにやって来ました。彼の最初の仕事は、スぺのサン ニコラス農場でした。その後、彼は首都リマに移り、マラビリャス通り（現在のジュニア・アンカシュ通り）に小さなワイナリーをオープンしました。

第一次世界大戦の終わりに、同じく日系移民の清野シオと結婚し、10 人の子どもをもうけました。Katsuko, Enrique, Masako, Umeko, Masato, Teruko, Susumu, Noboru, Kikuko, Yuriko です。

数年後の 1920 年代、アウグスト B. レグイア政権下、真壁はワイナリーを譲渡し、ポーデゴネス通り（現在のカラバヤ）に「Makabe-Iwasa」という小さな絹の輸入会社を設立しました。彼は重病のため、株式を売却して、家族とともにラ・ペ

写真 7 ③真壁金吉夫妻（撮影年不詳）

『Miyagi』（2011, P39 より） 2 月 20 日にそこで亡くなりました。

現在、リマとイカには 200 人以上の子どもたちが住んでいます。

④村上 冬治 最初の移民の家族の移民の証言 1909 年到着

村上冬治は 1909 年、17 歳の時に遠く離れた宮城県角田からペルーにやって来ました。彼は綿花栽培に従事するために、スぺで下船し、パラモンガ - パティビルカのワイト農園に向かいました。

その後、彼はサン ニコラウス農地に移り、その後スぺの町に住み、そこで店を開いて親方の地位に就き、多くの同胞を監督下に置きました。

サン ニコラウスでは、スぺ・サン ニコラウス日本人学校と日本人中央植民地の設立に貢献し、その会長に就任した。彼はまた、スぺ中央植民地の利益のために、多くの活動を行いました。その一つ

が学校、そしてのちにはサン ニコラウス墓地の建設でした。日本ペルー移住 50 周年を記念して、日本政府より勲章を授与されました。

彼は指導者としての地位にもかかわらず、常に謙虚さと誠実さを保ち、日本とペルーの社会の友好関係の強化に貢献しました。彼の店は、日本人を友人とみなす客たちとの出会いと会話の場でした。

Don Fuyuji Murakami には 9 人の子どもがいました。Sachiko、Akiko(Melanino)、Kazuko(Marina)、Etsuo(Victor)、Keiko(Ana) です。ほかの 4 人は亡くなりました。

⑤佐藤直四郎 最初の移民の家族の移民の証言 1909 年到着

佐藤直四郎は 1881 年に生まれ、1909 年 7 月 16 日にペルーのスペ、サン ニコラウス農園に到着しました。

彼は農場の現場監督になった。彼は当時の他の多くの日本人と同様に、1925 年に佐藤アキノさんに写真を送って結婚しました。

アキノさんは両親がおらず、兄弟と厳格な祖母と暮らしていたために一生懸命働き、ペルーのお菓子が美味しいなどと良い噂を聞いていたために、見知らぬ人と結婚するという冒険に出たと語ります。こうして彼女は、果てしなく続くように思えた 45 日間の航海の末、19 歳で結婚してペルーに到着しました。

彼女は夫が自分よりも 25 歳も年上だと知って大いに驚きましたが、運命を受け入れることにしました。5 人の子どもたちに恵まれました。Koichi、Harumi、Hikaru、Chizato、Kumiko です。

Don Naoshiro Sato は、彼女に日々の家事や子育てを手伝ってくれる人を紹介するなど、あらゆる快適さを提供しようと努めました。当時の日本人全員がそうであったように、彼も非常に厳格で、彼の娘たちは休日には田んぼに働きに出かけていました。

佐藤さんは日本に帰国したかったのですが、残念ながら戦争が起こり、お金は没収されてしまいました。彼は第二次世界大戦の終戦直後に亡くなりました。Akino Sato 夫人は、Don Ichinojou Fukumoto(鹿兒島)と再婚し、4 人の娘とともにリマに定住します。この結婚で彼女には Akira(Abel)、Mary Fukumoto Sato(故人)の二人の子どもが生まれました。

⑥佐藤慶三郎 最初の移民の家族の移民の証言 1913 年到着

佐藤慶三郎は、1885 年 7 月 27 日、宮城県富岡村(現在の村田町菅生・川崎町支倉)に生まれました。彼は 1912 年 12 月 17 日に横浜港からカヤオ港に向けて出発し、すぐにパラモンガに向けて出発し、そこで新たな生活をはじめました。

そこでの移民契約を終えたのちに、彼はチャンカイ溪谷にあるエスキベル牧場の職長として働き、仲間の移民の世話をしました。1925 年、彼は山形県出身の犬養フミヨ夫と結婚し、6 人の子どもが生まれました。Estilita、Yoshiko、Adela Yuriko、Félix Hajime、Rosa Haruko、Juan Keiny、Manuel Keizo です。

彼は農業に専念し、チャンカイのローレ農園とカスマのサンラフェル農園の管理者となり、稲作に

専念しました。1935 年、彼はアスコに向かう山中にあるサント ドミンゴという農場を借り、第二次世界大戦が始まるまで綿花栽培に専念し、ニュースや緊急事態にもっと近づくために、首都に移住せざるを得なくなりました。彼はまた、教養があり、知的な性格、同胞への支援、そしてペルー・日本社会への貢献でも際立っていました。

1971 年 1 月 1 日、86 歳で、海外で功績のあった国民に日本政府が与える勲章を受賞しました。彼は 1982 年 7 月 7 日に 97 歳亡くなりました。

彼の息子 Félix Sato Inukay がこの会の会長を務めています。

⑦松野竜次 最初の移民の家族の移民の証言 1913 年到着

宮城県志太郡出身の Manuel Riuji Matsuno は、1913 年 4 月 3 日にラ ダ ウマヤに向けてペルーに到着しました。彼は 1924 年にリマ市に到着し、農業に専念しました。彼はキリスト教徒になり、聖書を研究しながら、スペイン語を学びました。彼はスペイン語だけではなく、日本の書道にも非常に独創的で知識が豊富でした。

1947 年、彼は 4 人の幼い子供 (Julio、Manuel、Juana、Julia) を持つ未亡人佐藤マキ (福島県) と結婚し、彼らの父親となり、絆の強い家族を築きました。彼はバラの栽培に生涯を捧げ、アメリカのロスアンゼルスから「クイーン・エリザベス」や他の品種のバラの原木を持ち帰りました。

彼は青葉懇親会の創立メンバーであり、理事を務めました。彼は 1975 年 6 月 23 日にリマで亡くなりました。



写真 8 ⑦松野竜次とその家族 (撮影年不詳)

『Miyagi, Centenario de la Inmigración de Miyagi al Perú(1908-2008) 35 Aniversario de Perú Miyagi Kenjinkai(1973-2008)』P.43 から

⑧大柳文之助 最初の移民の家族の移民の証言 1915 年到着

大柳文之助は1915年5月13日にペルーに到着し、トゥマン農園で働き、その後リマでダッソ家とともに働きました。18年間の滞在を終えて、彼は当時18歳だった妻の菊池ツエを連れて故郷の古川市に戻りました。家族が語る逸話によれば、文之助氏が初めてペルーに到着したとき、ツエ夫人は日本の古川町で生まれたばかりだったといっています。

リマに定住した後、彼は石炭事業に専念し、その後バリオス・アルトスでホテル事業に携わりました。彼らはその後、5人の娘と4人の息子の9人の子どもをもうけました。Shigueko(Teresa)、Hychan、Taeko (Rosa)、双子の Shigueo(Andrés) と Yoshiko(Lily)、Yaeko(Margarita)、Masao (Enrique)、Yoshio(Tómas)、そして末っ子の Toshio (Carlos) です。

彼の息子の Tomas が2009年から2011年までの本会の現会長を務めています。

⑨柴田幸吉 最初の移民の家族の移民の証言 1916 年到着

多賀城生まれの柴田幸吉は、1916年7月21日、24歳でペルーに到着し、カニエテ農場 (hacienda) で働く契約でした。1年間の虐待と不当な扱いを受けた後に、彼はその場所を離れ、徒歩でサンニコラス農場 (hacienda) に向かいました。

10年後、彼は生まれ故郷を訪ね結婚式を挙げ、ペルーに戻ることを決意しました。この機会に、宮城の同郷人5人が、妻を迎えてペルーに連れて帰るために彼らの写真を預かりました。こうして、1926年末に柴田幸吉・Sun 夫妻と、5人の女性（樋口ツネ：Augusto Higuchi の母、小原ミヤコ：Ernest Obara の母、佐藤アキコ：Hikaru Kawajara と Chizato Sato の母、高橋（カレテリア農場）と女性1人）は日本を離れました。

柴田一家はビント農場に定住し、商業（Tambo 酪農）に専念しました。そこで Yukio (Alejandro)、Yoshio、Nobuko (Julia)、Eiko (Micaela) が生まれ、Shin (Carlos) はリマで誕生しました。第二次世界大戦が勃発すると、彼らの財産は没収され、商人と農家（もち米、さつまいも、他）をするために、彼らはロンカドール農場 (hacienda) に行かなければなりませんでした。

1950年代初頭、家族はバランカとワチョに移り住み、そこで商いと産卵鶏の飼育に専念しました。その後、彼らはリマに移り、チャクラセロで養鶏場を営みました

彼の孫の Juan Carlos Shibata は、ペルー宮城県人会の会長を2001-2003年、2007-2009年の2期務めました。



写真9 ⑨柴田幸吉とその家族（撮影年不詳）

『Miyagi』(2011,P45より)

⑩岡田四郎助 最初の移民の家族の移民の証言 1916 年到着

岡田四郎助は 1916 年 7 月 21 日にカニエテに上陸し、そこで最初の仕事をしました。その後、彼はリマに移動し、工藤さんの店で働きました。彼は岡田ハナヨと結婚し、リマック地区で事業を始めました。この結婚から、6 人の子どもが生まれました。Katsuko、Jumiko、Mitsuko、Hideko、Tadashi、Jorge です。

Mitsuko は Emilio Kawakami と結婚し、7 人の子どもをもうけました。Jorge Okada は当会元会長であり、Nelly Toyohuku と結婚して 2 人の子どもがいました。



写真 10 ⑪樋口松蔵とその家族 (パティビルカで撮影)
(撮影年不詳)
『Miyagi』(2011,P46 より)

⑪樋口松蔵 最初の移民の家族の移民の証言
1916 年到着

樋口松蔵は 1916 年 1 月 15 日に第 41 号船に乗ってペルーに到着し、ラ リベルタ村にある Larco Herrera 家所有のサトウキビ栽培のチクリン農場に向かいました

彼は柴田夫妻とペルーに移住した同胞との結婚を勧められた他の 4 人の女性とともに、1926 年 12 月に日本を離れた大山ツネと結婚しました

彼の息子 Augusto Higuchi は当会会長を務めました。

⑫小原直治 最初の移民の家族の移民の証言 1916 年到着

小原直治は 1916 年 9 月 16 日にカニエテに向けてペルーに到着しました。その後、彼は友人に日本で妻を探してくれるように頼み、同じく宮城県出身の小原ミヤコさんと結婚しました。彼の息子 Ernesto Obara は、宮城県出身の別の移民である阿部伊勢治氏の娘である Eugenia Abe と結婚しました。阿部伊勢治は 1914 年 6 月 9 日にペルーのペルモンガに到着しました。

⑬^{だてきゅう}達久重五郎 最初の移民の家族の移民の証言 1917 年到着

達久重五郎は 1917 年 7 月 16 日に第 50 船「静洋丸」に乗ってペルーに到着しました。妻のテルノさんと娘のトシコさんは、1917 年 9 月 16 日に次の船で到着しました。

彼らはローマ農場に定住し、農場と台所で働きました。ペルーの居住権を取得した後、彼はセロデバスコトラ オロヤを訪れ、そこで調理人として働きました。重五郎さんとテルノさんとの間には 3 人の子どもがいます。Makoto、Satako、Toshiko さんです。

⑭宮内新吉 最初の移民の家族の移民の証言
1917 年到着

宮内新吉は 20 歳でペルーに渡り、その後日本に帰国して永浦タカコさんと結婚しました。数年後、彼は妻とともにペルーに戻り、1936 年 2 月 11 日にカヤオに到着しました。彼は美容師として働き、その後農業を営みました。

彼が初めてペルーに来た時、北部中を旅しましたが、寝る場所がなかったので、墓場に行って、空いている納棺所 (nichos vacíos) に隠れて夜を過ごしました。そして翌日、彼は旅を続けました。彼は死者を恐れてはいけなくよく言っていました。しかし、生きて人間にとっては、誰があなたを傷つけることができるのか、だからこそ彼は墓場にいる方が安全だと感じたのです。



写真 11 ⑭宮内新吉とその家族 (撮影年不詳)
『Miyagi』(2011,P48 より)

⑮^{にさぶろう}工藤仁三郎 最初の移民の家族の移民の証言 1917 年到着

工藤仁三郎は大和ハツエと結婚し、サン ニコラスに向かいました。彼の家族はバランカに定住し、ワイナリーを営みました。彼らには 7 人の子どもがいました。Fumio、Takashi、Yukio、Fusako、Mecky です。

娘の Fumio Kudo は同じく宮城県出身の春日さんと結婚しました。彼らには Guillermo、Esteban、Tadashi Kasuga Kudo という 3 人の子どもがいました。彼の息子 Esteban と妻 Angélica Imamura はこの会の会長でもあり、日系シェフの Hajime Kasuga の両親でもありました。

⑯大村善蔵^{*} 最初の移民の家族の移民の証言 1917 年到着

大村善蔵は 1893 年 1 月 6 日に生まれました。兄弟の末っ子として姉と暮らしましたが、経済的に不安定な状況だったために、24 歳の時にペルーへ出稼ぎに行くことを決意しました。彼はペルーのスペにあるサン ニコラス農場に到着し、サトウキビ農家として働き、早朝から残業まで懸命に働き、貯金をして日本にいる家族に送金しました。9 年後、彼は農家の仕事をやめ、同じ農場にあるワイナリーの経営を引き継ぎました。



写真 12 ⑯大村善蔵とその家族 (撮影年不詳)
『Miyagi』(2011,P50 より)

^{*} 1917 年第 48 回乗船名簿中の「木村善蔵」と思われる。



写真 13 ①菅原栄喜とその家族（撮影年不詳）

『Miyagi』（2011,P51 より）

①菅原栄喜 最初の移民の家族の移民の証言 1918 年到着

菅原栄喜は 1918 年にペルーに到着し、鈴木トシと結婚し、8 人の子どもをもうけました。Hideko (One) Sugawara が長女で、Hideo(Esteban) が長男です。Nobuo、Sadako、Hisao、Sumiko、Kimiko (Yolanda)、Makoto (Ricardo) です。

菅原栄喜さんはタルマで若くして亡くなってしまいましたが、家族は彼が畑で働いていると信じています。

彼の息子の Esteban と Ricardo はこの会の会長を務めました。

①⑧石原久 最初の移民の家族の移民の証言（家族写真のみ掲載）

※乗船名簿に石原姓はない。

①⑨高橋孝治 最初の移民の家族の移民の証言 1919 年到着

高橋孝治は 1894 年 2 月 15 日、宮城県築館村油沢に生まれました。青年時代は大日本帝国騎兵隊に所属し、その功績により勲章を授与されました。彼は同じく宮城県岩ヶ崎村出身の石原シノブと結婚しました。7 人兄弟の 6 番目だった彼は、1919 年 3 月 25 日にカヤオ港に到着しました。彼はサンニコラス農場で働き、後にフニン州ラオロヤのワイナリーで働きました。

彼は第二次世界大戦中、花卉栽培に専念し、最初のバラ栽培者として大きな成功を収めました。彼は 76 歳まで働き、Francisco と Antonio という二人の子どもをもうけました。

彼はラ・ウニオン（団結）スタジアムの共同創設者で、宮城県人会の元会長でもあり、宮城県知事と日本政府から勲章を授与された人物です。彼は 1991 年 12 月 17 日に 97 歳で亡くなりました。

①⑩^{うしわた}牛渡馨 最初の移民の家族の移民の証言 1920 年到着

牛渡馨がカサ グランデ農場に到着した。彼女は写真を通じて知り合った牛渡久さんと「写真結婚」(Shashin Kekkō) し、呼び寄せられた。彼らには、Toshiko、Francisco(Keiji-Kechan)、Manuel(Seiji) の 3 人の子どもがいました。彼女の最初の仕事は美容師でした。その後、花の栽培に専念して卸売業者になり、長年チャクラセロに住んでいました。

牛渡さんが最初に美容師として働いていたところは全員が日本人で、最初の客が来た時、牛渡さんは他の美容師に日本語で「髪はどうやって切ればいいですか。」と尋ねたという逸話が残っています。すると彼らは日本語で「頭の部分をメロンだと思って、切ってみなさい」と答えました。顧客は椅子から立ち上がり、日本語で髪をメロンのように切りたくないと言いました。

②① SHIRO AKAMA DOI 最初の移民の家族の移民の証言 1926 年到着

赤間四郎は妹のマサミを連れて、18 歳でペルーに到着しました。彼は 1975 年までピリェイナ通りにある Suzuki Yousuke 一家の市場で働きました。

彼は福島県出身の日系ペルー人である Yoshikawa Hisako と結婚し、2 人の子どもをもうけました。彼の息子 Mario は当会元会長です。

②②山崎文十郎 最初の移民の家族の移民の証言 1928 年到着

山崎文十郎は宮城県白石町出身で、1928 年 12 月に妻のミヨノと 3 人の子ども（17 歳のフミオ、15 歳のタケオ、13 歳のハルコ）の大家族とともに、ペルーに到着しました。ペルーに到着してから 4 か月後に文十郎は亡くなり、彼らは大きな困難に陥りました。息子たちは日本企業の社員として働かなければなりませんでした。その後、時が経ち、彼らは独立し、自らのビジネスを始めました。彼の娘のハルコは洋裁師としての仕事に専念しました。一方、息子のフミオとタケオは陸上競技、野球、剣道などのスポーツで優秀な成績を収め、日本人社会で頭角を現しました。

フミオは Antonio Fusae Endo と結婚し、6 人の子どもをもうけました。Graciela、Carmen（宮城県人ペルー国移住百周年記念委員会の会長）、Augusto、Pedro、Olga、Isabel Yamasaki Endo です。

タケオは Rosa Fujie Endo と結婚し、4 人の子どもをもうけました。Ricardo、Antonio、Victoria、Jorge Yamasaki Endo です。後 2 者はこの会の会長になっています。

ハルコは Bunji Yamasaki と結婚し、農園（granja）に専念しました。9 人の子どもたちに恵まれました。Dora、Amelia、Rosa、Isabel、Teresa、Raui、Elena、Luis、Ana Yamasaki です。



写真 14 ②②山崎ミヨノ夫人（写真中央）とその家族（撮影年不詳）

『Miyagi』(2011,P55 より)



写真 15 ②小原英夫とその家族（収容所・テキサス州）
（1946 年撮影）

②小原英夫 ^{おはら} 最初の移民の家族の移民の証言
1930 年到着

Luis Hideo Ohara は 1930 年にペルーに到着し、バランカに定住し、教師としての使命 (vocación de profesor) を遂行しました。

第 2 次世界大戦中、ペルー政府が日本人を追放していることを知ると、彼は馬小屋に隠れました。しかし、家族全員が送還される可能性があるを知ると、彼は当局に出頭し、米国のテキサス州に移送されました。1946 年に写真撮影された場所です。

ペルーに戻り、日系新聞『ペルー新報』の日本語部に勤務しました。彼はペルー日本人学校「ラ ビクトリア」の校長を務めました。彼はペルー日本文化センター日本語部門の創設者および教員であり、ペルー日本商工会議所の事務局長でもありました。彼はまた、ペルー宮城県人会と積極的に協力し、10 年間日本語記録担当書記を務め、1976 年から 77 年にかけては会長を務めました。

② Hajime Abe 最初の移民の家族の移民の証言 1930 年到着

Hajime Abe は 1930 年 2 月 15 日、18 歳で日本から到着しました。彼はレテス農場に住み、農業を営んでいました。日本では、ペルーにいた Hajime Abe が Kimi Abe さんと結婚することで阿部家と伊藤家が合意しました。結婚は委任状によって行われました。結婚して数年後、Kimi Abe は 1935 年船「支那丸」に乗ってペンドにやって来ました。彼らはレテス農場に定住し農業を続けました。

彼らは 7 人の子どもがいました。Teresa、Lucía、Felicita、Marcela、Carmen、Santiago、Ernest (故人) です。第二次世界大戦が勃発すると、彼は農場を没収され、新しい所有者のもとで従業員として働きました。戦争が終わった後、彼らはリマのサン ファン デルリガンジョ - カンタガジョに移住し、1945 年まで農業警備員として働きました。1951 年に Hajime Abe が 38 歳で亡くなったため、3 人の子どもは親戚に引き取られてワラルに移り、そこで育てられましたが、4 人は Kimi Abe とともにワルカヨに残りました。

1962 年に彼らはついに再会を果たし、ワラルで一緒に暮らすことができ、そこに定住しました。Kimi Abe 夫人はチャンカイで最後の日々を過ごし、1999 年 4 月 22 日に亡くなりました。

② Chiyoko Takahashi 最初の移民の家族の移民の証言 1931 年到着

Chiyoko Takahashi は宮城県に生まれ、20 歳の時にペルーに移住しました。夫とともにラ オロヤに定住し、二人ともビジネスに専念しました。彼らの子どもたちもそこで生まれましたが、そのうちの一人は鉱山活動によって引き起こされた非常に汚染された環境の影響に苦しみました。

第二次世界大戦が勃発すると、繁盛していた事業は没収され、全財産を失った高橋一家はラ オロヤから立ち退くために、3 日間の猶予を与えられました。彼らはタルマに避難しましたが、そこには仕事はありませんでした。家族の友人であるペルー人の司令官が彼らに 8 頭の牛を貸し出してくれ、それがきっかけで彼らは牛乳を売るようになり、のちに利益が出る牛舎になりました。

困難を乗り越えて高橋一家はリマに定住し、Chiyokoさんはペルー日系人協会（APJ）の神内良一高齢者プログラムに最初に参加した 1 人です。

（『Perú Shinpo』2004 年 7 月 28 日版 抜粋）

4. ペルー宮城県人会の歩み

『Miyagi, Centenario de la Inmigración de Miyagi al Perú (1908-2008) 35 Aniversario de Perú Miyagi Kenjinkai (1973-2008)』によれば、ペルー宮城県人会は、日本人がペルーに移住した初期に、日本人が集まって互いに助け合っていた頃に遡り、第二次世界大戦後に青葉十字運動の要請を受けて設立された「青葉懇親会」を経て、1973 年に改めて宮城県人会に改組されたことがわかる。

ここでは、「青葉懇親会」成立以前の宮城県人会を第 1 期宮城県人会、「青葉懇親会」を経て成立した宮城県人会を第 2 期宮城県人会と区別して、その歩みをたどることとする。

（1）第 1 期 宮城県人会

『アンデスへの架け橋』（日本人ペルー移住八十周年祝典委員会編 1982）には、「県人会」の筆頭に、「宮城県人会」を挙げている。

〔創設〕1915 年 1 月 13 日、初代会長・玉平源衛、〔会員数〕125 名、〔役員〕名誉会長・星山クニ、名誉会員・石森元彦、顧問・高橋孝二、渡辺茂雄、相談役・小原秀夫、菅原英夫、大村アキーレス、会長・佐藤フェリクス、副会長・高橋フランコ清、幹事長・渋谷ホルヘ、会計・山崎ペドロ、同補佐・山崎ホルヘ、会計監査・小原英夫、菅原英夫、書記（日語）・小原英夫、書記（西語）・赤間マリオ、救済部長・春日アンヘリカ、文化部長・宮内カルメン、地方役員（チョシカ）宍戸夏代、同（バランカ）高橋正志、同（タルマ）高橋弘、同（イカ）間壁金一、（ワラル）守谷テオドロ。

赤城 1997 の調査によれば、1915 年 11 月 10 日は大正天皇の即位の礼が、京都御所で行われた日であり、この時点で存在していたペルー日本人組織 8 団体（日本人協会、秘露日本人会、リマ理髪同業組合、カヤオ理髪同業組合、古物商同業組合、商業組合、宮城県人会、沖縄県人会）によって分掌され、祝典は大成功を収めたとする。福島県人会の設立が、1915 年 12 月 9 日であり、県人会の中では、宮城・沖縄^{*}に次ぐ 3 番目の発足となった（赤城 1997）。ちなみに「山形県人会」は 1917 年 11 月 3 日である。この 11 月 3 日は明治天皇の誕生日の天長節にあたっている。

宮城県人会が設立された 1915 年 1 月 13 日は、筆者の調べでは、明治神宮奉賛会創立準備委員会（於商業会議所）神宮奉斎の件が 16 日（時差あり、ペルー 15 日）に行われており、その直前の発足となっている。1 月 23 日には、渋谷栄一が地方官会議に出席し、明治神宮奉賛会設立につき、各地方より

援助を乞う旨の演説を行っている。

福島県人会→福島クラブ→福島県人会について考察した赤城 2017 によれば、当時日本人社会で問題化していたのは、移民会社の農地から自由となった日本人の一部が流民となって、リマに押し寄せ、「救護すべき困難民」と化していたことである。ドスデマーヨ慈善病院では年間 8000 床のベッドを日本人が占める事態となっており、応分の寄付を日本人社会に要求していた。福島県人会創立 15 周年記念誌では「大正 4 年創立当時より同 8 年までの五か年間は、全く救済にのみ重きを置き、同県人の入院手続きより死亡者の手続き、不具者の内地送還等にて、殆ど消極的活動」と振り返っているが、宮城県人會にも救済部が置かれており、ほぼ同様の状況にあったと推察される。中央組織の 1912 年設立の日本人協会と 1914 年設立の秘露日本人会は対立することが多く、1917 年に中央日本人会に統合された。県人會は公使館・領事館を頂点とするヒエラルキーの中に取り込まれ、中央日本人会の下部組織となり、ペルー日本人社会は個人単位ではなく、県単位で把握されるようになっていった。

1930 年以降になると、ペルー政府は立て続けに排日政策を表明し、特に 1942 年には、ペルー国は対日宣戦布告と同時に、まず日本人 3 人以上の集会と日本語の使用が禁止された。日本人の各団体、頼母子講は自然消滅したとされる。1942～45 年にかけては、在ペルー日本人有力者は米国収容所へと強制移送され、日本人社会を支える主だった人たちもペルーに残留することはできなかった。

※ペルー沖繩協会の発足は 1906 年 7 月 28 日(この日はペルー独立記念日)とする資料(エンリケ 2020)もある。この場合、沖繩県人会が最古の県人会である。ただし、沖繩県人の最初の渡航は第 3 回渡航の厳島丸(沖繩県人 36 人)であり、この船は 10 月 16 日発、11 月 21 日着と、7 月 28 日は日本からまだ出航すらしていない。

(2) 青葉懇親会 (Club Aobakonshinkai)

1945 年 11 月、米国のサンタ フェ収容所の日系人 100 名を皮切りに、米国抑留中の邦人の日本ないしはペルー帰還が始まった。1947 年 3 月には在秘沖繩人會の復活をはじめ、同年 6 月には日本人 3 人以上の集会と日本語の使用が解禁され、県人會ほかの日系組織の再開が相次ぐようになった。

宮城県人移民 100 周年記念誌によると、第二次世界大戦後に発足した「青葉十字運動」の要請により、「青葉懇親会」*が設立された。この青葉懇親會が、第 2 期宮城県人會の直接の母体である。

宮城県出身の日本人は、戦争による破壊に直面した同胞の苦しみを知らない者はおらず、「青葉懇親會」として団結し、当時の他の日本人コミュニティーにも協力を依頼し、多額の義援金を集めて日本に送ることに成功した。

戦後の宮城県では、1947 年 9 月にカスリン台風により死者 10 名、流失家屋 106 戸、田畑被害 6 万町歩の甚大な被害を出しており、同年 10 月 30 日に結成された「宮城県水害復興會議」を母体に、河北新報社の協力を得て、1948 年に「山に緑」を復活すべく、青葉十字運動本部(本部長 虎岩吉雄)が宮城県町村長会内に設置されている。

※河北新報社 1998 では、「県出身者が初めてペルーへ渡ったのは 1908 年(明治 41 年)。15 年(大正 4 年)に「青葉懇親會」として県人會を発足させた。」とし、最初に設立されたのが青葉懇親會で戦後、ペルー宮城県人會になったとするが、前節に記した史料、および福島県人會など他県人會の動向からも、1915 年に「青葉懇親會」として発足したとは考えられない。

(3) 第2期 宮城県人会 1970年8月に石森元彦が「リマ日本語講習会」2代校長として赴任すると、1971年1月に「リマ日本人学校」に改称し、同年6月には認可を受けた。また、石森は青葉懇親会から「ペルー宮城県人会」に改称することにし、日本の宮城県庁の承認を得て、1973年2月18日にペルー宮城県人会は発足した。初代会長は Koichi Suzuki 氏、名誉会長には石森元彦氏を推挙した。1973年は宮城県制百周年、日本ペルー外交関係樹立百周年にもあたる絶好の機会であった。

この会の目的は、会員とその家族間の親睦を深め、生活水準を向上させ、健康の増進に努め、病気や不幸に苦しむ会員をできる限り効果的かつ迅速に援助し、さらに祖国（日本）と故郷（宮城県）の間の文化交流を促進し、ペルーと日本の友好の絆を強めることに寄与するとした。

1979年には、宮城県人ペルー移住80周年記念式典が、山本壮一郎宮城県知事以下62名の代表親善使節団とともに、盛大に開催された。使節団はペルー宮城県人会を訪れ、県行政との連携を強化した。

ペルー宮城県人会は、宮城県が行う各種公式行事に対応する唯一の公式団体である。宮城県からの多額の補助金、会費、寄付金、募金活動により、ペルーニッケイコミュニティの文化・スポーツ事業への参加、国立機関への社会支援活動等を通じて、先祖の文化を広める活動を行って来た。2009年には宮城県からの補助金の額が増額され、年間予算を賄えるようになった。

①敬老年金 宮城県生まれの70歳以上の高齢者に毎年支給される現金給付。2009年廃止。全54名。

②里帰り 宮城県生まれ、過去30年以上帰国していない70歳以上の高齢者1世。1995年廃止。全9名。

BENEFICIOS RECIBIDOS DE LA PREFECTURA DE MIYAGI

Becarios de estudios universitarios y de estudios técnicos de capacitación

RYŪGAKUSEI BECA UNIVERSITARIA			KENSŪSEI BECA TÉCNICA		
Nº	Nombres	Año	Nº	Nombres	Año
1	Noda Datekyu, Toshimi	1973	1	Suzuki Kitayama, Rosa Takako	1973
2	Ishihara Ono, Juan	1974	2	Asano Uno, Luis Yuriko	1974
3	Mitsuy Horigome, Fernando	1975	3	Sato Yrukay, Félix	1974
4	Omura Fujie, Aquiles	1976	4	Susuki Susuki, Tomás	1975
5	Yamasaki Endo, Jorge	1978	5	Akama Yshikawa, Mario	1977
6	Ishihara Ono, Luis	1979	6	Yamasaki Endo, Pedro	1978
7	Sato Kuroda, Rafael	1982	7	Miyauchi Miyauchi, Carmen Rosa	1979
8	Gil Kodaka, Patricia Liliana	1984	8	Ogawa Ogawa, Mery	1980
9	Kudo Honma, Roberto	1986	9	Kojima Suzuki, Armando Takashi	1980
10	Okada Toyofuku, Karian Rocio	1988	10	Abe, Gustavo	1982
11	Suzuki Honma, Arlene	1989	11	Funato Aizawa, César Augusto	1983
12	Omura Shironoshita, Victoria Isabel	1990	12	Maruyama Horigome, Mónica	1986
13	Dextre Morimoto, Eduardo	1992	13	Kawajara Sato, Oscar	1987
14	Omura Shironoshita, Gladys	1993	14	Higuchi Toyama, Esteban	1989
15	Susuki Kuboyama, César Gabriel	1994	15	Shibata Okumura, Juan Carlos	1991
16	Kodaka Diaz, Rocio del Pilar	1998	16	Sakuray Horigome, Erika	1993
17	Sugajara Mitsuzuka, Juan Carlos	1998	17	Kasuga Imamura, Esteban Hajime	1995
18	Watanabe Iwaguchi, Ana Esther	2000	18	Sato Sato, Liliana	1995
			19	Higuchi Toyama, Susy Vicky	1996
			20	Nishimura Yamasaki, Javier	1997
			21	Kamiya Shibata, Ana Maria	1998
			22	Horigome Taniguchi, Emy Carol	1999
			23	Kawakami Arredondo, Rocio	2000
			24	Nakagawa Yamasaki, Maria Andrea	2001
			25	Sugajara Mitsuzuka, Jessica Paola	2002
			26	Yamasaki Kcaml, Luis Aldo	2002
			27	Shibuya Nakandakari, Jorge Akira	2004
			28	Kawakami Kanna, Andrés	2005

表9 宮城県から受けた給付金

左：留学生（大学奨学金）

右：研修生（技術奨学金）

『Miyagi』(2011,P78より)

③留学生（大学奨学金）表9左

1973年に始まり、2000年まで、18名が恩恵を受けた。具体的な留学先は記されていないが、この制度により東北大学医学部で学んだという医師から新年会では直接、話をうかがうことができた。

④研修生（技術奨学金）表9右

1973年に始まり、2005年まで、28名が恩恵を受けた。

1995年度奨学金を受けた Hajime Kasuga 氏 (No.17) は仙台プラザホテルで研修し、帰国後はリマの高級レストラン HANZOU（半蔵）で板前料理に腕を振っている様子（『ペルー新報』2008.4.3）の

記事が、百周年記念誌に転載 (P.79) されている。

2004 年には石森元彦作詞・Kyoko Kosaki 作曲による HIMNO DE PERU MIYAGI KENJINKAI (ペルー宮城県人会会歌) が制定された。2005 年には編曲、訳詞が加えられた。

2008 年 11 月 30 日に首都リマで、宮城県人ペルー移住 100 周年記念式典は開催された。午前 11 時に Jisen Oshiro (大城 慈仙) 師が先没者追悼法要を行った。続いて、式典 (ceremonia protocolar)、会食 (almuerzo buffet)、余興 (show artístico) が行われた。この式典には、目賀田周一郎 駐ペルー日本国特命全権大使、宇田川雅幸 駐ペルー日本国領事、日本ペルー協会 César Tsuneshige 氏ほか、ペルーの日本人コミュニティを代表する多くの皆様のご出席を賜った。

おわりに

ペルー宮城県人会も 1973 年に再発足してから、すでに 50 年以上が経過した。県人会を取り巻く環境も大きく変化し、また加速している。昨年、アルベルト・フジモリ元大統領と青木盛久元在ペルー全権大使が相次いで亡くなった。2024 年は時代を画する大きな節目として記憶されよう。

時代がどんなに変わっても、同じ歴史を歩んで来た宮城県人、東北人の一人として、これからも皆さんとの絆を大切にし、ともにありたいと願っている。

なお、皆さんから頂戴した百周年記念誌は、宮城県立図書館、国立国会図書館、あるいは APJ の図書館で検索をかけても見出すことは出来なかった。私のような個人が持つべき性質の本ではなく、貴重な公共の財産として保持すべきものである。帰国次第、宮城県立図書館に寄贈し、多くの皆さんの閲覧に供するとともに、蔵書として末永く保管していただきたいと考えている。

皆様の益々の弥栄を心から祈念し、搁筆する。



写真 16 宮城県人ペルー移住 100 周年記念式典
(2008 年 11 月 8 日 Hotel Lima Sheraton の Salón Emancipación- 奴隷解放大広間 - にて)

謝辞 下記の関係機関、個人から特段のご教授やご配慮を賜った。記して謝意を申し述べるものである。

ペルー宮城県人会 チクラーヨ日本人会 ASOCIACIÓN PERUANO JAPONESA (APJ)
 Museo de la Inmigración Japonesa al Perú “Carlos Chiyoteru Hiraoka” 宮城県立図書館
 AMANO Museo Textil Precolombino Academia de cultura japonesa (リマ日本人学校)
 Isabel Omura 氏 Hiroshi Sakane 氏 富澤厚氏 植木リカルド氏 花井亜由美 크리스氏

引用参考文献

- ASOCIACIÓN PERUANO JAPONESA 編 1999『CENTENNARIO DE LA INMIGRACIÓN AL PERÚ』JICA
- Miyagikenjinkai2011『Miyagi, Centenario de la Inmigración de Miyagi al Perú (1908-2008) 35 Aniversario de Perú Miy enjinkai (1973-2008)』, Ymagino Publicidad S.A.C., Lima
- 相原淳一 1996「土器出現期に農耕社会へ 『黄金の都 シカン発掘展』(下)」『河北新報』8月15日朝刊, 河北新報社 (8月15日、仙台)
- 相原淳一 2000a「土器 文様に神々を意識 『悠久の大インカ展 アンデスの遺産 (上)』」『河北新報』3月7日朝刊, 河北新報社 (3月7日、仙台)
- 相原淳一 2000b「織物 遺体を包んで埋葬 『悠久の大インカ展 アンデスの遺産 (中)』」『河北新報』3月8日朝刊, 河北新報社 (3月8日、仙台)
- 相原淳一 2000c「いけにえ ミイラ発見相次ぐ 『悠久の大インカ展 アンデスの遺産 (下)』」『河北新報』3月9日朝刊, 河北新報社 (3月9日、仙台)
- 相原淳一・大出尚子 2017「北村千代治小伝―海を渡った考古学者―」『東北歴史博物館研究紀要』18, pp.27-58
- 浅沼正和 2020「排日移民法とハワイの日系人」『ALOHA PROGRAM』ハワイ州観光局 (<https://www.aloha-program.com/>)
- 赤城妙子 1997「呼び寄せネットワークと県人意識の形成―リマ在住福島県人の事例を通して」『リマの日系人―ペルーにおける日系社会の多角的分析―』明石書店
- 天野芳太郎 1983『わが囚われの記 第二次大戦と中南米移民』中公文庫 M 214、中央公論社
- 石川達三 1935『蒼氓』『星座』新早稲田文学 (第1回芥川賞受賞作、改造社・三笠書房ほかから出版)
- 伊藤 力・呉屋 勇編 1974『在ペルー邦人75年の歩み』ペルー新報社、リマ
- 稲村哲也・大貫良夫・森下矢須之・野内セサル良郎・阪根博・尾塩尚 2015「古代アンデス文明と日本人―放送大学特別講義と展示会」『放送大学研究年報』第33号, pp.79-95
- 宇野量介 1969『戦後の宮城教育を語る』宝文堂
- エンリケ・ヒガ・サクダ 2020「ペルー沖縄県協会、110年の歴史」『ディスカバー・ニッケイ』(<https://discovernikkei.org/ja/journal/2020/10/16/aop/>)
- 大隅 洋 2024「総領事便り 16 ～もう訪れましたか？ 先人の道程を辿る 11 の日米近代史跡～」『総領事館便り』16, 在サンフランシスコ日本国総領事館
- 外務省 2012「コラム 東日本大震災の復興に対する各国からの支援：ペルー」『評価結果の概要』 p 35
- 賀川真理 2019「アメリカ政府による日系ラテンアメリカ人の強制連行と戦後補償―市民自由法制定から30年を経た今、点から線へ(前編)―」『阪南論集 社会科学編』vol.54.No.2

- 河北新報社編 1967「昭和・戦後編」『河北新報の七十年』, pp.100-101, 河北新報社
- 河北新報社 1998「宮城県出身者のペルー移住 90 周年／先月、リマで県人会が式典／きずな深める」『河北新報』平成 10 年 12 月 30 日付朝刊 18 面, 河北新報社
- 北協実千代 2022「「ワカマツ・コロニー」以後の人の移動とネットワークー柳澤米子の場合ー」『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 2021 年度』16, pp.29-47
- 熊谷晃子 2019「マチュピチュ村を作った男 野内与吉とペルー日本人移民の歴史」『海外移住資料館だより』No.51, 独立行政法人国際協力機構 横浜センター海外移住資料館
- 国立国会図書館 2008『ブラジル移民の 100 年』電子展示会 (<https://www.ndl.go.jp/brasil/greetings.html>)
- 小波津ホセ 2023「第 2 次世界大戦後のペルーの日本語教育ー ペルー日本語教師会会誌『アンデス』を事例にー」『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 2022 年度』17, pp.33-51
- 在日ペルー大使館 2008『ペルーにおける日本人の考古学的貢献の半世紀』在日ペルー大使館
- 坂本正敬 2023「「受難のペルー移民史」100 年前に南米へ渡った北陸人の物語」『HOKUROKU』(https://hokuroku.media/feel_better/15372.html)
- 島田泉監修 2017『ANCIENT CIVILIZATION OF THE ANDES 古代アンデス文明展』
- 丹野栄二 1981「新国際県人録⑧ 宮城県の巻」『海外移住』2 月号(通巻 394 号) pp.4-5 国際協力機構(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2848187>)
- 日本人ペルー移住八十周年祝典委員会編 1982『アンデスへの架け橋 日本人ペルー移住八十周年記念誌』日本人ペルー移住八十周年祝典委員会
- 野内セサル良郎 2015「マチュピチュと野内与吉の物語」『東京大学総合学術博物館ニュース』Vol.19-No.3
- Hisano 2023「ペルーに日系人が多いのは何故?」『ラテンアメリカちゃんねる』(<https://www.youtube.com/watch?v=h17QBKVU1OQ>)
- 堀江剛史 2003a「ペルー 南米初の日本人入植地＝あゝカニエテ耕地(上)＝ある 2 世の不思議な体験＝「地獄(カニエテ)で」死んだ仲間の供養を」『Journal ニッケイ新聞』4 月 9 日版, サンパウロ
- 堀江剛史 2003b「ペルー 南米初の日本人入植地＝あゝカニエテ耕地＝中＝一年で半数以上が病死＝「棺桶が間にあわない」」『Journal ニッケイ新聞』4 月 10 日版, サンパウロ
- 堀江剛史 2003b「ペルー 南米初の日本人入植地＝あゝカニエテ耕地(下)＝誇りとルーツを見直す場＝ペルー日系人の心の故郷」4 月 11 日版, サンパウロ
- 宮城県海外協会編 1969『海外移住に牽かれた人々』宮城県
- 宮城県海外移住家族会創立 30 周年記念事業委員会編 1992『海外移住家族会 30 年のあゆみ』宮城県海外移住家族会
- 宮城県教育委員会編 1975『宮城県教育百年史 第 3 巻』帝国地方行政学会
- 宮城県町村会編 1992『宮城県町村会七十年史』宮城県町村会
- 柳田利夫 2013「ペルー日系二世の短歌と戦前期の日本語教育ー 里馬実科高等女学校と日系婦人会文芸部「椰子の実短歌会」ー」『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 平成 24 年度』7, pp.21-42
- 柳田利夫 2019「田中貞吉再考ー 日本人ペルー移住とラテンアメリカの富源ー(上)」『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 2019 年度』14, pp.37-68
- 柳田利夫 2022「田中貞吉再考ー 日本人ペルー移住とラテンアメリカの富源ー(中)」『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 2021 年度』16, pp.49-104

第 17 回宮城県考古学会阿武隈水系研究会
発表予稿集

発行：2025 年 4 月 22 日

編集：佐藤 充・相原 淳一

宮城県考古学会阿武隈水系研究会

誤訂版：2025 年 12 月 6 日

※裏表紙写真は福島県伊達市梁川橋から（撮影：佐藤 充氏・2025 年 3 月 27 日）

